

消閑雜抄

三

大正十五年四月上浣起筆

特別
14
1919
381



176649

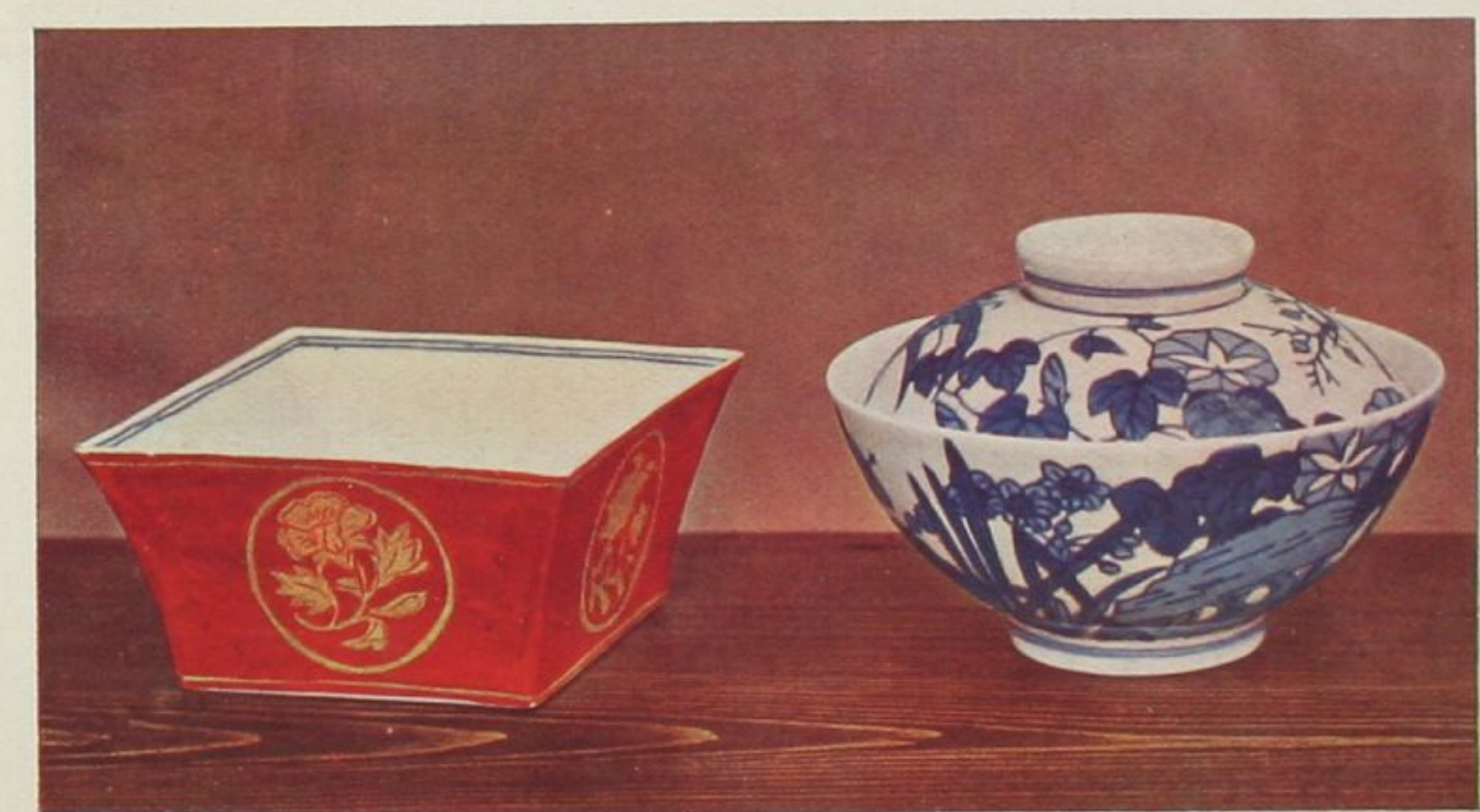
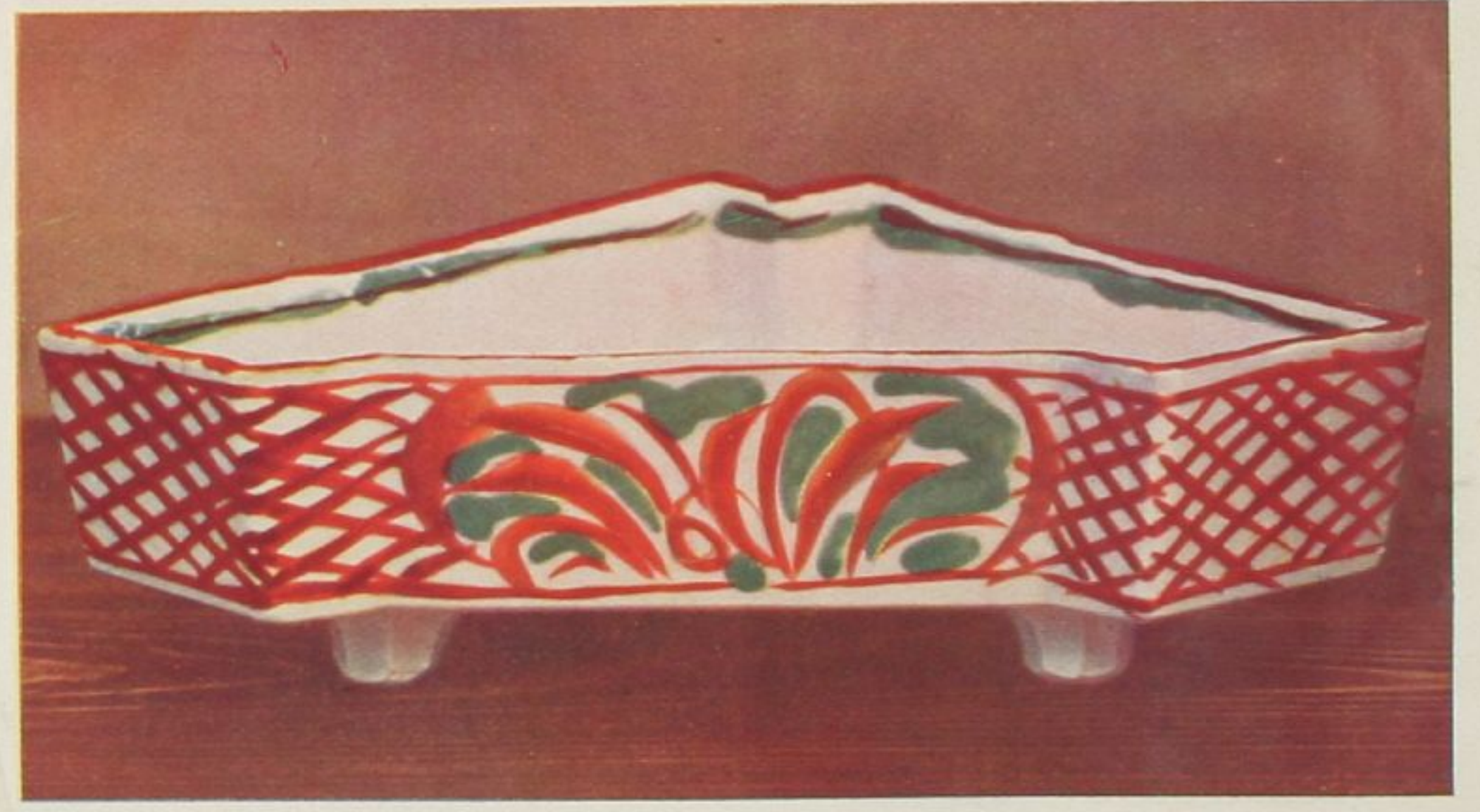
三
乙
几
君
の
名
八
序
文
の
内
に
残

カヤリ

28= 9170



(一)



176649



つと心者の名ハ序文の内ニ残

雄 儀 村 川



圖 樂 歡 下 花

清洲旅物語三

大正十五年四月上浣起筆



○四月二日 坊間の出陣を廻り二三日の圖書を
得る中、右の一巻あり

一世保論の演

五冊

誘を遊るゝ短文をつゝりて趣
向やぶしきくおしと全る回功也
唯れ此者ハあそゝ出るゝものニ付ヤ
ぶしに傲ふもゝあるゝん天の六年
京の六角高直并尾市兵衛叔
つゝ心者の名ハ序文の内、残

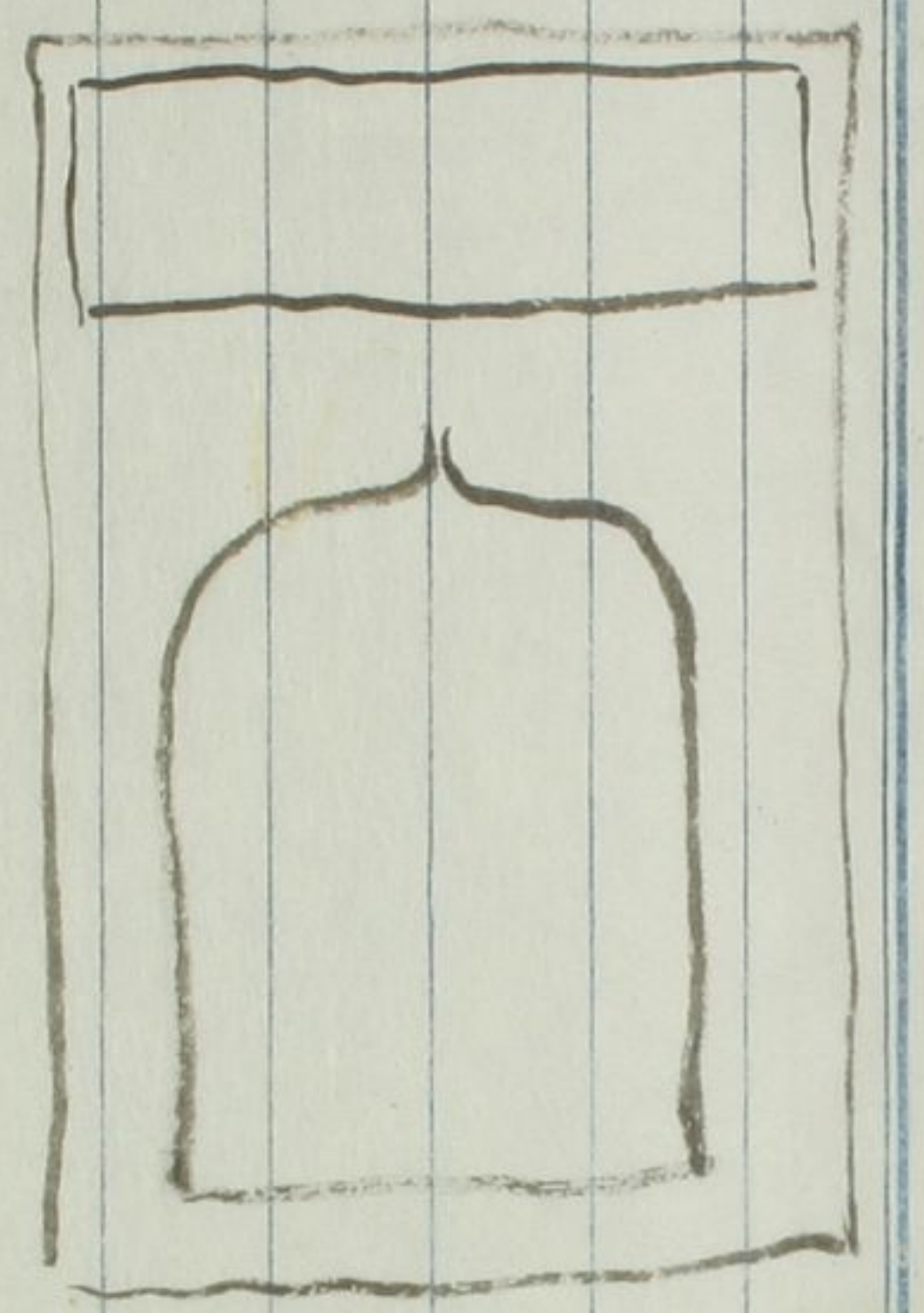
美子とあるの文も何人か評からるも
中々固あり、これ七や八と倣ひし
とんやぶと雖も間七と云ふ之れも
得たり、仮に云ふも稀なる也

○拙著頼山陽の六版を出すにあつて初め毎本の
増補を加へんと、都の行を属し、九十枚を以ての
が出来、開校以来、他方から寄せて来た材料
の内、増補し得るもの、五十五件、五とあるや、
巻首：入るべき字、四枚あり、巻尾：附
へき漢文の方後が一通あり、増補の文ハ流
るゝ二十七八頁、もろもろ、公刊せん

新編の巻尾の批評中、誤謬を指摘し、
あるが、訂正の便宜す時の他、私
信の字をせり、材料と折る、編ん
れ材料のみを取ること、小冊子
可き厚い紙から、二三十頁と
山で、とんやぶと雖も間七と
、訂正文を加へると、十頁、紙
者、とんやぶが興味を添へ、
を他日体裁を一新して、後
のこころし

○昨年の末、冬みぢが暫く来り、
を余も求め、頼三樹の、城後

一見正しいから内合をよ
 七續きううらめや 四の葉と元はすまふ 日東
 之華は旋後こぶ丸が靴を靴と此者前金の全文
 を讀んで見るとおもひにおかしうく歌讀ゆ
 交つてみよ 乃父をつくりのちき振るひあるのち氣
 三樹が城後入つて記すも増補中
 あるから 此者前も序はぬること
 ○杉平の味が誇りし工人如泥の遺言が芝の
 新華館の二階の室の床脇に坐す重くんしあ
 ることを知るうらめや 一見正しいから内合をよ
 かつたか 前のおまじ 飾り比折、りざと一讀し
 以全形と左回の如く 上頭の間、麻の葉の



透し堀りがあるが、彫り方
 ハ印をなすくると朱白あり方
 錯綜してあり、白の彫り方
 ハ彫りぬきく穿ぬぬ葉
 ハ極めを流し出来てぬき
 割合に深みのあるものと

一とくもコンナに彫つたものと感服しはか、まはるゆ
 朱の方を教つたてん、ウツカリ見ると木地の表面は滑
 彫があるか、見ると日光に照らすと見え
 本校の他面も、麻の葉の個々彫り通さんし
 ぬき、何んが彫つたものか、若も、のちの類を以つて
 ハ到底彫り難いものと、織細のものもある、一筋を

川柳か 上野の今昔 (一)

西原柳雨

花の上野の賑はひ、江戸の昔から大正の今に至るまで殆ど異なる所は無いが、只それ金光燦たる葵御紋の堂塔伽藍が、鬱蒼々たる樹表に屹立し、淨香馥郁たる所謂東叡山寛永寺と、硝窓瓦壁の洋館が、白糝糊たる櫻雲の間に點綴せられ、カッリンの臭ひに覆はれた上野公園地とを比較したら、其背景に於て、其空氣に於て、實に雲泥萬里の相違のみに止まらぬであらう。そこで自分は古川柳の上から見た、江戸時代の上野の概況を述べて見たいと思ふ。

上野は徳川幕府の當初には津輕越中、藤堂和泉、堀左京の三大名と、儒官林大學との邸宅地であつたが、今は林の屋敷が東南隅の高地たる山王臺に聖堂と隣接してあつた事が解つてゐる外、どの邊が津輕家で、どの當りが堀家があつたか判然せぬ。尤も川柳にては唯藤堂家あるのみで、他家を詠んだ句は一つも見當らない。

虎のあと竹の園生の御座所

和泉のつぼの其あとへ瑠璃の壺

仁右衛門の住だあたりへ仁王門

などの句はあるけれども、唯虎と竹との縁故を結んだり、或は仁右衛門と仁王門との語呂を對稱した迄の狂句で、奥御殿が瑠璃殿の邊であつたとか、家老の仁右衛門の館が仁王門

は皆、高を定數とせる藤堂和泉守高虎であるが、菊は云ふ迄もなく輪王寺の宮様である。

足輕の仁王にかはる花の山

仁王門そのかみ蔦のあつたあと

又仁王門が出て來たが、仁王門とは一體何處らに在つたのであらうか、今日となつては判然と指定する事は出來ぬが、貞享頃の江戸繪圖には、清水堂と大佛との間の邊に描いてあり、江戸砂子には黒門の傍とし、江戸名所圖會には廣小路三橋に寄つた方としてある、思ふに黒門と三橋との間にあつたものらしい、而して何時の頃、公辨法親王の御眞筆たる東叡山の扁額を載ける阿畔の仁王様が、足輕の門番と交代をしたかと云へば、明和九年の大火に全部灰燼となつた時で、それ以來終に再建せられなかつたのである。夫から上野と云ふ名稱は、地形が伊賀の上野のそれに似てゐると云ふより起つたと云ふ説もあるが、之は誤りで、永祿時代の舊い書きもの、中に判然と其名が出てゐる趣きが物の本に記してある。蓋し其頃藤堂家の領地は伊賀の上野であつて、伊勢の津に移封となつたのはぐつと後のことであるから、伊賀の上野と藤堂家の屋敷と、妙に混合かつてかう云ふ傳説が生れたのであらうと思はれる。

上野は江戸城の東北即ち鬼門に當るので、その鎮護祈願の爲に、裔祖家康公を奉祀する東照宮と、家康の陣門に扈從して願問の役を勤めた南光坊天海をして座主たらしむべき一寺とが、寛永四年三代家光の世に造營せられたのであるが、上野は恰も禁裏の比叡山に於ける位置にあるので、東叡山と號

の傍であつたと云ふ考證には勿論成らぬ。併し現在の動物園内にある閑々亭が、三代家光の爲めに高虎が築造したものであると云ひ、又同家の墳墓がその北の方にある所から推せば或は瑠璃の壺と云つた句は偶然に符合してゐるかも知れぬ。其他、

長局穴の稻荷の近所なり

お臺所摺鋒山のあたりなり

鐘樓堂昔時計の御間のあと

屏風坂あたり御寝間のあつた跡

などの句は、藤堂とも津輕ともなけれど、要するに摺鉢と臺所、鐘と時計、屏風と寝間などに苦心して縁語を結んだと云ふ迄の事にて少しも當てにならぬ。只上野が昔大名屋敷であつたと云ふことは、以上の諸句で判然と分るが、まだまだ幾らもある。

釋門は昔武門のあつたあと

花の山櫓のあとへ塔を建て

藤の字を七の字にして御建立

とうにもどうにも縁のある靈寺也

上の二つは何家にも當條るが、下の二句は明かに寶塔や七

堂伽藍に言掛けた藤堂家であることは云ふ迄もなく、

藤の咲く時分は花の山でなし

藤棚のあとへ都の菊を植ゑ

蔦のあと未世は菊の靈地なり

蔦を引つこぬき櫻を植るなり

花の山昔は虎の住家なり

し、又其一寺は叡山の延暦寺に擬して寛永寺と名づけられたと云ふ借越極まる遣方であるが、如何に其當時徳川氏の權威が隆々として旭日昇天の勢ひであつたか、推想せらるゝ。然るに徳川三百年泰平の夢も醒めて王政に復古し、事實に於て東叡山は東京の比叡山となつたのも奇しき因縁と云ふべきである。

此うへのない結構な鬼門除け

花の山鬼の門とは思はれず

寶田の鬼門にひえの種を蒔き

鬼の門一萬石でおつぶさき

湯島から一萬石の塔が見え

などある内の一萬石と云つたは東叡山寛永寺の寺領が、約一萬餘石であつたからである。而して同時の法務を執りし所を圓頓院と號したのであるが、世人の多くはそんな事は知らぬので、

山下でゑんとんわんは知りませぬ

と云ふ句の通り、上野近邊で圓頓院とは何處ですかなど、

尋ねても知つた人は少かつたのである。その他、

野を二つ天と空とで開く也

など空海は高野山を開き、天海は上野を開いたと云ふ謎のやうな句もある。かくの如く上野が一社一寺の靈地となるに就て、藤堂、下の各邸宅はどうなつたかと云ふに、津輕は本所割下水に、堀は同柳島に、林は聖堂と共に湯島に、そして藤堂は染井に邸宅を賜はつて移轉したのである。

後は野と成つて染井を御拜領

堀り交うけつ、あり、土、崖下の脚、運、電平
 二、沿、あ、と、電、車、道、と、同、し、高、さ、を、ま、淵、を、埋、め
 つ、あ、る、を、見、る、坂、上、の、右、端、に、あ、る、高、い、燈、台、の、つ
 しか、取、り、拂、い、ん、の、う、い、其、影、を、も、留、め、の、す、あ、の、燈、台
 川の、流、の、初、年、を、思、ふ、ん、ん、の、む、自、然、石、を、言、う、七、集、め
 と、台、を、高、く、築、き、た、る、其、石、の、全、各、所、の、産、と
 う、ま、き、は、ら、が、揚、し、き、こ、を、し、り、と、感、せ、ん、ん、ん、
 坂、上、に、登、り、請、回、の、境、内、を、見、る、こ、い、ま、大、工、を、あ、る
 後、工、を、は、北、邊、の、換、機、一、度、で、ん、品、川、子、の、銅、像、を、
 後、う、り、し、一、時、年、一、軍、人、後、援、會、に、附、て、此、尼、港
 横、死、者、の、紀、念、碑、と、見、る、も、初、め、と、あ、る、か、こ、ん、ん、
 こ、ん、ん、ん、と、ま、お、し、ら、う、う、中、央、に、身、持、長、大、の、場、

八、の、五、像、あり、右、手、に、衛、と、推、く、左、手、に、長、劍、を、握
 る、石、壁、の、左、右、に、婦、人、の、像、を、箱、入、り、^{石、像}、慰、哀、の、お、お、を
 あ、ら、う、前、面、より、石、像、の、男、女、悲、し、い、面、を、散、か、よ
 を、置、く、皆、自、心、也、^{石、像}、に、尼、港、横、死、の、休、末、を、刻、し
 け、銅、板、と、左、右、に、分、つ、て、箱、入、り、誠、に、好、紀、念、碑
 也、

○ 坊、戸、を、通、り、荒、干、の、園、也、を、獲、り、中、に、一、二、程
 ま、ま、と、の、あり、

一 佩文齋画題類考

此書、天保年間、種、豆、拙、者、の、古、活、字、を、以、つ、て、上、版、す、る、所、唐、例、摺、り、大、字、本、活、字、ハ、古、活、字、と、も、未、比、其、何、式、

三と并七、大巻首に、日本量彦
 の漢文の序あり、巻尾に、垣川文
 辯の漢文の跋あり、四十五部を刷
 行し、同好に頒つと見え、奥附
 一印記あり、板行の文を録す、曰く、印
 十五部、毎部有記、非意中人、故不増
 寄、といや、入勿体振つて、おる、佩文齋
 画跋、画家帳寸の秘、多し、時代
 を想ふべし、此者、別に、音あり、唯、比
 古法字を用ひ、字不聊、う、音とす
 べし

一 忠臣蔵人物評論

一冊

天明元年、忠臣蔵行也、有、為、銅、肌、敷
 心、達、摩、居、待、賣、世、田、為、本、印
 記、あり、式、亭、三、馬、の、偏、痴、三、の、論
 此、者、を、蜀、山、と、し、借、語、を、し、焼、き、し
 巧、ま、う、此、者、頗、る、稀、觀、を、し、好、ま、う
 家、の、珍、と、す、る、也

一 悟道迷所編 三馬

一 おやうやう 三馬

一 不二三鷹三茄子 三馬

一 忠臣店法帖 一九

以上皆黄表紙より汚損多く皆在る

一 玩珠詠物百首

一冊

天明三年京都赤坂の別荘行するに
巻首江村仕海の序あり著者の為人
と悉す、著者の太田伯魏とい、此人
留秘の得才あり、題を没くは皆
ありしに前人未言及せざるの多し
左に四五を録す

伏素佛クワシヤヨリ

金星ハズミ

漏斗シヤウゴ

廣草帽フルフチ

十二行

棄爛ウツク依ヨ麓ノ

泛偶ウキニ

紙シ控コ

定サ瓜ウ児コ

仙人セウジン

轉マ雪ユキ丸マ

播ハ盆ヒ

饅マ書シ魚イ

持テ角カク換カ

弄ロウ胡コ孫ソン

二葉山子

引ヒ火ヒ奴ヌ

あよま此等の題は他人の詠物に入らさ
りしものより日よと難くとする不ひあ
る、何んか人を首書せしものあり、
あよ、百首は此等詩のあり。

○夏那の依修了解し、中めらるるまゝし、左に抄出さ
ハ上田春橋の支那書儀作中、一巻をなすものあり、肥
塚抱月、元ハ日本に在る姓と、詠とすべし、

支那の俗語としてハ意味猥褻のもの也

隠戸 毎務者

僧帽 ルーテサング

去恭 大使

狐臭 腋臭

春宮 娼木

糞箕 臺兩

肥塚 陰莖の
糞

新袖 後庭 田舎者

地似 薩摩芋

馬銭 珍薬科

寶向 崎美坊

手鏡 手淫

解手 小便

油瓶 再婚の
ハル子

吃醋 ヤキモノ
忌気

書展 秀波 蘇芳角

大虫 虻 席

抱月 世即局と流連

寿衣 表紙

出馬 医者の往診

花心 子宮

冒董家 偽徒

黒化 糞品
又スミモノ

股東 株主

股主 株主

集股 株主組織

支那の商店の屋敷を以て略し何人程の合資者
の組織を以て店とか、或ハ主として如何なる高きを
して店とか推測が出来るといふのは、
僅か

量の字のあつた場合ハ 三人位の株主の組織を以て

協同 三人以上十人以下

合同 十人以上二十人以下

公 二十人以上七十株主のあつた

と暗示する又

辨ハ 銀行の会社を以て大資本の会社を以て示し
棧ハ 河原並に大仕わけの店

記ハ 一般集股集債の如く皇室事業に用也
 向ハ 一二場の場合の名稱也

天皇御号、協和親王、福公様、公記、政広、成文
 向、どの看取あり、略し、皇室の状況を想像し
 得くし

四月七日記

○稀世復物今々の先月分、配本、北里歌、二編別、
 此の全集の愛の稀観、有るも二年程前、復物志
 今に出版を勧め、つゝ、日本書、市川吉人
 府の蔵書も、疎河湖龍舟の画を収む、玄味
 子とあり、寛政の歌、名も、北里歌三十首、八卷
 府の心も一時、宣旨し、つゝ、各詩別への人

十二行

と、七書せ、あ、たぬの、出、四五枚、何、皆、東江の
 出、凡、つゝ、江、志、な、ま、り、し、一、回、一、道、出、の、生、流、を、画、し、つゝ
 かの、つゝ、あ、こ、既、味、あ、り、此、出、の、時、つ、家、と、喜、び、つゝ、
 白、平、の、回、又、あ、り、卷、尾、の、方、復、譯、文、三、枚、九、の、山、人、紙
 と、あ、り、平、澤、元、愷、の、こ、と、つゝ、此、府、の、刊、年、に、詳、つゝ、
 つゝ、な、り、卷、中、の、人、名、を、推、する、天、心、年、方、の、刊、行
 る、ん、と、い、ふ、元、く、時、に、寛、政、高、平、賞、の、歌、を、し、つゝ、
 さら、つゝ、あ、り、不、承、後、と、い、ふ、へ、ほ、ろ、を、我、授、する、傷、ら
 ぬ、此、よ、の、を、出、す、と、い、大、膽、つゝ、或、い、つゝ、寛、政、の、歌、
 を、や、め、つゝ、此、府、後、つゝ、評、判、あ、り、つゝ、物、藏、を、記
 し、つゝ、あ、り、つゝ、或、い、つゝ、元、く、卷、中、の、詩、を、書、し、つゝ、
 七、の、多、く、の、題、名、を、な、す、つゝ、妻、名、を、し、つゝ、朱、印、し、つゝ、

七月多し、市河三陽の取納いさうをも復米を今も二枚
 載せたる、よの左の如し
 四月七日
 の雅志、書高、才二雅出づ、こんえ余が投稿、詩仙
 ちと養石山莊、揚出しあり、丈山と黄道、周の者の皓
 似と示す、為め、巻頭二枚の紙を(換)を掲げあり、
 此の、書高の建、田珠、尾をぬめ、其考、証あり、
 田畝の画し、ある五名、書を、彩名し、出たり、不
 おま、滞つ、は、言、近、せ
 同上記

稀書複製會々報

第四期 第十七回

大正十五年 七月

第四期 第十七回配布本解説

北里歌 一册 廿六丁

(原本本會藏)

此特種の花街書は吉原を主題として吟詠せる玄味居士の風流詩三十篇を、男女の雅客廿三名がおのの得意の筆にて寫し、それに序跋を添へ、磯田湖龍齋の艶畫を配して上梓せしもの。著者玄味子は儒者にして詩人を兼ねたりし市河寛齋なり。世に此篇を湖龍齋の『北里歌』と稱して、雅俗の間にもてはやせり。開版の年月は記さるも、卷中の人名等より天明年間の梓刻と推定せらる。

りき。通稱を小左衛門といへり、上毛甘樂郡の人、江都に遊び林祭酒正良の門に入り、業成りて昌平黌の學頭に擧げられ、在職五年病を以て辭せしや、寛政三年富山侯に聘せられて校舎の教授となり、青年輩の薰陶に従事すること二十餘年、老に及んで致仕せり。其學博く、才敏く、最も作詩に長じ、後進の領袖と稱されしが、文政三年十月歿しぬ、年七十二、私に諡して文安先生と云へり。本書『北里歌』の著に就いては、其玄孫市河三陽氏の談に徴するも、又推定梓刻の年代よりするも、按ふに昌平黌に在りし頃の戲作ならん歟。さるは『人名備考』中の千賀浦逸客色川成允の條もしくは當時の遊女に關する考證などより見るも、天明五六年度の開版と思はるればなり。昌平黌の學頭として儒者の權威者たりし彼れ、常に侃々として道義を説きつゝありし彼にして、妖艶此

わろくし、市河三陽の取納くまうをも後をみるべし

くの如き著を出だし、なれば、世の好事者流が體喜し珍玩せしむことわりなり。太田南畝の如きも「一言」に特に此書を評判しをれるが、そは寛齋の門人柏如亭の抄寫本に據りしなり。中村佛庵の如きも「北里歌」の完本を得んと欲して、これを著者寛齋に求めき。よりて其十一首を特に書き與へし時の寛齋の叙辭「崑岡炎餘」に見えたり。即ち「予昔時與友人論詩云。詩無不可作者、只在上下其格耳。走筆作此亦一時戲乎。後傳播漸廣、至有圖上梓者、使人汗根不止。今茲予年五十、佛庵強需書此、未半而閣筆。白髮宮人插花妖冶之態、假令自喜、何免他人揶揄、佛蓮其能職宥之。寛政戊午二月、識於玉池半江亭、寛齋世寧」とあり。戊午は寛政十年なり。佛庵其の後に五首を得たりとて「崑岡炎餘刻成後、偶於古紙中得北里歌五首、喜自不勝、重書補漏、但恨趙璧猶未全。丙戌八月十五日、佛庵老人記」と書し居れり。丙戌は文政九年なるべく、寛政十年より廿九年の後なり。然るに佛庵が吉原大門の餘燼たる柱材にて燈籠を造りし際、諸家の文を需めて巻軸としたりしが

其中に收めたる「北里歌」は十九首のみにて、本書中の桃花女、仙都醉客、偷樂道人、遊女筒井の前一首、清賞齋、自口、路考、東野山人、遊女花扇、黙庵の十一首を缺きたり。よりて思ふに、本書は其頃既に稀本なりし如し。次手ながら、寛齋が昌平齋を辭任せしは、この「北里歌」の評判が餘りに喧しかりし影響の然らしめし所と、云々。
この書の執筆者に就いては著者の玄孫市河三陽氏の調べに係る「人名備考」あり。茲に轉錄して其氏名を明かにすべし。但し未考に屬するものに麻阜樵人吾從、偷樂道人遊女筒井、清賞齋山人、半酣生、樂地、黙庵、泉子、勾玉山人等あり。
○東奥逸客 藤塚知周、字仲旋、通稱要人、知周は陸前鹽竈の祠官、鹽亭知明、通稱式部の次子なり。天明の初年江戸に來り、更に京洛に遊ばんとせしも病の爲に果さず、天明六年に歸國せり。出府中寛齋と往來し日本詩紀の校者に名を列せり。此序の筆跡似たりと云ふ。
○玄味居士 市河寛齋
此書湖青龍齋の「北里歌」とのみ言ひて、玄味子が寛齋の別號なるを知るもの少なし。辯言中に「全唐詩逸」の文字あり

るによりても明かなるべきことなり。

○翠羽女

藤塚知明の著はせる「坪碑考」の畑中荷澤の序文を揮毫せり。それには印は「幾知」とあり。秋田の俳人小夜庵吉川五明の女なりと云ふ。書風は東江を學べり。

○風吟 印嘯園

牧子野は南部の臣なり。「寛齋摘草」に往來の作見ゆ。平澤旭山と同行して熱海に浴せり。

○桃花女

書は東江風なり。佐竹侯の一族にして實は男子なりといふ。

○菱花女 印源鍵

東江の書風なり。佐竹家中のものなりといふ。

○仙都醉客 印君樹

橘茂齋字君樹 君樹藏六は、天明初年奥州に遊び藤塚知明の客となり、その著「坪碑考證」の稿本を携へて江戸に歸り、寛齋等と謀りて之を刊行せり。

○路考 三世瀬川菊之丞

書風東江流 初市川富三郎と云ふ。安永元年瀬川を冒し、同三年菊之丞を稱す。書畫俳諧を善くし實義あり。當時の俳優その恩義を受けざるものなしといふ。

○遊女濃紫 江戸町玉屋山三郎抱

○遊女花扇 同 扇屋宇右衛門抱

○遊女菅原 京町つるや忠右衛門抱

三遊女のことは京傳の「傾城鱗」又は「娼妃地理記」藩都酒美選等に見ゆ。花扇は孝女の譽れあり。客より酒の下物として炭火を箸にはさみて出されたるに、莞爾とし之を袖に受け靜に起ちて衣を換へ、此の如くすると兩三回、遂に客をして頭を抱へて置れしめたりといふ。(此項三遊女の評判を傾城鱗より引用しあれど略す)

○甘暎齋 小池曲江、別號甘眠堂

曲江は鹽竈祠前の旅店の子なり。繪事をよくし、江戸に出て松林瑤江に學べり。天明六年二月平澤旭山に「登喜録」の序文を求め、同じき五月橘千蔭の文を乞ひ、寛齋の詩をも得たり。

○千賀浦逸客 色川成允

成允は藤塚知明の門下生なり。後知明媒して高橋氏に贅すと云ふ。「寛齋摘草」に色川生奥中へ歸るを送る七絶あり。知明の次男知周と同行せしものにはあらざるか。京師の人村井古巖は、天明六年春、知周が歸國に伴ひて奥州の諸勝を探らんとし幾ならずして鹽竈に歿せり。寛齋墓文を選し、成允之を書し、知明之を雲上寺に建つ。

○法橋湖龍齋 磯田庄兵衛

江戸小川町土屋家の浪人、後兩國藥研堀に住す。

○九日山人 平澤元愷字弟侯

九日は旭字を拆せるなり。元愷は寛齋、東江等と往來あり。又嘗て奥羽に遊び鹽竈藤塚氏に宿し、小池曲江の家にも投ぜり。又天明七年には中村佛庵と同行して武州金澤に遊べること漫遊文章に見ゆ。然るに佛庵後年吉原焼殘の大門の柱を得て庭中の燈籠となし、各家の綺語を鑄せんとするにあたり、寛齋に『北里歌』を書せんことを求めて十一首を得、更に故紙中より五首を見出したるに過ぎず。されば湖龍齋の畫本、當時にありても少なかりしものか。また佛庵は旭山より之を傳ふるに及ばざりしもの、如し。

○含章堂主人 印雄

秋田佐竹侯、幼字を雄丸と云ふ。當時の藩主は義教にして、天明五年六月三十八歳にして卒す。繪事を能くせり。含章堂果して義教なりや。否や以上考證臆説に出るもあり。然れども澤田東江が秋田世子義和に書を教へ、翠羽女が秋田俳人の女にして、又秋田の重臣西田齊等が、當時花街の豪遊等を併せ考へ、同時に平澤元愷と諸人等の關係を察せば、蓋し中らずと雖も遠からざるものあらん。終りに書肆申椒堂は日本橋北室町三丁目須原屋市兵衛なり。

此書未だ奥付發行年月あるものを見ず。

この書風は悉く其頃流行せりし書家澤田東江の流れならざるはなし。殊に目立てるは遊女の書にして、是れ亦た然り。蓋し當時吉原廓内にて書を習へるものは、東江流にあらざれば千陰の風に限りしなり。按ふに是れらの連中に遊女を任せしめしは、藏前の札差小島梅外、夏目成美の徒が指金にはあらざる歟。兩人とも寛齋の門人にて後に俳人となり、一派の徒黨を率ゐて吉原に豪奢を衒ひつゝありしもの。そは暫くおき、當時の世相を顧みれば、漢學の擡頭に伴うて一般に肩の張らざる漢籍喜ばれき。一例を言へば宋の劉義慶が撰に係り、李車吾が批點の『世說新語補』などが安永八年には日本に於て翻刻を見るに至りき。斯かる漢文の洒落本ともいふべきもの行はれて、文詩共に世話に碎けたるもの、出づる傾きありき。是れ有名なる服部南郭の一派に依りて風俗を叙述する軟派的の漢文學が起り、争つてこれに雷同する輩を生じ來り、支那の時文體に記するを誇りとし時のハイカラを以て目されたりし也。此傾向が支

那小説の翻譯となり、訓點となり、小説字彙の『小説粹言』となりて、風潮が支那の現在を迎接せんとしたれば、支那の俗文を愛讀する者多く、其影響が我邦の總ての風俗、柳巷花街の情趣に至るまでを詩に作り文に綴りて『世說新語』の向うを張り、漢文ものに浮世繪を挿入して對峙せしむる程度まで展開せり。此時に當つて出でたる『北里歌』の詩壇を噪したるは宜なりといふべし。

畫工磯田湖龍齋の詳傳は明かならねど、卷中の構圖は詩と對照すれば説明の要なからん。由來この書には白紙摺のもの半紙摺のもの二様あり、本會の複製の用に供せる底本は白紙摺のものなり。題提擦り切れ文字を缺く所あれば、そは帝國圖書館本に據りて補ひ完全なるものとしたり。

前々回配布本解説

傾城艦 一冊

(原本 東京 三村竹清氏藏)

本書は天明八年正月葛屋重三郎の開版に係る特種

の吉原評判記なり。開板の當時通人粹士の代表とも稱すべかりし山東京傳が、其自在なる才筆を以て通と粹とを捏ねかへしたる著作にして、吉原を脊負つて立てる選りぬき遊女、松葉屋七人、丁子屋十人、扇屋九人、角玉屋、鶴屋、大菱屋一人宛、計廿九名の辣腕をを捉へて品騭を試みたるもの。其の氣質、其技藝、其長柄の模様、其提灯の合印、其筆蹟迄を網羅し、なほ附録として廓詞までも添加したれば、吉原ものとしては見通すべからざる有名の珍書なり。

この書は、序文に範を『俳諧艦』に採りて『傾城艦』とは題すれども、地口を主として横訛りに洒落めしたるに過ぎずと無造作に言ひ倣し居れども、仔細に其内容を窺へば、何事にも凝り性の作者のことなれば、しか輕々しく取扱ひたる作とは思はれず。按ふに彼れが吉原に耽溺を縦まにしたりし長年月間の閱歷に基づく廓内遊女の個性研究、又それに附隨せる一切を表現して、暗に大通を誇らんとするの底意は端に露れ、そぞろに外八文字に艶美を競ふ花の仲の

○明治九年の友社、出版した馬哈默傳二冊林其重
の譯、卷首に島地默雷の序あり。附録に馬哈
默に就ての批評を譯す、幼穉の譯を以て馬
哈默教を本邦に傳へたる創始のものとせん馬ハ
カと高估し起る或る富饒の老婦とを以てし
後、その良人とす、漸やく宗を親念を抱き
自から捨す者と名をう、此神説を彼の一神
を説き偶像を拜することの邪を斥け、始て身
を修め徳を修め、刻苦勵精す、漸やく一神
を敬信、殺戮を事とし、正に從ひたるを神
に務めを減すこととを戒ふが如し、終に比鄰を殺
す、彼れ七世の祖より、彼れに及らば、彼れを擯する

為の神を以て轉り、各に理由あり、コウシキるもの必
竟その言説も果めざるものあり、彼れの人を以て
と説くが同様に神に敬むるは絶対服従を言ふ
欲を満すことを以て神を以て、六性類を
巡するとも神を以て、熱帯地に入居ける
愚昧人、北極の寒氣を怖るるを以て、其の
宗を以て進歩する人比卑遜るものなり故に
然る者百世の後尚ほ此宗派の類を降登するもの
あるは此先服従を本位とし、人を畏るる所以
なりん歟

四月九日記

マホット傳中に北人性態強壯人四五倍の能力を
有し、其と多量主義の範とするは是るか、彼れハ

ある奴隷のまゝの容名の秘伝を奪ひて神の
意をうとむる事奪つて自家の事とす、彼れ
又婦人：好し好する嫉妬深くと此れ死すも世の他
に嫁するも厭わぬの事：此れくこととせり、
部を掩はしむるも嫉妬深くと由未することし
コリンを名に賜ふ予旨のことあり、為の取
除きたる文も多しといふ、

○薩摩版の左條を坊間に見た、こゝを宋版の覆
刺し卷首に乾隆御覽の印記がある、まゝとす
覆刺しもある、此の版木は後、轉轉と奥附子
とを改め刷行したこともある、版木は前年琳瑯
洲に巻くとおぼし、まゝを初め早稲田の岡本
十二行

こゝの所をせしめ今七條に花とある、此れを善
岳家とすといふ、岳飛の善花があるとい
ふこと、書行七宋版の善花本がある、その
版式は一層すいとすくか、まゝとす、此れ
一層すい

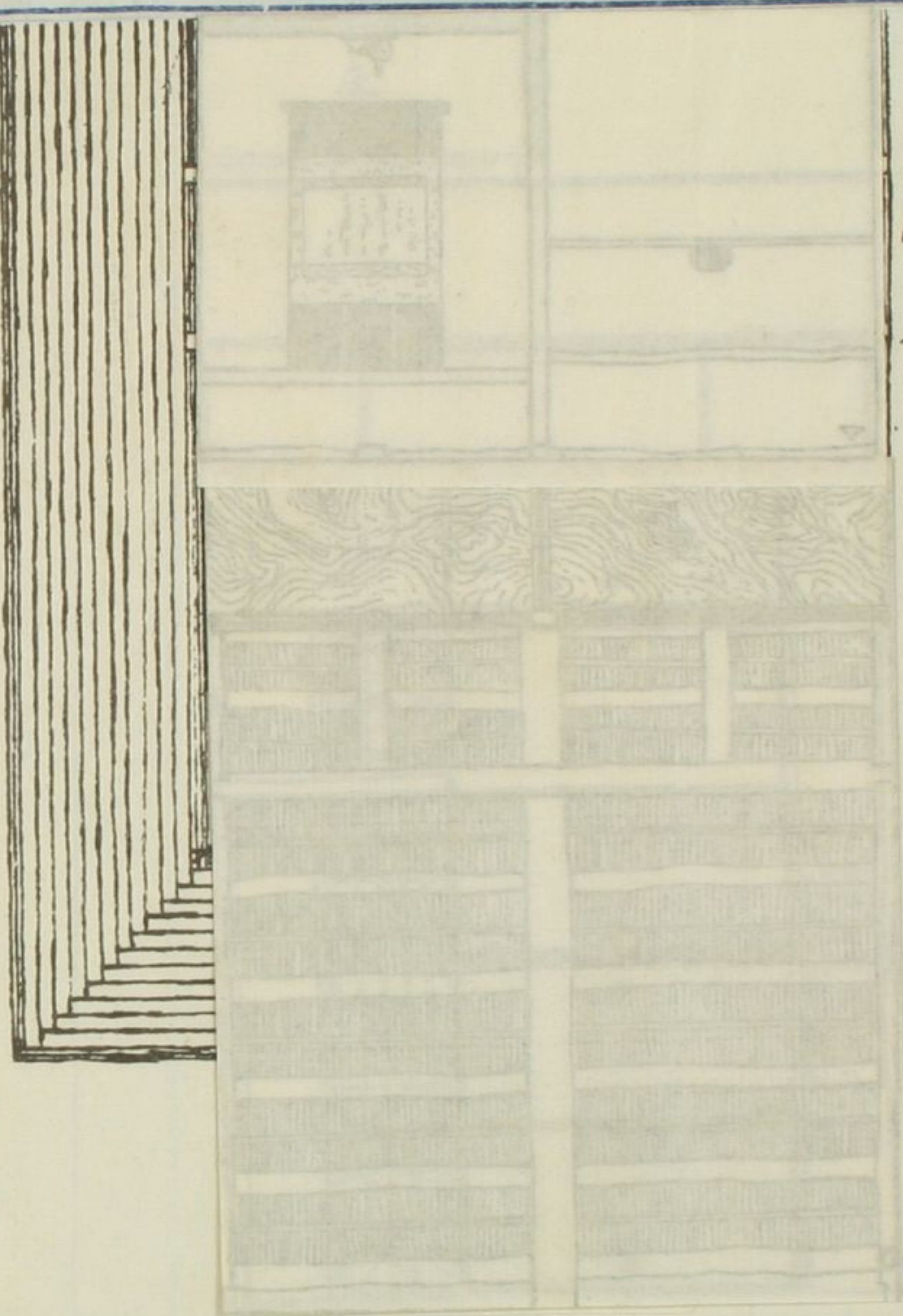
○書局中二難、余が詩仙巻と云ふ
山花の投符を揚げ、まゝと余の善花
の張は、収め、田珠庵の起し、圓いこゝに
収め、
四月九日記

圓珠庵

大正西宮五日

善言

天井丸木の母と
竹の角で作られて
居ります



戸棚

庵

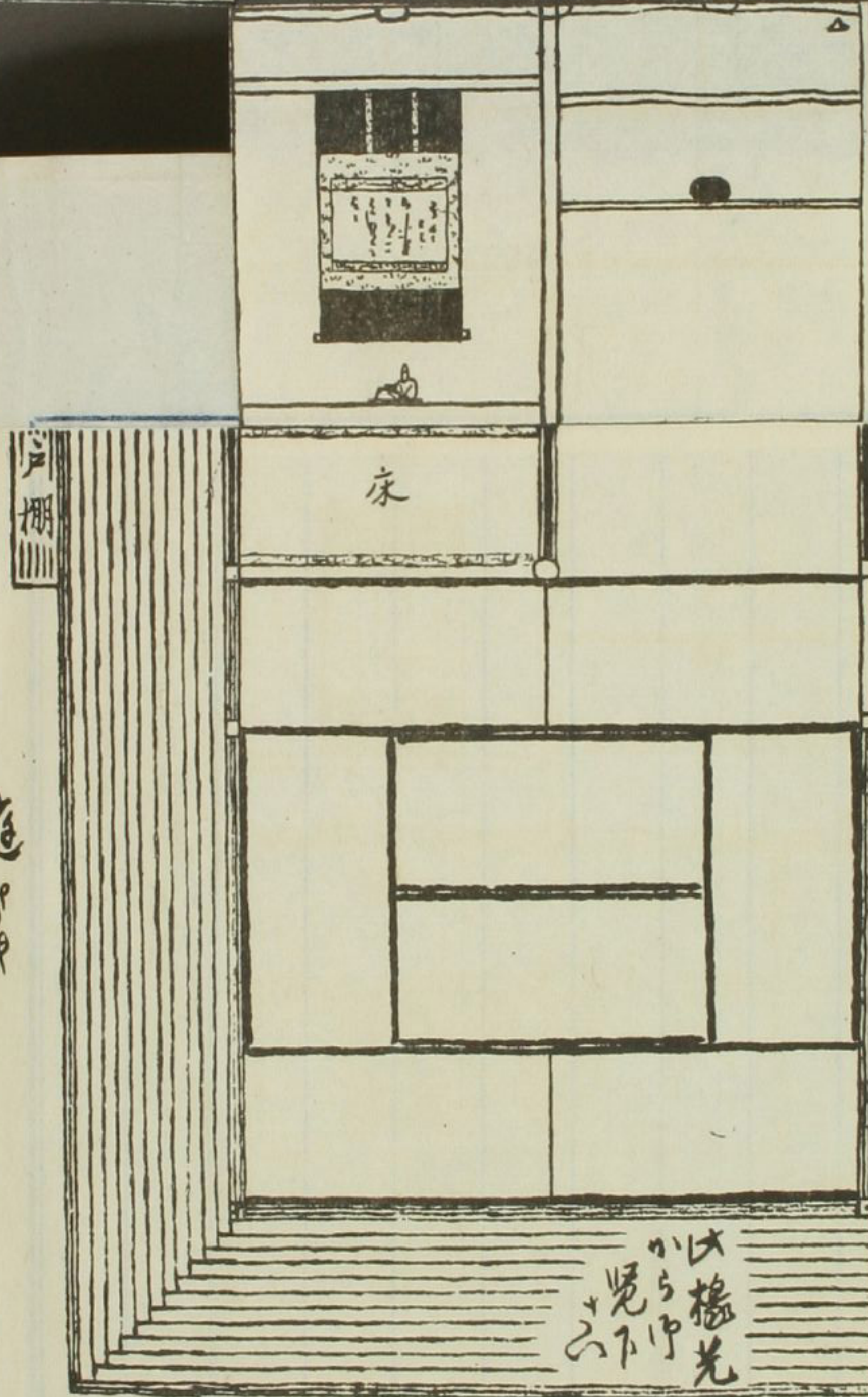
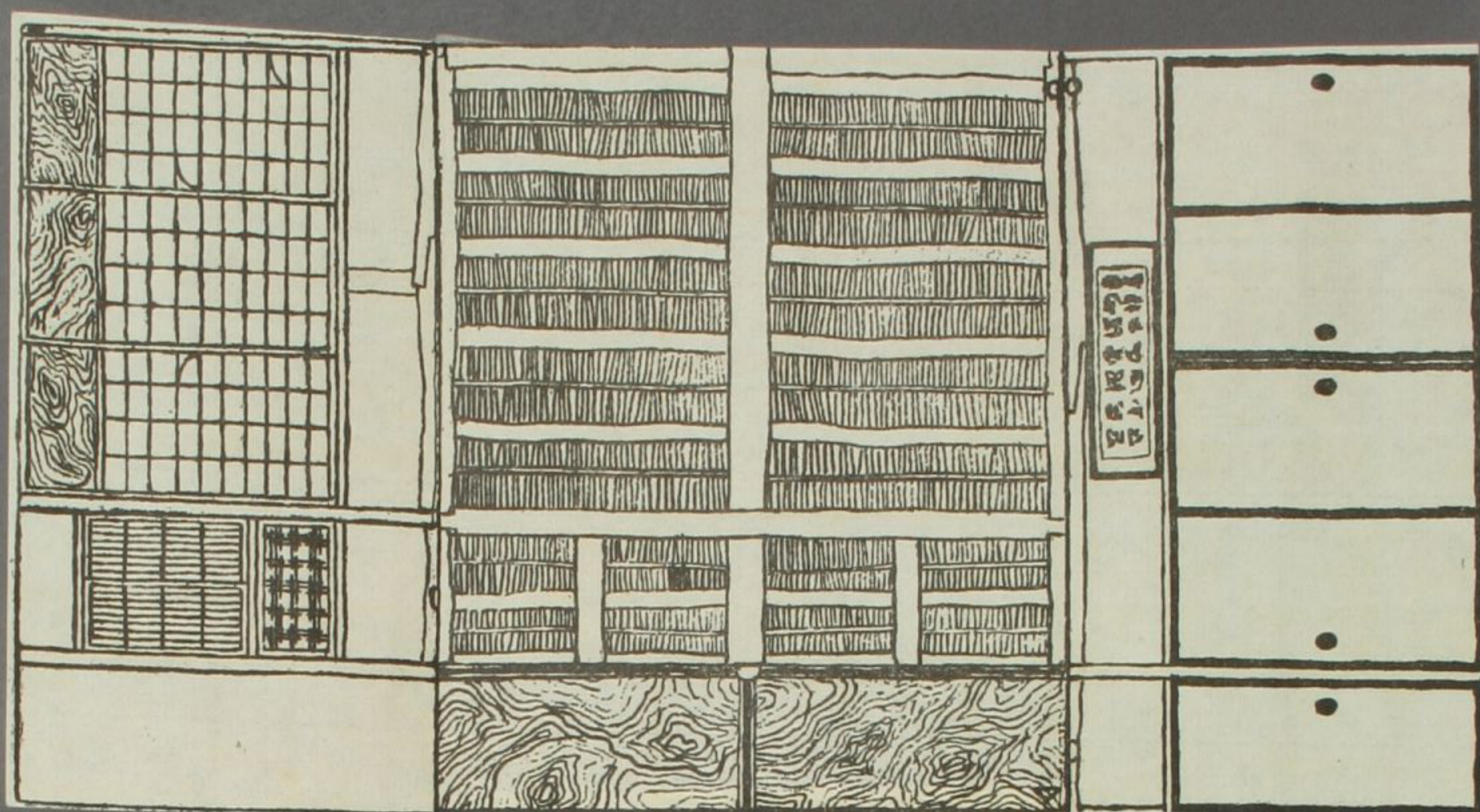
十二行



契沖阿闍梨の書齋

大阪のお城の南の餌差町と云ふに只一軒茅
葺きの家が残つてゐる、圓珠庵と云つて契沖
阿闍梨の庵室のあとである。此處で阿闍梨は
五十一歳から六十二歳の入寂までを過したが
この庵ほど國學者としての阿闍梨にとつて因
縁深いものもあるまい、と云ふのはこの圓珠
庵はもと和泉の萬町村の伏屋重賢の屋敷内に
あつて養壽庵と呼んだ離れであつた。妙法寺
を去つた阿闍梨は一ト先づ和泉の久井の里に
退ひたが、更に萬町村のこの養壽庵に移つた
のである。此處で五年の間を讀書に暮らした

と云はれてゐる、後年國學の研究に没頭する
ことゝなつたのは、重にこの五年間の耽讀に
依るものとされてゐる。
最後にいよゝゝ凡てから離れて靜かに餘生
を送らうと阿闍梨が思立つた時、大阪の高津
の百姓太郎左衛門が今の餌差町の土地を贈つ
た。伏屋重賢ははるゝ萬町村から養壽庵を
贈つてきた。
移された養壽庵は圓珠庵と改められた。
この圓珠庵では全く俗塵を斷つて讀書と瞑
想に耽つた、又著述と育英とに日を暮らしも



圓珠庵 大正西宮春日
 天井丸木の骨と
 竹の角を以て作られて
 居ります
 契沖
 大槓先
 見下
 六



契沖阿闍梨の書齋

大阪のお城の南の餌差町と云ふに只一軒茅
 葺きの家が残つてゐる、圓珠庵と云つて契沖
 阿闍梨の庵室のあとである。此處で阿闍梨は
 五十一歳から六十二歳の入寂までを過したが

と云はれてゐる、後年國學の研究に没頭する
 ことゝなつたのは、重にこの五年間の耽讀に
 依るものとされてゐる。
 最後によよ／＼凡てから離れて靜かに餘生

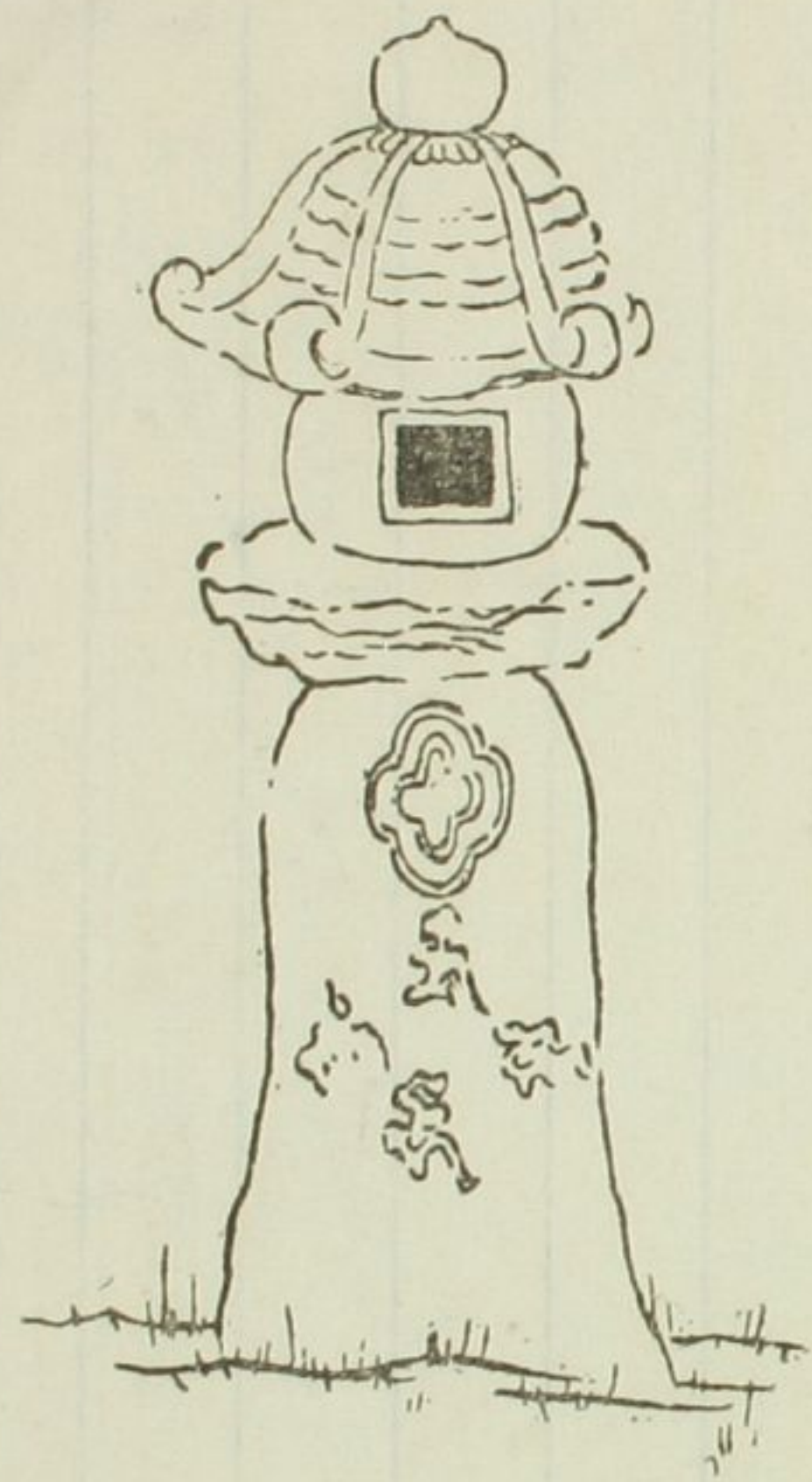
した、萬葉集の註釋の校正が全く終つて代匠記と名を附せられ、序文が添へられたのはこの圓珠庵であつた。和字正濫抄、和字正濫抄要略、源註拾遺、勢語臆斷、六帖拾遺、拾遺考要、新勅選考、厚顔抄、改觀抄、河社、圓珠庵雜記、吐懷篇、菅家萬葉頭書などを著し、六國史、舊事記、古事記をはじめ詩文集や歌書などに傍註を加へたりしたのも亦この圓珠庵である。今井似閑、海北岑栢、野田忠蕭、沙門如海、沙門智瑛などもこの圓珠庵ではぐまされたのである。水戸の安藤爲章に面接したのもこの圓珠庵であつた。六十の賀の祝ひを門下の人達によつて催されたのもこの庵であり、義公の計を耳にしたのもこの庵であつた。さうして其翌年の正月の初めに床に就いたが遂ひに起つことが出来なかつた。あ

る日阿闍梨は言遺すべき事共を書きつけた。又ある日は弟子達を枕邊近く呼んで永い訣れの言葉を交はしたりした。さうして元祿十四年正月二十五日といふに大往生を遂げたのである。

かうした圓珠庵は口繪にあるやうに今猶残つてゐる。西と北とを受けた廻り縁の八疊の間は、明るいが決して騒々しくはない。此處に移されてからは二百五十年餘りではあるが、その以前萬町村で幾十年を過してゐたか分らないと云ふこの庵室は、まだ幾十年かを充分に保ち得さうにがつしりして見える、凡て槍鉤で作られてゐると云ふ柱や闕鴨居は煤けて光つてゐる。殊に目につくのは天井である、まるで肴の骨のやうだ、背骨に思ひ切つて太い荒削りの木が使用されてゐて、助骨に

面皮が使はれてゐたと記憶する。割竹をその上に竝べて肉としてある。いかにもがつしりして重たそうではあるが決して壓迫や不安は感じない。自分が家を建てるならこの天井をよく覚えてゐて、これは是非一つやつて見たいものだと思つた程それ程いゝ。

阿闍梨の遺物の大部分は大阪圖書館の方へ保管されてゐると云ふが、現在圓珠庵にあるものは阿闍梨が日常座右に置いてゐたと云ふ頓阿法師作の人丸像と、煮焚でもせられたらうかと思はれる鍔鉢などである。(日年)



形名不詳

◇淺草柳原松浦伯邸内にありし古燈籠で傳に靜御前の据ゑたるものと云ふ
◇高六尺四寸三分の竿石の四方に窓の如き形のもの文字四字づつあれども讀むことが出来ない程磨滅してゐた。

○此の浅草下谷邊の青林とゆふを園とを通る
僅うん得るを左の如し 四月十日記

一 雛形の井を看る

七枚を 二冊

寶曆年方の出故に傳り藤原の仕
方因あま等を収め、二卷上卷より
三卷すへて二の巻、此方坊より海布
すゝよの往年浅草公庭に於て西覆利
一の巻より今の中板本傳りて一
此方の原稿ありて稀觀とす、一枚
を丁ありの坊ありし

一 謡本

(古今の唐曲と云々)

一冊

上言太夫以下 此書を収め、卷

尾に依り起りて今章句畢し

享保四年 亥

初世太夫

三月廿五日

清親花押

福地新兵衛取

とあり、清親の自署と名く、此の字
の字は、遠州海を以て板の如き、紙
ハ藤子の鳥子とて、白茶三色、紫
谷紙地抄板ありと名く、味あり、相
お古海くあり、玩賞するもの、是の、
紙

一 芝全交智直之禮

一冊

全交例の滑稽言を弄し、此黄表紙
より繪の山東東條なる、政演の事、

成り給ふ歎也有り、業改味ふ趣じ

○國方故郷の故徳川侯の老内(忌)に
探心から他進悼罪とを刊すことあり
し事あり其の時も二通つたを幸い
お別れを得たから、中教叔の追懐録を此の
の徳義に就ていろいろの思ひ出がある、徳義を
深く自分を信じて、侯に代つて令衆に何か
重大のことをいつし、令長もある、特に自分、
代演をせしめられたことあり、進退九州の果まを
せしめ、元寇の遺詔を免れ、時を以て自分の
いふ候に、此の紙後くお別れし、大河津の開墾

エを同魂し、九州の事、大勢が守るを
時自分を長幹の候の隣り、まると諒つた
れのを自分かおけり、侯に市治君の
程が、皇命だといふ大勢、吹聴を
し、此の事あると思ひ、侯に
せん、此の強を徳義、此の時
ることを思ふ、侯に因縁がある
の印に、根をえり、深き、
自動車、七次、大勢、大候の
と、此の物、車を、特待を
、何と何を、へきやと、
かん、折の思出を、

近を修るのき、阿うも直とて候の多致味と説的す
ることとるるかゝるある、此の園に根のんは折、日人が
目星の籠(律)守心一行の、帝に心経を献したの
七傷れ、其の折候の書に、名に和田傳士が候
を中心として、籠守に記す、日人を十六(律)律に
擬し、漫画も又傷れ、あるのん、こゝんが他の永訣
の識を、あつた、この如き、感念があつて、感慨禁
し、難いものがある、この途、悔海、ある、其の籠守の風
光、候か所、也、三十、籠守の籠守と集め、えん
こと、日家、籠守の籠守、も、えん、く、の、エ、候、ある、こと
と、曲書、あつた

四月十日記

○榊頼博、其の行の書、高、籠守、三、籠守、全部、松

浦武の中、二、関、す、こゝ、を、以、つ、て、え、ん、す、故、向、と、え、ん、す
つき、頼、博、屋、と、榊、雨、が、決、め、れ、文、題、一、日、を、持、り、印
を、録、白、に、取、あ、り、き、こ、と、河、籠、曉、翁、が、榊、雨、に、其、こ、を
る、方、向、に、漫、筆、の、園、も、言、及、つ、て、あ、る、か、ら、こゝ、ん、も
取、あ、り、し、と、家、庭、の、二、書、を、え、ん、出、し、候、り、其、こ、を、
為、才、四、強、り、を、あ、ら、候、出、し、し、よ、め、は、関、係、す、こ、と、
を、掲、ぐる、を、取、向、と、す、る、か、ら、余、も、榊、出、し、候、字、
を、書、け、と、の、道、又、さ、う、候、出、し、の、心、配、を、こ、れ、に、
い、ん、ま、ん、特、に、考、へ、た、こ、と、か、ら、い、出、来、り、か、ど、う、か、
い、ん、ま、ん、が、先、に、角、エ、ん、と、ま、す、し、と、差、を、か、余、が
堀、出、し、し、よ、め、と、持、り、し、よ、め、の、白、風、籠、守、も、こゝ、ん、に
五、宮、籠、守、の、中、一、と、い、ふ、か、べ、き、こゝ、の、さ、ん、ん、と、書、候、

あつた
いんばあが
いんばあが
いんばあが
と書つた

ハ多んをぬめると其の西復本を信ずるは

○前掲の春秋た氏家を購ひ入る。此本は南に於て
送利の夜石符の高者正義にん七宋版であるのを
西復刻しん。多んが家傳であるから多んを併せん
可く、意む書ひつたのひある。天祿琳琅の印
や乾隆御寶の印のある此原本かとうして
幕府時代より来りてあるか、今こそ支
那天子の内府を教諭して多んをとるゝて現
つた、珍らしくるへが、而時、たれ、珍らしくいこと
ひある高は、而時、し、考のちと西復刻するも
一日、ぬく、映写をしんてあつた、多んをも本書
とつた、ぬく、しん、か、多ん、考のち、海、い、か、え

か、字、美、心、用、心、版、下、を、心、こ、の、無、つ、以、時、代、映
写、を、し、ん、と、し、ん、と、隨、合、骨、の、お、ん、ん、い、ん、か、あ、ら、う
本書を翻閱する、扉：武夷殿徽宋本とあり
全計三十三巻、合巻十六冊とあり、乃卷首、乾
隆帝の序がのつてある。

題宋版春秋

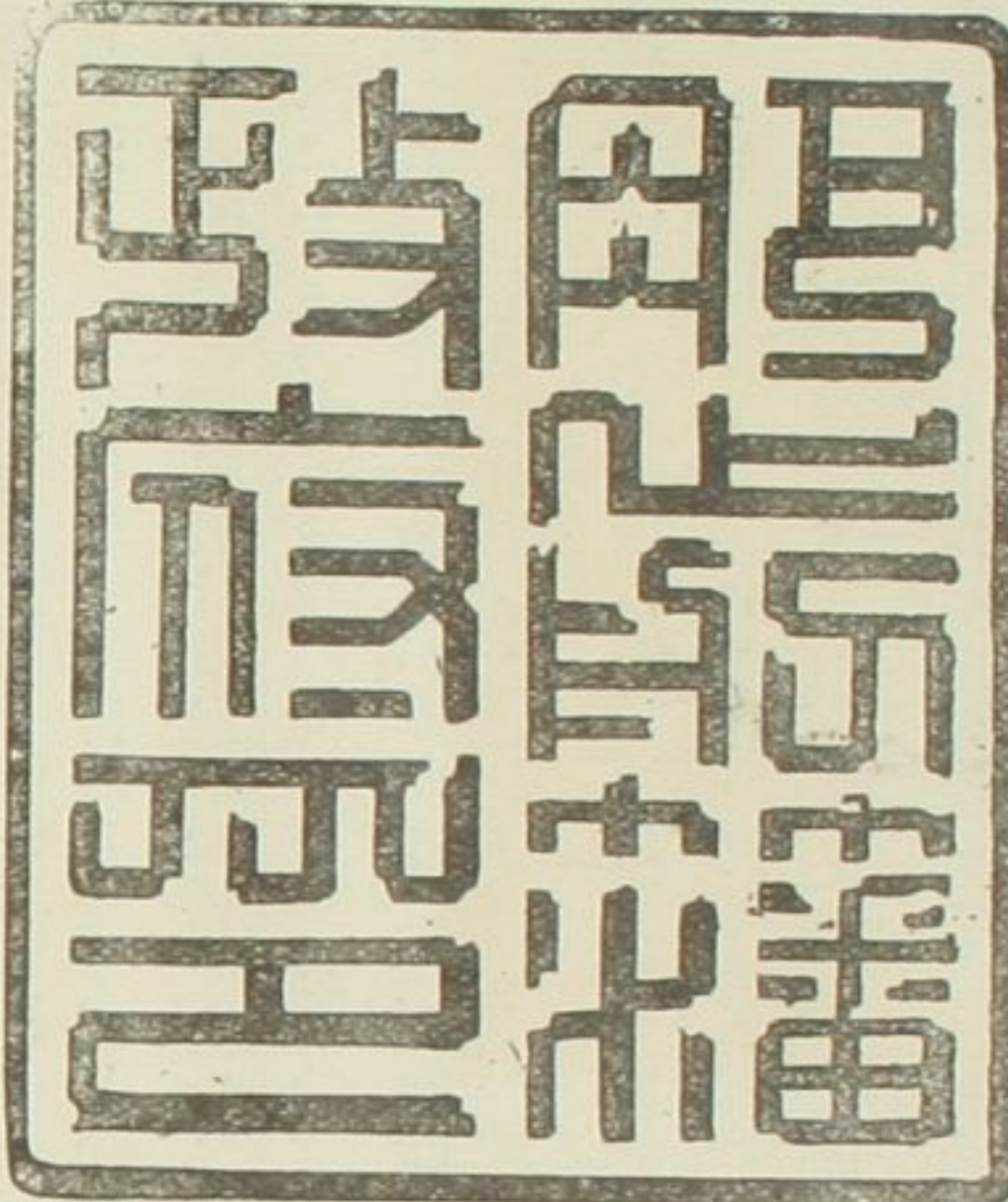
家塾荆溪宋梓閣相世聖書刻五經文
舊收天祿春秋獨續合豐城四部君羊
吳楚已夷狀以視桓文斯心誦之分尊
王淮漢宜凡皆廣義其也登認實
給

癸卯新四月御筆 〇〇

とあり本序の欄心に乾隆四十八年とあり餘白に
 相基兵氏刻梓翁(荆)家塾の印あり首卷一
 冊春秋名號由一回二卷を収むこれ善本也本
 無き不也次々年表を載す各卷の末尾に葉下
 者の名を録す宋本の例也即ち物一回の終に
 奉人臣孫衡敬考とあり年表の終に奉人臣全忠
 瓊敬考とあり各卷の葉末に吳(項)の印あり
 録を列録体八行也十七字あり又各の終に考証
 を附せり亦十六卷以下每卷の尾に相基兵氏
 の印あり項氏萬卷堂(圓)藉印を捺す項氏
 未だ何人なるを知らず一半づつ時舊善考の
 異るること見ふべし但し天禄琳琅の印各卷

ありこと考のん。全部瑞府本なりこと
 か也流布本と内容異るるを考へん今考ある
 いとまあるが或くは流府本の考証は多く海
 中見えずと京都に流府の甲抄の海船
 破したるに依るか此考の收は早大回古館に
 他日檢出比本書と對比とあり尚ほ此下
 木村嘉平の刻に成ることを附記す





家名に「薩摩政府」と刻
し同印あり、幕末維
新の頃藩に政府と称
し其例に「薩摩政府」の
印あり、この一冊
との其一例とす。

○四月十一日上野初極の由を文行を指し尾に「國表を
漁り左の二珠を記し泊る
一 いこや物語

慶長十二年「吉も御も古体心
一 北年代のよきう内容「其納

言の息め父の遠方、祇役のあり中
姥母に思まんて海中に埋めんと圖り
たりも其ふふに思つたもの思ひす或る時
地に隠し居が、過天に救われし四年
取し扶助を多けたりが後父子存
命のありあり古来の物語也、大分
良徳を記し物語あり、此を傳をかく、
一 日本原の子 小橋本十一冊
元禄四年刊地徳の問答よるもの
也此のそのうを垂しきそのありあり
北方なりし且つ今ハ稀観のあり也



の江戸生涯研究といふ雑誌に寄るべき個條を講演
は本誌の第一に成る狂言記のことが他の各巻より
もさうからうといふおぼえあり

我邦昔時の社会状態、民間風俗を記し、
其のうつら、徳川時代の史料も、
其の研究も、其の徳川時代の初
期即ち慶長から文禄天正元寇と
漸く其研究史料の之

しくなり、足利期に至つては僅に公卿
や僧侶の日記や彼等の文章、詩歌、又
は御伽双紙、繪巻物等から僅少の材料
を得るに過ぎず、徳川期の研究の容易
なるに比しては其困難なること恰も暗
中摸索に類すと言つても過言ではある
まい。然るに爰に狂言と云ふものが能
樂と共に保存されて、我等の前に幾多
の資料を提供して呉れるといふことは
何たる幸福なことであらう。

狂言には従來大藏、鶯、和泉の三流
があつて、現在では鶯流は亡んで大藏
和泉の二流のみが存して居る。而して
其古さから言へば大藏流に次で鶯流の
順序で和泉流は最新しい。随つて最古
風を存するのも大藏流であつて、享保
六年に大藏流家元の大藏彌太郎から幕
府への書上に依ると、狂言合計百六十
五番の中、末廣り以下釣狐に至る五十
九番は玄惠法印の作、麻生から察化迄
七十八番は金春四郎次郎、宇治彌太郎
二代中の作、目近から繩なひ迄二十三
番は作者不明、合計百六十番、其他番
外として、松ゆづり葉、さいほう、饅

頭、樋の酒、花盗人の五番を計上して
居る。

以上百六十五番の狂言中、五十九番
悉くが玄惠法印の作といふのも疑問だ
が、七十八番は金春四郎次郎や宇治彌
太郎即ち大藏家元の祖先時代に出來た
ものといふ傳説は稍信用するに足る。
作者不明のものも皆足利時代のものた
るに異議はなさうである。

普通文献の上からは闇黒時代とも思
はれて中々分明しない民間風俗も、此
狂言に依つては其時代の制度や風俗習
慣も誇張された諷刺や滑稽の中から明
に看取されること、恰も活動寫真と著
音機とを以てさながら數百年前の状態
を其儘我等の前に展開して呉れると同
様であつて、我等風俗等の研究に志す
ものは是等狂言の前に如何なる謙辭を
捧げ拜跪の禮を取つても不足は無いと
思ふ。

聞くところに依れば史料編纂長であ
つた有名なる故重野安經博士は狂言に
對しては深く著目され、同博士存生の
頃の史學會大會には必ず狂言の餘興を

催され、演了後注意すべき個條を講演
せらるゝが例であつたといふ。又有職
故實就中武器に就ての權威者たる關係
之助君(現奈良帝室博物館鑑査官)は嘗
て私に對つて言はれたことがある。曰く
狂言は實に貴重なる資料である、狂言
で使ふ小サ刀の指し様は腰帶を下から
一ツからませて柄頭が下になる様に指
すが、今迄夫れは形の上から來たこと
であつて實際の指し方ではあるまいと
思つて居たが、其後其時代の書き物に
よつて夫れが眞の指し方を傳へて居る
ことを知つて驚いた云々と言はれた。

狂言の文學上からも又風俗研究資料
としても貴重なるものであることは、
具眼の士の夙に注目せられたことであ
つて、明治から大正にかけて幾多狂言
の研究書が出て居る。重に是等は風俗
資料としてでなしに文學上の觀察から
成立つたものではあるが、比較的近年
の出版では野村八良氏の「能狂言の研
究」がある。

在來の狂言研究としては如何なる書
を底本としたかといふに、多くは元祿



紙 表 紙 表 黄

板の横本狂言記を用ひて居る。而して普通狂言本といへば皆此元祿横本を取つて活板に附して居るのである。

元ト〜此狂言本は寛文板の美濃本五巻本が初めで、次で半紙本があり、元祿十二年板横本正、續、拾遺十五冊が最行はれ、且其板は維新近く迄存して居て、近くは嘉永元年の後刷本迄をも見る。寛文板の大本と、半紙本とは其挿繪に於てやゝ相似たものであるが、元祿板の横本は形も小さく、且つ畫風や形も大分の相違があるのである。本文に至つては寛文板と一字の相違もなし。

是等刊本は從來俗に和泉流の狂言と傳へて居て一般には左様に信じられて居る。其文句は無論大藏流でもなければ、覺流でもない。和泉流と言はれて居るが、舞臺で演ぜらるゝ和泉流と比較すればこれも違ふ。そこで疑問を起して亡友岡田村雄君は、これも今は故人となつた和泉流の家元山脇元清氏を訪問して其眞偽を確かめたことがある。然るに元清氏の答には決して和泉流で

ないと斷言されたのである。三流のものでないとすれば、まやかしものである。今日論議に選んだ茶壺などは未だ詞もやゝ似通つて居るが、流布本の巻頭第一にある烏帽子折、大藏流でいふ麻生などに至つては文句は半分もなくごく省略されて居て似ても似つかぬものになつて居る。是等はどうかしたものであらう。

一體狂言などは元ト〜書き物などはなく口から口へ傳へたのが本義であつて、書き物は只備忘録に過ぎないものである。且つ各流とも其狂言や間の本を大切に於て猥りに外間に洩らさぬことは、シテ方即能の流儀と少しも變りはない。其入門の際の誓詞の案文を見たらば、夫れ等が如何に取扱はれて居たかが分らう。今例として大藏流の入門の誓詞を左に示さう。

起證文之事
 一今度御門弟に罷成忝仕合奉存候然ル上は對御家少も御疎略仕間敷候事
 一御子孫ニ至迄師匠を背我立申間敷

十二行

候事
 一御相傳被下候事共他言仕間敷候事
 一御家え致疎略此道之敵と成朝中間敷候事

一自然藝道相止メ候は狂言間之本不殘御家え返上可仕候事
 一場所惡敷所ニ而は決而仕間敷候事

右之條々於相背者

上者梵天帝釋四大天王惣而日本六十餘州大小之神祇別而王城之鎮守稻荷祇園加茂貴布禰富士白山摩利支天春日大明神並氏神之可蒙御罰者也仍神文如件
 年號月日 姓 實名書判 血判

大藏……………殿

以上は維新當時迄行はれた入門誓詞である。此上狂言や間の習や重習等を許さるゝ度毎に又一々誓詞を入れたものであつて、其規約の嚴重なる今人の夢想だもせざる底のものである。此誓詞文中にある如く「自然藝道相止メ候は狂言間之本不殘御家え返上可仕候

題した末節に

後子供の尙仕習ひに箱に入れて歩

事」といふ様な雰圍氣中に在つて、其寫本を其儘刊行するなどといふことは斷じて不可能のことである。爰に於てか流布本は一種何流でもないものを作つて開板したのである。假令何流から故障を申立てても、これは御流儀のものではないといふ言拔けは出来て居るのである。されば流布本の末に

右狂言記拙者家之雖爲祕密任御所望寫之令板行者也詞遣或者假名遣惡敷事可有之併狂言綺語也

とあつて其署名のないことでも、其無責任の著であることが知れよう。狂言綺語也といふのも何か遁口上にもとれる。

どうしてかゝる何流にも屬さぬ曖昧な狂言記が生れたのかは確言は出来ないうが、寛文頃に相當出来る狂言師が何か不都合があつて破門されて、幕末に和泉流から出た仙助能の様なもの俗間に行はれた爲に、利に聰い出版業者が其者をそゝのかして遂にかゝる書を作らせたものではないかと想像されるのである。

此寛文板の大本が行はれて半紙本が出来、遂に元祿板の横本となつて、世間では狂言本といへば此狂言記のみに誤信して了つたのである。前に云ふごとく各流共狂言等の書き物は途中廢業の際は返上すべき旨の誓約迄入れ入門する事情故、中々容易に狂言の本を手に入る譯には行かぬ。勢ひ入手し易い狂言記によるのは當然で、一九の膝栗毛中へ種々翻案、或は其まゝ挿入した狂言種は皆此狂言記に依つたこととは無論と思ふ。

扱かゝる依據するに足らぬ狂言記を底本とした明治大正の諸研究は所謂砂上の樓閣で、眞に徒勞であつたことは研究者諸君の爲に甚御氣の毒の次第であると言はねばならぬ。

今狂言の「茶壺」を論議するに當つて底本として大藏流を取る所以、並に流布刊本の狂言記の取るに足らぬ書なることを述べて、緒論とするのである。

(以上林若樹記)

茶 壺 (大藏流本)

アトざんざんざん松の音はざんざんア、酔ふた。いつもこの道は一ト筋ぢやが。けふは二筋にも。三筋にも見ゆる。身共はちと酔ふたさうな。是では中々行かれまい。ちと此所へ休んで参らう。ヤツトナ。シテ罷出たる者は昆陽野の宿を走り廻る。心も直に無者で御座る。今日はこやの、市で御座るに依て。あれへ参り。何ぞ能物もあらば。調義致さうと存る。先ぞろり／＼と参らう。イヤ誠に。今日は門出を祝ふて御座るに依て。何ぞ仕合の無いと申事は御座るまい。是はいかな事。あれは何者やら。道の眞中に寝て居る。ちと起て遣う。ヤイ、爰は海道ぢや。起きて行け。起きて行たならば能からうに。起きて行かいでナア。ア、熟酒臭や。きやつはした、かに酔ふて居たと見えた。イヤ。見れば何やら能物を背負ふて居る。去らばあれを調義致う。ヤイ、爰は街道ぢや。起きて行け。起きていたならば能からうに。

狂言師の白鯉館卯雲が書いた「見た京物語」に

狂歌師の白鯉館卯雲が書いた「見た京物語」に

女郎鼻紙にみす紙を用ひず、皆延紙なり。

とある。これは天明頃の實見記で江戸と對照した記事である。

巢林子の「淀鯉出世瀧徳」の傾城吾妻へ錢別のくだりに、

中のはつはのべ二折、ちよつとかりねも有物と、あぢな所へ氣をつくる

と京阪でのかうした巷には、その以前から用ゐてゐたことが知れる。ついでながら「夕霧」の

ひらり紙花七九寸

も「堅七寸横九寸」と紙譜にあるので、其紙の寸法であることも首肯される。

江戸では、卯雲のいつたやうに、洒落本やその他に、みす紙の名は隨所にあらはれて、つまり、それ者の専用ともいひつべきであらう。

手柄岡持の「我おもしろ」に、簾紙に題した末節に

火をおこすにみす紙をもてたれりとするはこれまた茶にあらすやといつてゐる。さくら紙で烟管をとほして、其の人が煙花の地で育つたのを見て、破されたのと、そのしこなしにおいて正に好一對である。

上代には成人の手書した反古をあつめて、これを漉返した紙へ、經文を書寫して冥福を祈つたので、還魂紙の名もできたさうだ。

「江戸眞砂六十帖」に、紙屋五郎兵衛の身代をよくせよとをせる條に

爰に馬喰町一丁目紙屋五郎兵衛とて紙商ひ越後屋の如く繁昌する、元祿年中九尺店にして打槌あたまの若者一人有、夫婦三人淺草漉返しの紙見世を出し鼻紙一通り賣弘めける、江戸中五郎兵衛一間にして見世にもはかばかしく賣れぬ故

五郎兵衛せり賣に出る、その節の漉返し紙を遺ふ者は、あれ淺草を遺ふとて乞食非人の様に笑ひなし後子供の商仕習ひに箱に入れて歩

行今は子供多くして皆五郎兵衛所にて請取る、それより段々はびこり今盛りの商人なり。

これ今いふ淺草紙にしてやうやく元祿永の頃から市中に賣弘められたことも窺はれる。つかふものは乞食のやうに笑はれたと江戸眞砂の著者はいつたすきかへし紙も、享保には、年産十萬兩と「經濟要録」に記録されてゐるので、江戸の大なることを物語つてゐる。

抱一上人の句集「屠龍之技」に千束隱柄時代の「紙きぬた」の一卷がある、寐さめにきく紙砧のおと、遠くのぞむ花街の灯、いかに詩趣をよびおこしたことであらう。

おなじ淺草の名を冠した海苔は、古く品川大森にうつり、漉がへしの淺草紙は、今は多く千住邊から出来てくるのもおもしろい。

○室州市 馬廻 村の人 は 仙唐三入の事あり
 余の逸事 は 山師を後 に 為 す 定 の 事 と する
 才 は 子 に 繼 つ 依 り 子 成 入 は 微 の 宗 に 細 に 流 す
 平 は 洋 の 中 に 後 に 列 し 念 心 交 は 一 代 儒 の 氏 に 成
 上 鳴
 ○四月十七日 左の教書 を 於 の 田 の 寺 に 得

一 東遷成基

五冊

此書の著者 は の う 古 の 流 の 本 全
 部 は 漢 文 家 原 東 遷 四 初 南 將 の
 事 と 記 す 一 程 深 史 逸 事 此 者
 七 分 の 得 難 き 事 と する 人

十二行

一 熊鷹真偽辨

高田の家老

一冊

此 者 熊 鷹 真 偽 辨 は 鈴木 甘 井 の 著 す
 卷 首 に 其 の 政 を の 道 息 を 序
 代 へ 之 の 卷 尾 大 概 叙 す 其 の 外
 純 善 致 を 記 し 叙 に 代 の 辨
 中 に 監 を 記 す 此 人 の 著 事 に 一 つ 記
 也 取 不 ： 熊 鷹 の 者 を 見 一 と 事 あり
 此 者 同 し 其 の 事 を 記 す 其 の 事 を
 此 者 恐 く 上 様 事 を 記 す 其 の 事 を
 リ し 事 を 記 す

一 後編言義

一冊

高田の家老

一 蹴鞠略記

一冊

あちきこを映写の古物なり
甚しきなり

一 西洋書指

一冊

福江諭吉の編輯するものと此古
別本あり、小本高松をとりて其意
四年刊行するも、里田行次郎の増
補一巻を終りに附す、里田の開成所
に官仕の事其の緒言に記也、福江
とのおおむらとあり、別本のあ
ることいんまむ知らせりし、いん
寧ろ跡とすもいんまむ、巻首二枚の

四と収め

日徳艦の並行とて、彼艦を過信せんに時代、沈没
か或るに委えんは、其の真贋を如何にとせむ、然り
か出来ず、其の此時、方り真贋を定験上から
判りし人か出来ず、其の著述の出るも、自れに於て
る、前掲能く其の偽物を、其の著述するも、
苦心を積んて、其の真贋を定験するも、其の著述の
研究家の、其の真贋を定験するも、其の著述の
いんまむあり、此書、其の著述の、其の著述の、
所神宮通の、其の著述の、文化三年、其の著述の、
三谷樸公、其の著述の、其の著述の、其の著述の、

から推すと著者は木甘井といふ人の時代に推
測し難く、三谷の序より甘井六十一年とある
が、尚ほ又左の如きことをいふてある。

高田甘井の日記裏に満ち、年刻十枚
紙手取生膜、供文四用者凡二十餘
載、遂に女子定、又採古今之論、疑
者は并、誤者は駁、勅成一冊、名曰
紙膜真偽并、是即手刻口常、而彈其
纖細、非徒記傳、少之也。

著者が其駁に二十年を易くしたること見らば、又
著者の為人、就之いづく

著素嗜る古、殊に四子、信通、遠東

先而通廟、年六十有餘、起兵動心無衰、
著述の富、其勢の精甚云。

余未だ其田に此の満ち年ありしを、安かた、他の高
田の人の謂ふことを聞かす、著者ハ、木甘井種
積保とあり、木村笛、段々大槻、盤、あるに、著
者、説し、此の巻の首尾、物付け、ある人の言
同く、その如く、木村、此方の題、言を托せし
る、果ていりしと見へ、著者、盤、あるに、甘井の實驗
をいづく、其に、左の如く、いふてある。

本、其、其、偽と、集、する、法、を、回、り、中、に、粟、粒、不
と、入、り、時、に、其、上、に、浮、び、丸、く、と、運、轉、す、る
甚、危、急、す、る、お、り、に、紙、の、如、く、引、く、末、に

器中のトマリ、ハラクとして雲物の如く
 其も若くして器中の満ち久しと一面
 日るに散漫して細くともうし此真際を
 リと、男末に此を親試せしと名は是必液汁
 然るに其効を又さの機能は必す此さ
 べし由是を思ふに、人身の膽液も亦
 必此さるる其運用あるべし本物の機能
 を以て推考するに其本性の運旋迅速
 轉動不止遂に散漫を為し、身中
 常末の管為ゆるに此液汁の試法を
 然れりと快悟ぬ、雀躍：悟を云
 余少年の頃、曾祖母の膝下に坐し、

し諦視せし、果し村井さかぬと流動を見
 膽液の旋物、靈あるが如し、而も液汁の本能
 然ることを得ざるの理あり。

甘井の存生、守りて能を得ざるか、此書中、
 を出す回りと別考し、其の細後の部を

- 頸城郡杉洋村 桑魚川谷々信濃界 畠
- 船郡村上奥羽界 酒原郡古志郡上野界

等
 とあり、此頃、まじ各所、態あり、なりと見ゆ。

此書出版の元、うしこと、序文もある、果しと出版
 せんし、やまや数年、前、狩り、其去の、固も、愛、まじ
 刊本、能、懐、考、(揮、筆、七、あり、ち、元、一、す、あり)

を兄等、或は此方か、此の字を、城後高田の人の
石巻本を、序を考き、神宮本下の書入多
くあり、尚ほ巻尾、自若二程と添く、志
本の花本と見えたり

四月十八日記

○服部耕石の次山陽に、関する、多し、各、耕
石、の、添、成、高、抄、に、添、寄、り

に、喫、茶、の、お、一、五、五、を、示、さ、る、ま、え、の、錫、物、を、見、直、經
七、八、寸、カ、あ、り、ま、い、ん、か、無、疵、を、由、中、の、金、泥、を、え
添、寄、り、あ、り、膚、肌、に、刺、あり、よ、く、見、ん、山、陽、茶、の、二、首
を、認、し、匙、飯、を、入、る、茶、の、味、を、添、寄、り、と、あり、と、え、刺、を
い、し、つ、と、木、天、を、認、り、あ、り、こ、ん、日、付、て、主、人、ハ、語、り
此、程、此、書、を、某、所、に、得、たり、外、部、汚、れ、あり、刺

七、判、の、せ、り、を、此、幸、に、無、疵、有、ると、大、き、さ、か、ま、ん、
ち、一、字、を、ま、く、僅、う、針、り、の、傷、を、拂、ひ、家、に、お、ち
ゆ、り、ま、く、拭、い、て、見、ん、ハ、鮮、る、山、陽、の、茶、款
あり、茶、の、為、の、も、あ、ん、ハ、初、の、お、ち、り、る、感、
が、ん、ど、こ、の、糞、の、し、ま、ん、木、天、の、カ、り、り、其、み、を、添
寄、り、身、を、ま、く、ま、く、物、に、回、り、の、認、り、あ、り、こ
と、ま、ん、ハ、其、の、字、を、刺、し、た、こ、と、否、と、無、味、と、あ、ん
ど、木、天、の、カ、と、し、て、ま、く、拭、き、た、り、或、は、い、
あ、か、の、傷、を、添、寄、り、ま、く、ま、く、無、疵、幸、に、考、へ、り、
刀、を、執、り、ま、く、ま、く、入、る、ん、ハ、い、れ、添、寄、り、を、し、つ、い、か、ら
其、の、刀、痕、を、ま、ん、ハ、味、を、ま、く、ま、く、考、へ、り、の、好、ま、さ、る、
ゆ、り、口、ろ、う、善、考、り、錫、物、の、彫、り、ま、く、飛、ハ、刀、の

入り跡を後へ取りにえと然らず、印刀を以て印を彫る法を覚刻し、字かかこ刀表にありくと見へて流石と称すると思はん。此等、其妻人目をとおし、わがやうく見へる事、持主が軽いな家が却てふりきことと主証する事、何れも奇なる感し、若くは、若者、其妻の流を何と余もよきやといふよりき、ぬき三つと呼ぶ所のべしと云ふ、即ち此の妻と名をきやうと流る、雲善林の二人の揃ひおふ、此のいふ所の事、此の山陽詩鈔の収めありと云う、こえをいふ、不測の地出しと云ふへ、こゝの事、四月十九日記

○和国歌集、その功、つき、此の事、集め、此の回古

と若干、示し、内信本二行あり、一の四ウ切本、二の山差の出版、係り、この事、此の手つけ本、三、和国歌集を元と、彫る、流布と稱し、且つ云く、能の云の刊行と評せ、この事を、家元の校し、犯すことを得たり、この事、花房、うん、この事、このこと、也、出来、字、うん、が、恐、く、流布、を、回、果、る、事、自家、用、并、こ、此、の、用、と、す、し、この、事、うん、と、其、流、派、を、つ、く、ハ、流、布、と、云、う、一、者、山、日、得、た、事、保、の、奥、書、あり、親、世、流、親、の、署名、あり、と、又、就、こ、の、流、派、と、云、う、と、上、宮、方、子、其、他、の、事、も、流、曲、と、す、る、曲、名、若干、あり、と、其、中、曲、の、事、も、流、曲、の、事、も、取り、あり、と、あ、り、と、す、る、事、も、採、採、し

這曲熟達のよのよ 謡ハせるよのよ 奥評ししよも云
ふへきしよのよ 入ッ節七世事也ハるの 奥評ししよも云
余ハ謡也ハる也 せんハ 又ハうせしこいハ 志し
おく

四月十九日記

○改羅列地の内佛其西分其人口の減退を見
るのハ昔の頃のより實にある年計改羅列の未
位この比~~中~~其其公の今の才立位も下つた也米四と
本とまむ比較に入んこと未七位に下つてある、毎年
く減退の率を以て推しては餘り遠外より佛草
西ハ減亡するの計集とある、此の原因は孰と多く

の人ハ単純に相傳の生活を持続する以て產物制限
をすべからざればといふけれども、多産多死の巴里の如き婚姻奪
の都令等もある人に就ては、そのありて、都令を離れれば
都令の質樸の人民に別段の理由があらねばならず、
彼等ハ決して巴里府國民の如く自家の教養を以て
出生産を抑制する譯でもない、是等の人民とせば
產物が多きことを忌まぬ、大原因がある、
それは、**夫が言明**は民法を於て土地財産の相続に
付ての個条にある、各戸主ハ其の死後其の財産を
其の子に平等に分ちてやるべしとある、
ことが、**夫が言明**の災を多しとある、多くの子を産め、
甚だしき財産の四分五割を失ひ、少くも財産を有すれば

か多くの子を有しての死後財産の分配が誰かの為
め、**夫が言明**の如きものがある、折角一區に
て有する土地も細かく分割せん、多産が終りに進み
てけり、**夫が言明**の如きものがある、**夫が言明**の如きものがある、
ひびき、**夫が言明**の如きものがある、**夫が言明**の如きものがある、
同じ**夫が言明**の如きものがある、**夫が言明**の如きものがある、
民法に導く、**夫が言明**の如きものがある、**夫が言明**の如きものがある、
續てて、**夫が言明**の如きものがある、**夫が言明**の如きものがある、
此、**夫が言明**の如きものがある、**夫が言明**の如きものがある、
従つて、**夫が言明**の如きものがある、**夫が言明**の如きものがある、
較べると、**夫が言明**の如きものがある、**夫が言明**の如きものがある、
とある、**夫が言明**の如きものがある、**夫が言明**の如きものがある、

讀者曰：彼是の論議があり、金田人口増加の全四聯
のことはあるが出来ておる。このまゝの大家族を有す
る家の税を軽減せしめし、子ある人の税を減し子なき
よりの寧ろ課せよ。大家族の家は、お前の特例を
きき生活の便利を與ふべし。税の遺言の自由を法律
と以つて定むるし自由を主張するが、佛を西に
あまが佛寺の國と見し、知ん切つて行ふこと必行の
お前にも其間に年一年減却してある。お前も母
界の大義の一本と多くを生霊を失つて、多くの
債を残し、何れか其の負債償却の以て各人別の
一は有る税の三つならん直ぐにあるが、人が
減するに其の據が一人ある金も多くなる。

人口の増減は物を以て四防の如くは十字教の
かある。これを將來人口が益と減とも保つ得らる。
か、これ七州並むある。佛蘭西の前途ハコシキ
ふと時流の如くよがある。産産制限は執中
する理定論家達ハ一面佛蘭西の如きを以て
ハコシキ
○西洋の如く米穀の如くは、
せん其行を以て二三百の如くは、
あるに違ふが、今も無実が且つ有る。
ひが公に如くは、米穀の如くは、
酒を如くは、米穀の如くは、
シリロシコシの如くは、西洋の如くは、

四月廿日記

らうが、そのが、近年行つてゐる、レク口といふ、
花柳病のけがまじ、倍々加増の効もあるといふ
人も、煉物麻布のことゝ、安んじし、ボリ出しし
向部に入らるゝよ、と、手、産手、加増の方かま
あるけんとも、其の効能もあらう、は、標榜が出来
さの、若め、花柳病、結核を、標榜し、多く用ひす
ま、この、加増、産出の、妨げを、さす、と、書いて、お
か、こ、こ、其の、手、書、を、あら、う、と、お、の、ん、ん、ん、
カ、ア、セル、ま、じ、ん、ん、ん、を、向、部、に、挿、入、し、離、温
む、添、解、せ、し、ら、う、の、よ、ひ、あ、る、が、先、に、法、が、元、分
て、ま、い、若、め、先、に、さ、す、と、添、解、せ、ぬ、こ、と、か、あ、ら、う、お
一、段、の、二、段、と、要、す、と、段、上、道、の、場、士、の、決、也

○此刊の講談は、その、例の、ことゝ、決、定、や、標、榜、の、譯、が、
多く、ぬ、ぬ、ぬ、と、あ、る、中、に、**花柳、遊、石**と、標、榜、し、た、一、篇
か、あ、る、を、い、ひ、**此人が、決、定、さ、し、あ、る、か、と**の、ま、に、お、か、し、て、あ、る
後、し、て、又、に、**自分、を、此人の、詩、を、何、う、の、詩、集、に、も、他、の、**
監、獄、中、に、談、ん、ん、ん、こ、と、か、あ、る、と、今、も、七、日、を、を、記、憶、し、
て、あ、る、が、其人か、お、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、
つ、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、
から、事、々、々、と、お、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、
ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、
の、就、か、い、文、字、が、あ、つ、た、一、風、麦、つ、れ、決、定、さ、し、あ、る、七、
と、い、う、事、を、い、ふ、の、櫻、井、の、よ、う、か、無、常、で、大、き、い、な、次、を、
い、あ、つ、た、と、い、ふ、事、を、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、
の、あ、つ、た、と、い、ふ、事、を、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、

とかき、ア坑出し物といふは、支那の新疆省に
掘ける燧煌石室から出てくる書畫や佛像や
其他の器具などが掘り出し物の例であらう。
こんこそ事実上の坑出しである。地層から掘り出
しだからといふて、それが掘り出し物といふは譯に
その物に賞玩すべき価値が伴ふからぬ。さうさ
からである。燧煌の土砂から掘り出せるものは
朝から唐代のものまである。皆反珠重すべき
價值がある。乾燥の土地であるから、土中の
ものが少く朽をぬ、事実上の坑出し物の
秀逸といふ差向こんぢあらう。保し、日趣味界
に、日通例掘り出し物といふのは、人間の手にあるもの

をいふのむはさう、人手にあるものを賞鑑力に発
見することといふのである。即ち比喩的掘出し
の中といふのである。更なる本意は、甲が餘り
珍重してあるものを乙がある體識を以つて送
出すと見定め之れを甲に入らう、それを俗に掘
出し物といふのである。掘出し物といふのも必ず
價の廉なることが一條件と考へてある。實價百圓
にするものが十圓に手に入るのとさうな掘出しの
名がつく。趣味の本体からいふと價がどうであらうと
逸品を發見するんば、それを甚だこぼすべきであらう。その
甚だしいを表するに免聖當の價を拂ふべきである。
乃ち、日買主が十圓に買ひよるといふのを買入る百圓に
償

七千由山七等の物は相商する價を拂ふべきである。保し雅三俗七の趣味界に於て、コンナ田尻子凡のことい事少く日行いん違存る。富平も高かるべきものを安く求めぬといふ所、興味の持主之れを諍りとして物の趣味を説くのを以て四ハ先づ價の廉を吹聴するの通例である。趣味の問題も斯うすると近しく下す張つてくるけれども、堀出すといふ第一要件、價と關係があるからこれに已むを得る。持主が盲目む名器と知らずにおもを丸を名器と知るとの移るの、其器の仕合ひある、青器物に對して盲目がある持主が二束三文の名器を手放しにからといふて自業自得で氣中の毒

十二行

たとも云へぬ、人を云へハ物を流かすも殺すも其人のありである。物に賞玩力のある人ハ、先づ其器を花しても瓦礫を有と推すと同様である。去んハ堀り出すと堀り出さへるといハ、其の人の鑑識の力の優劣も多少優劣方々依ると云ハせるを得ぬ。相商する趣味も鑑識ある人ハ或る物に對して辨別力の出来るの場合がいくらもある。無落款の書畫や古陶器をとりて、堀り出さへるといハ、堀り出しを午柄とするのハ、鑑識の諍るのむあつて、その價の廉を鑑識に拂ひさへべき當所の報酬と考へてゐるの、堀り出さへるといハ、多少の道理がある。保し世の中を堀出し、あつて汲つたものがあつて、その人ハ、堀り出す鑑識

た

鑑識の力や階級は或るもの

長しとみる人びと、彼等、唯比射侍心、使役
せん、若一の使侍を期するの、其の心事を剖析す
こと、彼等の難い、陋劣、味が潜在する世の中、上
み、上がある、堀り出さうとして、廢物をつかませう、
堀り出す者の、物を交換し出しと却る人、堀り出
さうとする、例が頻りとある、皆射侍、執事
より起る失敗がある、鬼七と無心得得によが
徳富家の、西隣より堀り出しと入る例もある、個
人のもの、射し、其持主、自から堀り出さう、権
利があるか、無いか、疑問があるが、其心、射侍
の念が無く、得比よめ、あるから、其人、罪が無い、
荒し、堀り出さん、が為め、種々の手段を用ひ、或ハ

騙し、或ハ欺き、或ハ詐し、かゝる方便を以て、或ハ誘ひ
或ハ惑ひ、或ハ至つて、趣味界の賊と云はるゝ、
ぬ、或ハ堀り出しの歴史、往々よからぬ手段が、
使はれ、堀り出しと古とする、人の勤も、
言して、憚り、手、絞の巧め、を、
陋も亦甚しい、兎角、ウグの堀り出し、
ある、多くの名器が、
其の素歴を、

其の素歴を 捜はん

○昔の教業、左の一書を得た

(四月廿四日)

一 島夷詠略

二冊

北者の山集上海に流字：込んじや
本であるが、元の汪大淵の原著は
我が島夷詠略^集八が校注を加くにあ
ひある、原著は例の通り地名をひ
録する字がある、あつて、強んと用
立ちをぬく、そのを録田が苦心して
細く細注を施し、羅馬字の原形を
七冊挿入し、原著の誤りを修正し
正してある、北者七始めを流字に致
かある、流字の校注本は日本に創行

とんておろか、自分かこんまも、宮目しんこ
ともまの、支那版む日本人の校注を
まつくり、其後印刷して出したもの
準しい心地がする。

○愛浦録人が時今つと題とちうそ各室の録補が述
刑務をく引けつとんておろか、こんまも、宮目しんこ
命の出遇つとんておろか、こんまも、宮目しんこ
おろか、こんまも、宮目しんこ、大坂の
醜儀のことかつき、録の訓題、まどか記つと
る、録をを生する、愛浦：就て前月、年元、沙
カある、おろか、こんまも、宮目しんこ、大坂、

と云ふ一應云神の未始物なるを果ては刑務なく
送えんとある刑務助の元人がるらしい本人高
実覚悟をきめておれと見へて今朝の夜多しを往
々のうか出せおふついに権杖の妻を以てしり
たつかたぬぬ七十二の元氣を以てて殺す杖の
身と云ふんとゆへへてハを等々轉に氣の毒の感
坊でぬ一袋と通おこして受けんぬよがた
て晩節を傷けることと云すく道徳がある
ハ君子人と云ふんぬ人けり今なること他人
目だつ感もする政事の欲神を臨り易い罪とハ
云く何わす用心を惹つたをあらう、道徳ハ人の
刻念ハ人すししもある意味なる迂闊の事

此の論弁のの端に此れを迂闊の爲めハ人
と云ふのむあうと云ふハまゝハ新事の報あること
く金の窮乏に困つた様も乗せるとすると一
概に迂闊の爲めと云ふハ、年光の取多しと
も云ふ、言を用ふべきは、晩年、さるかな(四月廿
四日記)

○此の市大田者故者姉崎博士の案内ハ此今
二事申の新田者故の地下土切を一夜して
流石に大規模の工事ハ、今ハ地下室、南、北、東
を略し全部掘つてある地點ハ、鐵條を敷て
ル、此ハ、掘り出し土のやり所、も困つておると
いふ、姉崎者、あまハ、電車の音のを遮りきる爲め

表門の造り大なるは堤を築き堀出しの土の仕末
をいかにどうかといふある七ありといふは是れが行ハ
九ありといふといふ又ある地を堀りてえとよき外のも
かありといふ、是れ何といふと起築の扱りの穴か
ちりたり堀井戸かありたりとよきを埋めたり
免に流す井外の長用を要しといふある、亦セメント
を解く考り又あるは是れは流すのよきあり
道日頼こととよきとよきといふは六銭を出さぬ
より此所から一井三千円かけ二井と築金つ
た、是れ方がやすりといふは、彼う出来上つても
水の用もなつかうといふは、是れは是れは是れは
要ることといふは工事の規模の大なることといふ

いふは假事終不に三寄り外四の文車とを
んをいふは摸(抄)といふは一現といふは、文車は古
く先邦に風がある、外四の二風といふを摸し
たのむといふは、宮中や園者控用として工風といふ
が、その物もいふは、宮中や園者控用として工風といふ
よりいふは、日本いふは宮中や園者控用として工風といふ
といふは、此外国から寄贈といふは園者いふは、
個の事柄といふは、是れが長廊といふは、後重の門
すべて開かすといふは、開けは置場と窮すといふは
といふは

此日市大の五人か、一枚の大形の宮をいふと得た
といふは、此四年(辛未)大宮の南校一覽といふは

一枚摺リ便説である。この原書は先頃の希大の
陳列に一説して考査を著しと思つておみ、幸い
寄よか取つてあつてそのと照らんれの小説外の幸
ひあつた、此一枚摺は十三段に横線を劃して南校の
後身教授其他関係者の官名氏名を録し、
ひ今に得難い資料である、お人名の外紙尾に
南校任責の大略が記してある、こゝに若干の
考と考するものがある、先づ冒頭を記す、大丞二人が
列してあつて後五位町田久成、獨及侍讀從五位加茂
お之の花が又へる、獨及の獨遠なる及禮地の略である
より次席は少丞とありて後六位長共、權少丞正七位
肥田昭敷の名がある、長共は三洲であることの中

さまも多し、是から教官とありて大博士の家資
佐藤祥(正六位)中博士の部は後六位内田正雄、
こゝに八瀬の地記の著者である、少博士の部は河津
秋之川本清一、堀越三喜酒、爪生安の名がある、准
席と云ふ補助七あり大職教司の階級がある、
冬々には准席がある、外人教師の名も七八列してある、
教頭がフルベリである、生徒の部を記すと入念生
四十九人、内書進生三十二人、書外生七十七人、
外未生七十六人、総生徒の内共七十八人、三十二人
獨り六十三人、お計千九十九人、お各科受持の教頭
も七細記を著し、お略する、定額金お納の部は
金二千五百兩、お期給金二千五百兩、お上學とあり、お計

二十五年田の江崎にありたことかおとそとて、此が種々の書目もあつたといふ者略すも此の一表りての次第初年最なる府の状況を大略知ることか出来る。

四月廿六日記

○華山の画譜家花本を稀書複製を以てして復本と清しき三年前あり。彫刻摺書二人苦心して漸やく成りたるをるんば如何にも上出来たり。刻も摺り七彩色も原本のまゝを乱るゝを、原色の青赤黄赤黒ありき心也とて、復本の長い字等も此色と存すと云ふを得べき歎。此出海布控も稀なり。家花本の外、岩崎の序に「本ありとも岩崎ありとも」巻末

稀書複製會々報

第四期 第十八回

大正十五年 四月

第四期 第十八回配布本解説

華山俳畫譜 一帖 (原本、東京市島春城氏藏)

この畫帖一冊は、渡邊華山が其門人鈴木三岳の質問に對へて、俳畫を描く時の心得を説き、その範となるべき松花堂以下の筆意を描き添へて與へしものなり。三岳は之れを其匣中に秘して獨り愛翫せんよりは、上梓して、俳畫の眞諦を同好に頒たんと欲して手版に附せし由跋文に記述しあれば、書肆が梓刻して鬻市せしものにはあらず。跋文に「巴西孟春」とあれば、開版は華山の歿後九年即ち嘉永二己酉年なること明かなり。

通例俳畫と稱するものうち眞に俳味あり雅趣あるもの案外に尠なし。有名なる俳人の筆に成りし畫

にだに省筆の木偶坊然たるもの多し。或は禪僧の戯墨に類し。畫賛の句なくば俳畫と見做しがたきが多数なり。華山が俳畫の範を示すとて、その筆意を掲げしは僅かに松花堂以下五人と華山自身の畫のみ。彼れは此畫帖に序して曰く「俳諧繪は唯趣を筆一義にいたし候、元祿のころ一蝶許六などあれども風韵は深省などまさり候。此風流の趣は古き所には無く、瀧本坊、光悦など防りなるべし。はいかぬには立圃見事に候。近頃蕪村一流を防めておもしろく覺候。かれこれと思ひ合描くべし。すへておもしろくかく氣あしく、なるたけあしく描くべし。これを人にたとへ候に、世事かしくぬけめなく立振舞、物のいひさまよきはあしく、世の事うとく納辯に素朴なるが風流に見へ候べし。この按排を得吞込あるべし」と。

俳畫の眞味に對する見解は、然れども、人々同じからず。必ず句贊なかるべからずといふもあり。假令俳味には乏しくとも灰汁脱けのしたるは可なり。禪僧などの描く飄逸過ぎたる畫とても、贊句あらば俳畫扱ひにしてよしと云ふもあり。或は俳氣分だに充實せば、贊句はなくとも立派な俳畫なりと、範圍を極廣く見るもあり。華山の如きも「俳畫は唯趣きを筆の一義にいたし候」といひて、松花堂、光悅等を本尊となし、句贊の有無に因つて左右すべきにあらずといはんとせしが如し。蓋し俳畫の本體は、自然を離れ形似を忘れて事物の神髓を暗示的に表現するにありて、客觀を離れて主觀に没入し以て眞自然を髣髴するにあるなり。故に「すべて面白く描く氣あしく、なるたけ悪しく描くべし」と云へるも、要するに此意に外ならざるべし。

さて普通に俳畫といへるは、南畫系統を引けるものや狩野派の亞流に屬するものに多し。大抵は句贊を除けば、淡墨省筆の略畫たるに過ぎず。俳氣分充實して超凡脱俗の雅趣あるもの果して幾何かあるべき

谷口蕪村を出だしたるは當然の淘汰なり。最後に華山は自畫二圖を示せり。蕪村、華山の畫は定評あれば贅言を要せず、享保以降に於ける江戸俳畫壇上の双壁なり。なほ蕪村と略ぼ時を同うしたる者に建部涼俗あり。畫を能くすれども俳味に於ては缺くる所あり。また蕪村門の松村月溪(吳春)ありて俳畫を物せりき。たゞの畫としては立派なれども、未だ俳畫との距離ありてやはり月溪の畫なり。また華山の後を承けし者には建部巢兆の如きがあり。俳味もあり畫も達者なれど、器用過ぎる嫌ひなき能はず。然れども寛政末より文化へかけては巢兆を推さざるべからず。なほ椿山の徒あれどもたゞの畫なり。俳人一茶も飾らざる畫を描けども俳味に乏しく、禪僧などのそれに似通へる畫といふの外なし。其他は推して知るべきのみ。

更に本書に收むる畫家の小傳を左に録す。

松花堂 名は昭乗といひ、瀧本坊、惺々翁と號す、松花堂も其一號なり。南部一乘院の坊官中沼左京の弟にて俗稱を式部といひたり。瀧本坊實乘の弟子となり阿闍梨法

俳人にして洒脱なる畫を描く者は頗る多し。芭蕉を始めとして其角も嵐雪もその他の者も描きたりしが許六を除きては杉風の畫に採るべきもの、稀に有る以外、俳味の充實したるものは鮮し。こゝに於て華山の撰擇に深く留意せざるべからず、其瀧本坊の松花堂、本阿彌光悅を俳畫宗の本尊として擧げたるを。彼等は俳人にあらずれども、其畫には俳味豊かにして氣韵高く、雅趣ある俳畫の神髓を具備せり。按ふに俳人としては先づ野々口立圃を推すべし、華山も「俳諧には立圃見事に候」と稱揚せり。立圃は貞徳の俳諧の法式を定めしや、『はなび草』を著して後進を導き、芭蕉をして歎稱せしめき。畫もまた松花堂を咀嚼して妙趣あり。既刊「休息句合」を参照せば其飄逸なる俳味の津々たるを覺ゆべし。次ぎには英一蝶、森川許六を採りたれども、風韵に於ては「深省などまさり候」と評したるは、さすがに鋭き着眼なり。深省は光琳の弟にして尾形乾山なり。其筆意を示さざりしは憾みなれども、畫風の俳諧と吻合して俳氣分の充實せしは世に知る所なり。一蝶、許六より飛んで

師に昇りし男山の社僧なり。書は初の青蓮院尊朝法親王にうけ、中頃より大師流に轉じ寛永三筆の一人なり。畫は狩野山樂、山雪に學び、後因陀羅の風に移り一派を爲す。寛永十六に七月寂す、年五十六。

野々口立圃 名は親重、松翁如流齊の號あり。俗稱紅屋庄右衛門、京都に住し雛人形を鬻ぐを以て人呼で雛屋立圃といふ。和歌は烏丸光廣卿に學び、書道は青蓮院尊朝法親王に承け、俳諧は松永貞徳を師とし、狩野探幽に私淑して畫則を會得し、後松花堂の筆意を慕ひ俳畫に巧みなり。寛文九年九月歿す、年七十一。

本阿彌光悅 松田氏、太虚庵、自得齋、空中庵、徳本齋、鷹山隱士の號あり、刀劔鑿定を業とす。書は初め近衛關白龍山公につき、中頃道風、佐理の遺蹟を尋ねて一家を開き、平安三筆の一人と稱せらる。畫は海北友禪に學び土佐風を交へて逸格を顯し世に光悦風といふ。又漆器蒔繪を能くす。後、了寂院といひ、晚年洛北鷹の峯に一寺を建立し光悦寺と稱す。寛永十四年二月寂す、年八十一。

英一蝶 多賀氏、名信香、安雄、字君受、曉雲、潮湖、隣齋、隣燠、一閑、狂雲堂、北窓、六集、潤雪、寶蕉、和央等の號あり。畫は狩野安信に學びたり。元祿中執政を護るに坐し三宅島へ謫せられ居ること十二年、赦され

て江戸に歸る。在島中の畫を鳥一蝶と稱して歡迎され、其描くところ自在なり。享保九年正月歿す、年七十三。森川許六 名百仲、字羽官、五老井、菊阿佛の號あり。井伊侯に仕へ、俳諧を芭蕉に學び蕉門十哲の一人なり。畫は狩野安信を師とし殊に排書に巧みなれば、芭蕉も許六に就て習ひたるより、俳士その畫風を慕ひ贊をとる者多し。晩年病を以て人に面するを避け、正徳五年八月歿す、年六十。

谷口蕪村 名は寅、又長庚、字春星といひ、宰馬、三果、東成、四明、碧雲洞、紫狐庵、落日庵等の號あり。夜半亭の號は、四方を遊歴して京都一乘寺に留りし頃より、其師早野巴人の號を襲ぎて別號とせるなり。曾て丹後に遊び與謝湖の勝景を愛し姓を與謝と稱せしが、時に支那風に與を省き「謝」の一字を姓とせることも多し。畫は京師の南畫家彭百川に學び、元明の名畫を漁りて濫輿を究めたり。後雪舟に私淑せる京都法恩寺の僧明譽(古欄)の筆意を採るもの、如し、華山が「夜半翁の畫は古間を取るに似たり」といへるは是れなり。天明三年十二月歿す、年六十八。

びて後一家を爲す。描く所氣韻高く俳畫に至つては追從を許さず、誰も知る彼れの「掃百態」の如き、俳味充實して一見人を魅するもの多し。資性慷慨、時世を憂慮し「鵝舌或問」を著して幕府の忌諱に觸れ、天保十二年十月自刃す、年四十九。

今回の刊行について

この「華山俳畫譜」の版木は昨年五月彫刻を了つたのですが、摺師が氣候と色摺りの關係を考へて今年へ持越し、一月から印刷に着手したもので、滿一年目の今月やつと發行することになりました。此の程度の色摺物を初版で印刷するのは格別困難ではありませんが、既に原版があつて、それに倣つて殆ど見別けのつかぬ迄に複製する事は、特別の技術と慎重なる注意とを要します。それが爲に長い時日を費しましたわけです用紙は極ですが、特に紙質の純良なのを選びました。

次回には、春木南湖が天明八年長崎に遊んだ時の畫入旅日記を發行します。紙數六十餘枚、筆彩色も數ヶ所施してあります。

前回の會報の初めに「大正十五年七月」とありましたのは「四月」の誤です。

の鈴木三島の跋を録といふ、版刻のの鑑定に授
 んハ、
 の跋の又、
 加く、
 村等、
 深の、
 復れ、
 の、
 人、
 野、
 願の

四月廿六日記

こときし推考揚かてうしうう、了教字七古体のとまき
 く此考の研究に功ありることゆかりありしをいふ出典又む
 院に於てこれか後知悉を心得つとすく 四月廿六日記
 の所の文の協分と王肥慶為協士を招きけりまひ
 である花柳者の清談をすえ比か其の歴史
 就るハ、日本の現存してある記録にありのハ、永正九
 年の法寺日記に載るのみ、其初めあり、京都
 此の書系があることを記してある、支那の古物に
 ハ石山齋南梅といふ者、記してあるのが最初である
 加此考の正徳を嘉清清源とあるをたの、ことを記
 したる心あり、永正九年ハ正徳の七年、南か

篆隸萬象名義卷第一

東大寺沙門大僧都空叟撰

- 一部第一 上部第二 示部第三
- 一部第一九八字

出 元
 一 於邊及少也初 元
 同也式古文 元
 元 眞園及大也始
 首長一底古文 元
 天 天

篆隸萬象名義卷第一
 石大長
 天也
 天也
 天也

此の書名に「松」の字あり、清涼寺の松あり、
 就てハ、日本の現存してある記録に於てハ、永正九
 年の法寺日記に「觀をみるのが、初めあり、京都
 此の書名に於てハ、記してある、支那の古物に
 ハ、石山縣南梅といふ者、記してあるのが、初めあり
 此の書名に於てハ、記してある、支那の古物に
 ハ、石山縣南梅といふ者、記してあるのが、初めあり
 此の書名に於てハ、記してある、支那の古物に
 ハ、石山縣南梅といふ者、記してあるのが、初めあり

篆隸萬象名義卷第一

東大寺沙門大僧都空叟撰

一部第一 上部第二 示部第三

一部第一凡八字

出

一 於遼及少也也

出

天

秦堅及顛也頭也君也
死古文 死古文 死古文 死古文

元

元 真園天大也始
首長尾古文

出

天

晉垣及天
太夕

示

示

時志及語也見、
爪古文

神

神

視仁及鬼也治慎
重、列、神、候、古、文

祗

祗

渠支及大也敬、

齋

齋

側階及洗心曰齋防膏
或敬也疾、饋、古、齋、文、齋、文、

祕

祕

鄙糞及神也視、
勞、祭、

祗

祗

諸時及敬也款、古、文

祭

祭

子裳及祭也至、
薦、享、祀、所、古、文

祀

祀

疎理及祭也歲、裸衣
上、祕、俾利、及、又、裸、大、

禰

祗

俾利及祭伺命也

禰

禰

殊亦及宗廟以石
為主也

禰

禰

於神及祭柴祭也
敬、禰、古、文

禰

禰

仕佳及祭天曰禰祭也
柴仕佳及禰禰、柴、文、

ら高時代かあり、日本の記紀の弘、此が氣の、四支那の弘

流の末年、唐、宋、から来るとあり、之、唐、唐、東、唐、と

稱し、弘、弘、弘、弘、正、徳、の、前、の、年、強、く、あり、之、茲、に、我、邦

の名、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

一此といふ名に重きを携かざるを得ぬと出だせば
士ハ説き、その者のタイトルにペーシジと字を
ふつ比のを示せしは、あまの西洋の研究家七花
柳病の歴史より考証の粗ひあると及ぶ。世界より
花柳の場分が三十三あり日本のうち内の一つであるが
日本の研究が断案と断ずる力あるかもし
んぬ。モリールの考の比有ぬの画の内は聖王エリサベス
が四五の患者を留めしを其の図がある。此の考
がベス妃ハ高貴の身柄であるのに慈仁の考の断
柳のこことをやつは、恰も物光の白まの考の断によ
く似てある。此圖に對し西洋の有るる醫學家
ハ癩病沈廢の圖比と断し、画の梅毒が充分

びあると、疑してある。而してこの梅毒の研究ハ癩
の患者と果北米の梅毒患者の誤りがある。圖
中二人頭を擡いてあるものがある。癩患ハカエキ
を覚ゆるものがある。俗に和留の白くはと云ふこと
きよのか出来カエキを感するの梅毒の兆候である。
又一人足をあらうとあるものがある。涕祝せん心
やさるキヅか入へるとん梅毒の徴候である。又
一人梅毒杖をついてあるものがある。こんを破る事
三幼の患者をあらうし比このは梅毒も汗るの危
難することきこのは毒を患るもの。一見ぬ入り
エリサベスの方を覚えてある柳子の破る事感海を
しとあるラメキが及ぶ。一人の女侍が後方

日まつて殿のけ出ししてある、その様子、柳子ハ、キレる、い
ことよ、奥の橋およし、ささいの川、ささいといふ、殿のき
ひあつて、社、いふ、名書、の、傍、便、が、ある、一、体、モ、リ、一、
は、実、里、系、の、描、字、を、つ、と、め、れ、お、れ、北、書、も、多、分、實、家、
描、字、に、あ、ら、う、一、段、の、時、も、動、く、ま、む、氣、抑、夜、の、
は、空、に、あ、つ、た、こ、と、も、見、え、る、い、ん、か、遠、く、上、の、極、老、
は、と、も、さ、る、こ、と、の、で、あ、る、と、復、物、を、し、て、固、と、示、さ、ん
ル

四月廿七日記

○支那の最大の國で中央の権力が全回及びひあつて、今日の
中央政府の権力の既往の類の無い程微弱であるが、皇帝
を戴き、中央集権であつた時、中央の権力の容
易、全回及びひあつた、斯くも、最大、の、回、を、
十二行

五、社会組織がある、此の賦の格行、土、匪、の、終、起、し、
り、さ、ら、か、ら、自、治、を、え、る、防、衛、の、法、が、あ、つ、て、必、ず、
し、中央政府の頼り、頼り、を、講、ち、あ、つ、た、事、
出来、さ、い、か、ら、勢、に、自、衛、の、法、を、講、ち、あ、つ、た、事、
ある、支、那、に、若、し、い、事、定、ま、り、た、ら、ば、一、種、の、自、治、が、
行、い、ん、と、あ、る、こ、と、ひ、あ、る、ま、る、自、治、の、一、部、を、平、和、に、
の、事、あ、る、に、固、結、し、て、あ、り、賊、匪、に、對、し、て、私、兵、を、以、つ、て、
防、ぐ、と、い、ふ、事、も、一、種、の、自、治、が、あ、る、郷、土、を、治、め、
る、事、の、一、部、と、い、ふ、事、が、あ、る、か、ら、あ、る、北、宋、の、末、に、呂、
氏、が、定、め、た、郷、約、と、い、ふ、事、を、四、條、の、條、の、一、條、に、
あ、る、か、ら、連、徳、倫、理、の、一、部、に、倫、理、が、あ、る、と、い、ふ、事、
郷、土、の、一、部、の、服、従、し、て、あ、る、太、祖、が、教、民、榜、文、を

発し六論を定めた。この我邦の教育勅諭に似てお
るが六論は臣民郷約に倣つて更なるまゝならしむる
にあり。道徳本位にあり。身けんとも不律に法律に
依る力を有し。これを行ふよる老人といふがある。
これと郷堂の長老家が必らずしも老年の人も
いふにわらう。長者と云ふこともあるが、地人の地位を
好みに近敷するもの威望のあるもの。郷約所
と云ふ自治廳がある。三條を備ひて善行を
録し非行を録し罪を断して一郷を治める。國
法を執る地方官に依るよりも、老人に依る一郷が
治まつてゐる。まゝが爲の支那の古き。騷動乱が
あるけれども其刻に地方の大なる影響を及ぼす

けの爲竟此の自治的郷約があるからである。此の自治
團體の力もまた中央政府の監視を及ぼすこと
もある。まゝ中央の注意を及ぼす。國法が堅
からぬ。支那の地々へ中央集権の爲め此の自治
を害するもの。之を破壊するもの。此の條
外面破壊を及ぼすこと。其實依然日習が存し
てゐると云へんのである。此の郷堂行政自治に
武力を備へてゐる。東洋の民社といふのが我を兵に
あつた。代り付佐といふ軍隊に。宋の王安石が
保甲といふて共に民兵を定め。此の郷堂自衛
に資する兵にあり。支那の北京の警備を始め。七
村直り列するもの。一朝事あるに防戦し得るやうに

◎新思ある熟者の名はピリトモし、其の實は里よりなる
の者がたゞくかゝ支那の社会に浸潤してゐるから、
ある。固体を以て此の習慣のある者、今とて
歸するに等しく、高き量の固体が居る者、今とて
九八折の末に出来たのが、七十二行ある組合
組織としようとする。大規模に米屋とか
爆竹とか石油とかの業者が、一何位つ、屋並に
ある。この自家防衛の名義を冠してゐる
から歸する強さ、前年好むが新理を以て行は
ると念に、此組合と衝突も砲火を交換したこ
とがある。支那の者から自家防衛の以る義勇
軍やトリオドのソート兵を許さんてゐるから

ウツカリ手を出せぬ、意欲放つては、一師一師のあつた家
の前より義門と標榜してゐる。其の味も義門
から起さぬといふてゐると、支那が、恐らく個體
であることも、お市の武備があつた。師者も、
時々も支援するから、為め手出しとて、女のひあ
う

○スコットランドのソラは前と云つたこと、
たゞありて、柄柄で區別してゐる。其の柄も、
あつて、毛も、わつと、あつて、其の地方特有の材料も
此と、漆のると、毛、へて、あつて、九十八の多く、
あつて、毛、と、利産物の者、
其の、人、七、十、を、知り、
其の、人、七、十、を、知り、

ツツの類をよめが出来てゐる。各回を讀ませられ、
しと七事、美弁別が困難である。やうに、
七も見つけが面倒である。書物の摺紙を
紙を用ひたものが、往々ある。日本故味は、
酒を飲んてみるが、意見を免れどどのクランか、
此のたと知んどのひある。

四月廿七日記

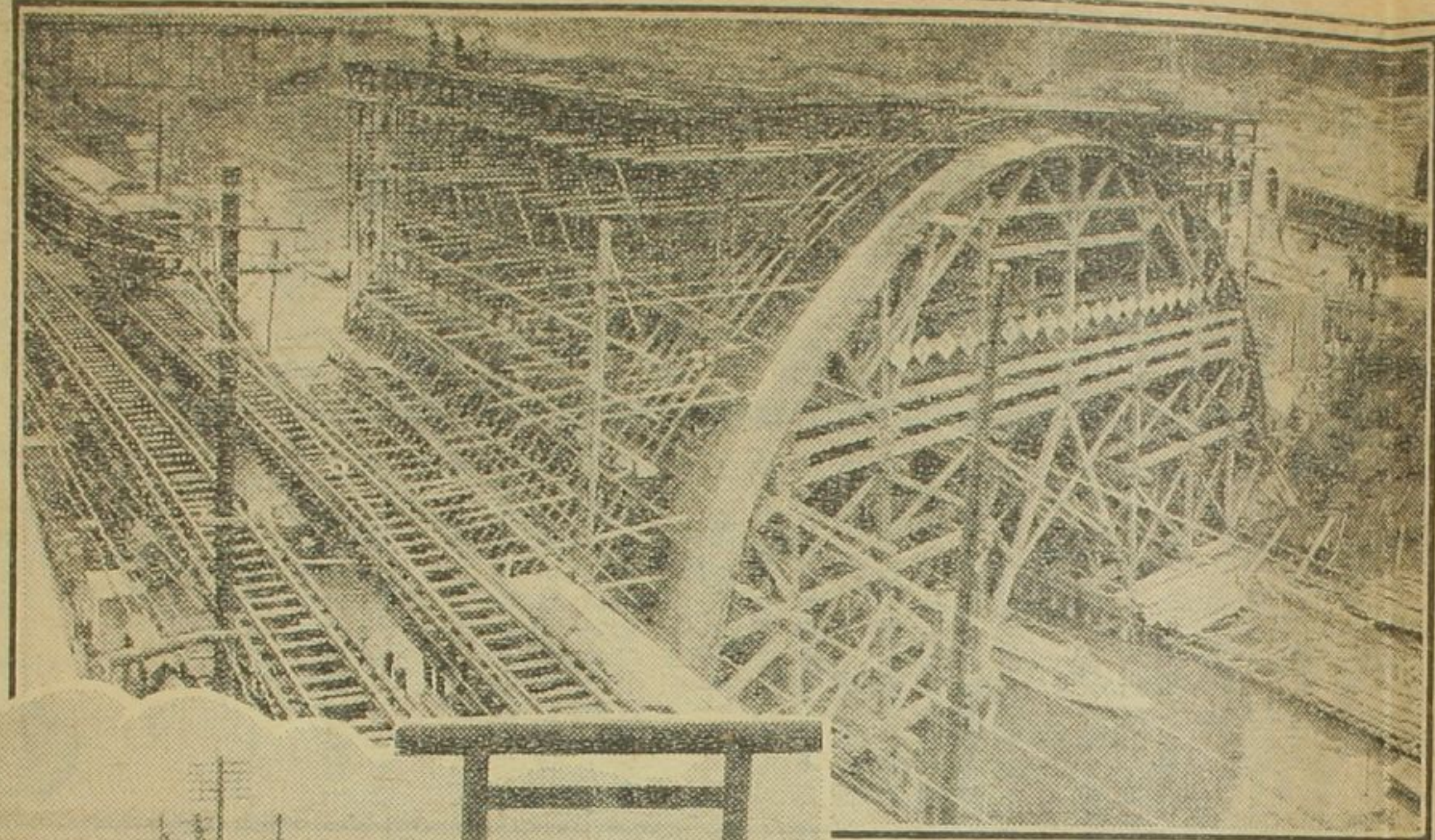
○四醴舎昨日、基所司會ツツを令物としてひくく、
此令物井政善といふ人の任を二倍する。芝田所ハ
丁目柳津保重伯郎内、あり、伯ハ此人ハ、
料の一家を貸して保後しおるとか、並に納地と
とせきそらうしが、集るるとは、判とわハ、
早もするんるんる料理ハ、極め巧みと、
各社の

この比の口こきふ、酒のカンマハ、
時方とわけを過ぬる、
性近、関係ある路、
の往妹、自製、
五月十、
供出、
見保身要法

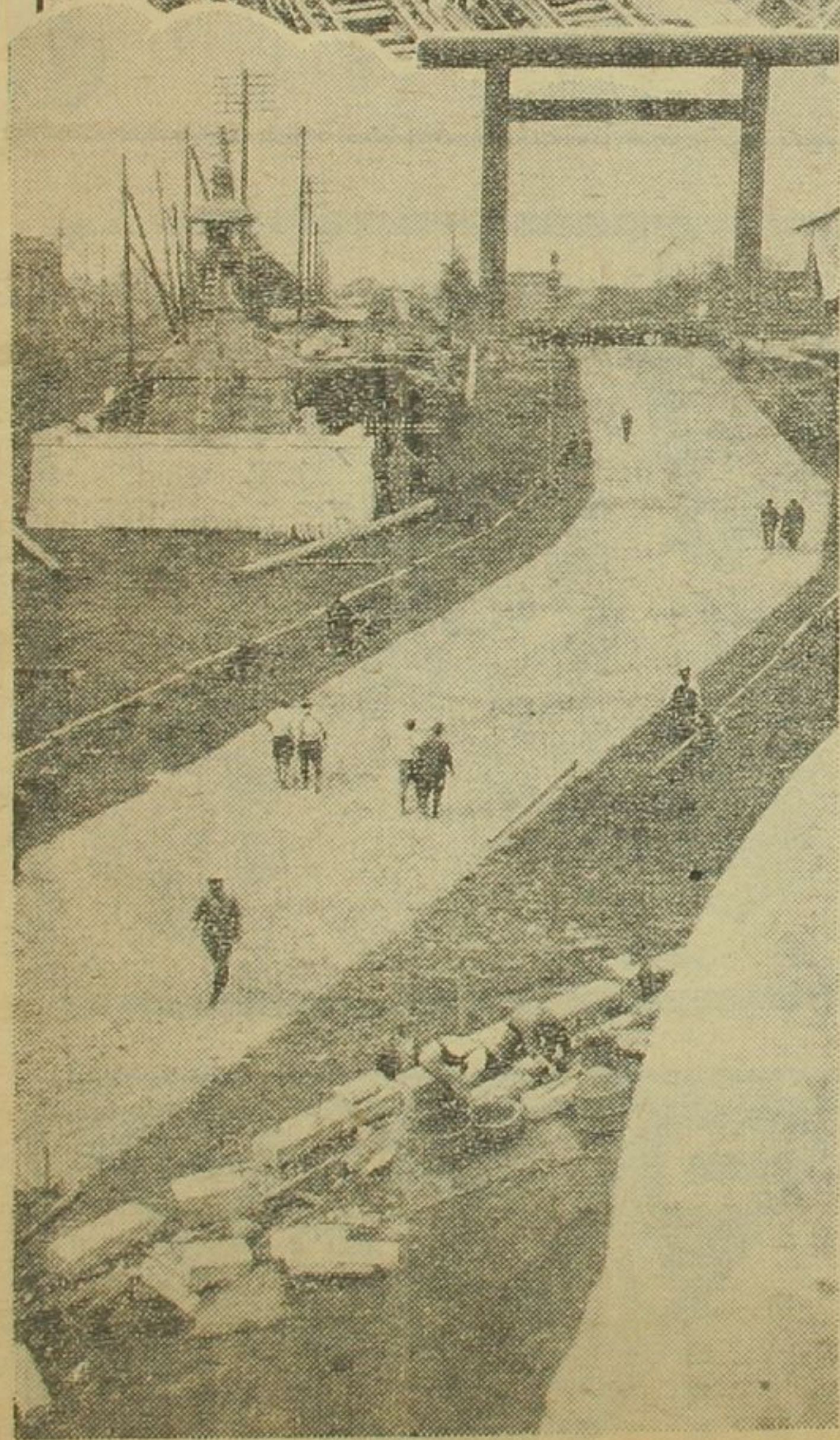
此方往妹の日記と稱すん、
往妹、みあ、
：危、
皮革、
の、

而時と思つてたふひあり、又一幅の深世傳を物さ
す、くし人あり、美人の立像あり、其の衣服より源氏
の形より春畫を模倣とす、曉宮の女曉御平の
後歎き、古圖を模倣したるものと覺く、前田
瑞山の高くしる、賦布、木綿更紗を墨味
法、朱色に深のあり、日形の模倣を諦視す、心
皆生、殊、其の鳥瞰圖あり、余ハ支那人の刻像
の廿四番春風の印譜と雪嶺の模倣圖、豆粒を
持、其より、月此等の名を冠して皆、悦に入る、世に
支川、雲華あり、東江の醍醐の寺に、男もとの
圓臺あり、ことを記す、え、弘安頃の草子に、野
珠あり、ん、七、物、傳、柄、公、け、う、れ、さ、ぬ、人、ま、く

わらうと記す、又、聖公の建てる方廣寺の秘傳
とす、とある、つ、ま、聖、華、一、之、れ、北、の、佛、ハ、甲、由、曾
とつ、け、たる、大、黒、天、と、聖、公、孫、孫、の、よ、を、寺、の、ま
納、め、たる、と、又、本、名、の、由、り、大、名、臣、の、大、佛、は、
七、丈、高、し、と、世、に、公、の、氣、宇、の、大、志、あり、と、
い、ふ、石、段、又、此、の、今、坊、なる、高、に、靴、を、履、く、地、を、
仙、波、立、即、其、漸、の、舊、跡、なり、仙、波、家、ハ、公、母、あり、し
公、け、の、用、に、供、する、牛、を、司、り、たる、と、あり、と、此、を、
を、飼、養、する、地、を、七、あり、と、酒、次、高、須、梅、屋
と、河、野、相、谷、と、此、に、春、物、を、り、窟、を、又、け、
と、編、者、の、物、の、名、を、何、と、す、ま、き、や、を、協、議、し、
談、初、期、の、的、次、と、記、す、し、と、略、を、定、む、(四、月



以上起訴して追究するのは刑事一を除く外の十名は何れも起訴され



「帝皇の復興は先づ橋から」復興局御自慢の架橋工事の中でもとりわけ新名所になるらしい九段の大陸橋。茶の水の聖橋の二つがほとんど完成に近づいた九段は二十八日から靖國神社臨時大祭を

「帝皇の復興は先づ橋から」復興局御自慢の架橋工事の中でもとりわけ新名所になるらしい九段の大陸橋。茶の水の聖橋の二つがほとんど完成に近づいた九段は二十八日から靖國神社臨時大祭を

「帝皇の復興は先づ橋から」復興局御自慢の架橋工事の中でもとりわけ新名所になるらしい九段の大陸橋。茶の水の聖橋の二つがほとんど完成に近づいた九段は二十八日から靖國神社臨時大祭を

新名所「九段の大陸橋」 けふの大祭から假通行を許す お茶の水聖橋も七分通り出来る

二十七日
○早大新設回廊の言聞より階上利の竣工
ありの田舎を直徑二間半といふ大ききま
て、いんを何を書きするまきや問題とすうとある。
洋装の裝飾するんが洋装画を油紙すべく
予七女のおおきいとも高の橋下村親山横山
大親のあ人着るハ其人：香かせたきおえりあり、
おふあ画家をゆくと定地を見せ回廊を造り
しとて余もまゝ共かゝ大隈分館に控を名
すを興つり、今後回廊を就ていろいろの役出
らんといふハ一もき楽まじむまゝ余も一楽を

一般の通行を許す事になつた何様
大石燈ろうの下は一丈八尺も短
り下げられたので大鳥居は以前
にも増して高々三そびら立ち借
行社協の

石垣に 古代の城廓を思
はせる様な美観を呈し九段下か
ら大鳥居まで二十一間半の廣々
とした長道が續いてある、この
道路切取り工事は豫定よりも早
く七月頃には完成のはずで引續
き聖橋架設に取りかゝるらしい。

工費で 起工されたので
完成は今年末と思はれる、何し
る幅十二間長さ五十一間にわた
る堂々たるもので橋下を通過す
船を六十三尺の眼下に見下ろす
さいふ東京一の高い橋である
(橋上が聖橋、下が坂がなく
なつたやうな九段坂)

若し見えぬふしと言枝側の面々皆言ふふのき終
に其のまに取はしえまふ其案の余に宿構あり
しうのまに親山大親ある人々著しと把とせるこ
とからフト思ひのきなることとて教育の略よ
りぬこそすくといふことを徴するに是なる田形
をま載しし一歩を略くし一歩を略くし
文野をあらうすの略の略に画を画すの略
の略内部の構造を略し之を略すの略
一之位するすくといふこととて画家を快くも
一之思構を定め更くも構造するにこそなるべし

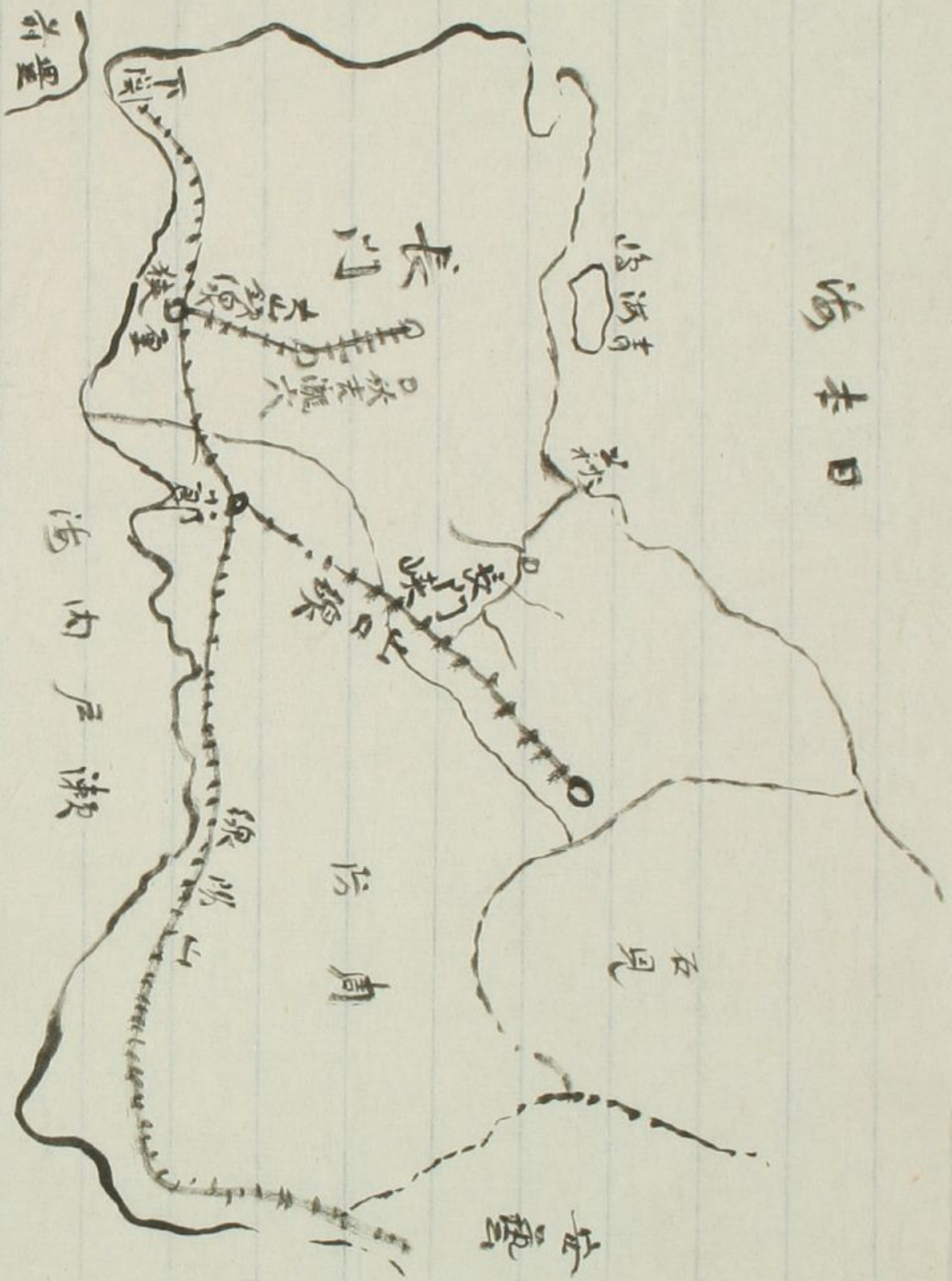
四月廿八日記

○山之秋と秘行しん帰来長門峡の奇勝を説く

このまに言ふの略を略すの略。孰れ又なるべし
くの絶景あり、此峡ハ古来も略すく近年まむ
其名久人と野のんてりしといふ漸やと道略の
漸け給ふ大正十年七月甲子とて吾人のおかよ
ある漸やくまの略の略なることとて、このまに言
しうの山陽後をゆき、^{宇賀}郡 野のんてりし山の後を乗
約二時を略し、^所堂原なる。長つ峡の上部
に達す、このまに言ふの斗りの河怪の略あり
石多く激湍あり飛瀑あり洞窟あり深淵あり
人々をてん接と取あまきしうとていふ、地形ハ左
図のこととて、^峽中の名あり

丁字の川 千瀑洞 榎ヶ淵 仙洲の湖

河本目



崎淵	元流の淵	北海洞道	龍宮淵
断崖流	雪舟橋	湯の瀬温泉	杉崎口
解瀨の流	大庚	金郷溪	金松岩
金郷門	猿渡瀑布	切家峰	重屏岩
連溪瀑布	井寺		

北峡の特色ハ地質の石英粗面岩より成り純壁
 の峰多く石巻石理極め美らあり要
 略を録し他日如く折の葉とす(四月廿八日)
 伊勢松坂の市中より本居直長の産石を
 保存しその石の根を移してありおの
 書石といふは四品石といふ石あり二階あり
 下室より箱式の梯子あり上室を此の梯子ハ

途中より外へ上へ引上げ得るやうなるおろし、あま
室へ入る時へ上へと様子も引上げ下と交りある
を流す旋岩の傾をぬけ下り、青い岩又人の例の鈴
をつらぬく柱隠しあり、夏を鳴す時ハ
あつ接すべしとの合圖を家人に考すらうとい
ふ前の高田より峰へ下りて流す水のことし、お
の若書の版木の多く存在すといふ。
○長州の萩と榛を町の名として上榛下榛と
といふをのみ、萩陰の村塾をいへ上榛とあるとい
山形屋に榛山の部のあるのも此地地名に甚しく
とやなく、或は云く萩といふ七ツバキのツを略して
のかあるとか

○東海通勢多郡高原・別荘あり、伯耆田下光野
の松えんす月上旬行くことなるうた、油とて毎々いつ
とや早大回ち終り寄贈を交けた古文書を複製
せよとの請求あるを忽ち所し、今もあつし、お氏が
又と多くの維新志士の遺墨を早大に寄贈せよと
すること、もろろたるも孰れハ、複製る古文書を堆の
帯せよんハ義理も満ち、念にきん、取らうこと
の目録も出まされ、運びたり、此古文書ハ天保
十一年のものとあり、後程選擇し、そのものえんハ
古文書として何れも上乘のものあり、複製るとして如
くす。やの目録もいませし、定まらるやんに取敢す
三十番の印刷に止めたり、吉美代エロタイ。ア代等

約四万五千圓を費し、何んぞ少の考証解説を
 附し、まを首領に重き巻子とすすべく思ふ
 とも差あり、田中伯仲の問答は、その事のこと
 二公を以て依り、先づ一二を、ハラのものを撰ぶ事
 するに、其の、國者館の寶の、一ツが廿とあり、
 端緒に、二ん、復れ、本仿の、以上、本書の、
 保多し、一、撰り、出せ、こと、ま、し、
 田中伯仲の答の、礼記皇侃義疏、六朝玉篇
 の、
 昔、
 復れ、
 初め、
 也

がうの二分金

館の戦争が済むと、當時藩金と稱へた
 如何は、二分金が澤山世に現出し
 た。それは當時世人の言ふが如く、藩
 ばかりで鑄たか、又外でも鑄たのか、
 老爺は當時年少ながら或る信すべき人
 からそれとなく聞いたこともあるけれ
 ど、それは憚つて今明らかに言ふこと
 は避けるが、何でも種々な名稱のつ
 た金があつた。薩摩金とか、會津金と
 か、鍋嶋金とか、其他種々あつたが、
 其兩替相場も亦非常の差があつて、當
 時六百餘軒あつた東京の兩替店は上
 一定して兩替したものであつた。其中
 最も高價は鍋嶋金で、百兩が六十兩に
 なつた。薩摩金は百兩が三十兩位で、
 最も安かつたのは會津の十二三兩であ
 つた。これが爲に大に損を蒙つた者も
 澤山あつたが、當時はそれほどに愚癡
 をこぼす者はととなかつたのは、今
 から想ふと不思議な位であつた。故に
 二分金を受取る際は、直に十露盤の裏
 か、或は板の間敷居等へ叩きつけて、
 其清濁の音を聴いて取引をするといふ
 形勢で、名古屋の藝妓の間には

「二分金の言草きけばわし程因果な
 ものではない若い時から人に厭きられ
 て柄が悪いとドン／＼打付けられ
 きうしう生れの妾をば薩摩でない
 かと疑はれ平田へ引かれて封じさ
 せ日の目も見せずにいぢめたが妾
 が生れが徳川なりヤこそ今は世に
 出て大家の旦那にかこはれる
 などといふ大津繪節が流行つた。此唄
 は今日なら文學拍子とでもいはれる、
 當時名古屋盛榮連の小常といふ妓が作
 だといふことであつた。平田といふの
 は名古屋の金座であるから、同所で封
 印したのは正金として、二十五兩包は
 どこ迄も二十五兩で通用せらるゝが、
 一朝封を切ると又世間から疑はれるの
 で、誰も減多に開封せず転々して行
 く意である。たゞ今の人に解るまいと
 思ふのは「きうしう生れ」といふこと
 で、此唄によつて當時無暗に漢語が流
 行しはじめた時のことを思ひ出す。「き
 うしう」は舊習で、當時は維新の際で
 何事も舊慣を打破する／＼にかゝつて
 居たから、舊い事をいふと直に「なん

だ舊習を言ふ」と退けるので、舊習と
 いふ語は當時最も流行を極めた語であ
 った。爲に遂に此語が單に舊といふ意
 味に轉訛されて、誰も怪しまぬ様にな
 つて居たから、流石の文學拍子殿さへ
 徳川時代の生れといふ意味に使用した
 のである。當時中人以下の漢語は捧腹
 絶倒の事ばかりで、此儘に押し進んだ
 ら將來日本の漢語はどんなに轉訛する
 かと、切に之を憂へたのは當時の書生
 輩であつて、我々書生は申し合せた如
 く大に漢語の訂正につとめたものであ
 った。今から想ふと新聞の少い時代で
 あつたから、此訂正には書生の功が大
 にあつたものと思ふ。
 ○饅頭時計
 老爺は明治三年の秋、大阪の心齋橋
 通りの時計店で銀側三重蓋の懐中時計
 を金五兩三分二朱にて買ふことにした。
 併し此時計は時間が晝夜等分で日本の
 時計と違ふから、どうか日本の時刻を
 早く知る工夫はあるまいかと尋ねたら
 店主は鼻をうごめかしてさも誇らかに
 小店では時計曆といふ者を拵へてあり

約四万五千圓を費し、河内多岐の考証解説を

ますが、是は未だ他店にはありませぬ、
小店で時計をお求め下さつた方に限つ
て別に金一朱下されば御分與致します
と云うた。之を一覽すると堅三寸横二
寸位の袖珍の冊子で、正月より十二月
まで五日間位は据え置きであるが、何
月何日より何日まで西洋の何時は日本
の何時に當るといふ對照表であるから
是がなければ時計を所持して居ても一
寸時刻がわかり悪いので、早速一朱を
授け併せて之を購入した。老爺は昨年
以來欲しくて、ならぬ時計を買つた
のだから、銀の鎖と磁石とを胸間にひ
けらかして意氣揚々と旅行して居た。
四日市で松波俊藏といふ友人に邂逅し
たところが、松波は老爺が胸間の鎖を
見て、ヤ君も買つたか、僕も實は先月
初めに名古屋で買つたが、之を胸に下
げて居ると他人に時刻を尋ねられて一
寸返事が出来ないで面目ないから、今
は全く箱底深くしまつて置く、という
たので、老爺は傲然として、時間のわ
からぬ時計を何故買つたのだ、という
て遣つた。彼は然らば君には直にわか

るのかといふから、わかるともサと時
計を示し、例の小冊子を取り出し、見
給へ、今は八ツ七分である、と答へた
ので彼は大に驚いた。さうして其冊子
は何處で買つたと聞くので、大阪で時
計と共に買つたというたら、彼は頗る
感嘆して大阪の商人は別だ、是非僕も
欲しいから其店舗を教へてくれ、とい
ふ。否、それは時計を買はねばだめだ、
冊子だけは賣らぬというたので彼は大
に落膽し、老爺にむかつて、本夕の宿
泊料は僕が一切負擔するから、是非一
泊して僕に其冊子を贈寫させてくれ、
と迫るので、止むなく其夜は四日市の
帯屋に宿して彼に冊子の贈寫を許して
遣つたことがある。

たゞ斯う書いたのみでは、或は今の
若い人にはわからぬ人もあるかも知れ
ぬから一寸註を試みて置かう。元來當
時の日本の時刻は夜の明けた時が明六
ツ時というて日の暮れる時を暮六ツ時
とし、夜も晝も其中央を九ツ時という
て現今の二時間を一時間とし、明六ツ
時、五ツ時、四ツ時、九ツ時、八ツ時

の四月三十日 下谷文行巻をゆゑを二三の回を
を得

一 弓材考

考

一冊

原名弓材考 長田兵庫忠春著
す所也 貞丈の冬抄とつし性
其誤りを正し 弓材の材木五六種
の圖を添く 弓のつくりを圖解を極め
在本也

一 陰名考

一冊

淡波松玉潤の撰ふ不也 卷之首

明治十七年九月堀秀成の序あり、卷末の明治十八年二月常陸水野秋彦の漢文の跋あり、此方の発行期を知べし、活字本也、紙布稀なるが故に紙とすべし

一 歌麿後年代記

二冊

家老：此方の刊本全部あり、此方在唐自写本あり、卷中に署名あり、記あり、天保三辰とあり、急の秋竹、沖田世、竹の屋鈴女志すす、即ち日とあり、雀尾深川に住し、轉りて

の著あり世に行はる、此方黒川貞頼の傳あり、傳り、博士の印あり、谷本あり、

一 明治初年財政資料

二冊

一 日本回送幣券首長才(御年報告

一冊)の明治五年刊行、送幣

局創之市時備外四人、券首長

トマス、ウヰリアム、キンボール、大森

省長、及井上大輔、報告したる書類

ニ、我邦シメントの才一次資料也

大政官記録の印あり、又大森省

花畑の印あり、

法令類聚

官商稿本

一冊

戰政門 貸部 紙部 國債之
部 信部 稿本 明治初頭
より始まる明治二十七年頃
の
太政官記録の即ち官商の
文書なること明けし

○正保四年天海佛正家光の号免東叡山に格を
流字のを以て心の善門名に世に流布す。此本
此年觀初する不友人より贈り来り

五月一日記

十二行

跋 後

寛永十四年。我開山慈眼大師天海大僧正始製木版活字。以
印大藏經。經十有餘年。全部完成。本朝從前無此舉矣。活
字藏在開山堂庫中。今茲大正乙丑眞俗結社將印行普門品二
千卷。弘布諸大方。體式一切遵奉大師之遺軌。蓋以欲酬法
乳甘露之澤格報恩謝德之誠也。

維時大正十四年龍集乙丑正月

東叡山寛永寺總本院第廿一世

輪王寺門跡天臺沙門大僧正大照圓朗謹識

○余曰壯年より京都をゆめ或回す事ありことと云ふ
由の一二を討ぬ而して古名見んことを欲しと果さざりし
事甚多し今次幸に二日間余も俗用するを日
間を得たり初る折にことと在東友人谷村一太郎
を東道よりして五日午後自動車とを認り先づ
等持院を訪れ此寺に足利十五代の本像を置
くの事あり堂の西側に並列しあり皆等身大
と彩もあり、面額多く醜悍流石に尊氏ハ長者
の相あり多、顔面の彩もおもしろからざるハ皆其勤
王家に首を持去らん野にさらへんは後修二復
を託すか故やあらん尊氏に相對し其家康の
坐像あり、源家の系を問ふ事か故と云ふ事あり

又へり、寺田義政の経堂、巨傑ること、清浄亭
茶室、其茶室池、龍蹄池妙音園皆風物あり
り、去つて程遠かしの龍安禪寺を訪れ大雲山と
稱す、門前境内廣ろく其泉自元の故あり爰す
べし、池あり、鏡谷池といふ寒天、鴛鴦有あり、櫻
あかぬし又鴛鴦池といふあまの池、浴巾屋橋と
稱せん、古時禁裏ありあまの枝を蹴りたること
○雅記に教えす、此寺にもと徳大寺の別荘あり
りしを細川藤元清ひき受けし禪刹とす、
ちうと、寺より入る漸くお阿弥心と傳ふる庭
をえり、庭内一木一草、白河を交き、つらね
中、大石の岩石を點出す、保、虎の子流し

いふよこんまう、肉圍木瓦の觀あり、重複を忌
めて特に此の心庭を工風しきか、古人の志近起
り、其人の想像外に出る所を料のめり、在り思
ふに白河の大海に形をうか、或は沙漠に形をうか
か必しその宮表ありん、庭圍の肉圍の塙壁ハ耐久
堅牢の土塙を築き厚し、若しのコシクレートと
も云ふべきもの、建梁家の冬春と云ふも也、寺内
に茶室雪臥軒あり、紹隆の四天王像首座の舊
居を復興せしもの、と軒外ハ雪江初冬の會
花に傷るといふ、古人の句、雪臥室深自徳庵松
生靈以款月推輪とあり、此茶室をいふこと、庭
背の森に三帝の陵墓とあり

更々二尊院と功の、此寺円光大師を中興の開
創といひ、其廟あり、所謂ハ念山ハ此處を本坐
と云ふハ念山の扁額を掲ぐ、寺背ハ山あり、旣樹樹
苑新緑清んといふ、此山の中核ハ藤原身定家が
別業を営みし遺址あり、時雨亭といふ、池眺
極めせり、此寺の池也、楠正行の頭家あり、其
逸院の境由ともといふ、白河寺の神祇あり、其
定利義隆の遺
一、入りて見ると、義隆の墓と兼人正行の墓
のありも亦也、二墓傍に石の玉垣を以て、二人
恩臨互いに忘るるもの、如し、墓側ハ巨碑あり、
二墓相並ぶの事由を刻す、其大略ハ此寺の再興に
興り、其川崎芳太郎の入佛式講談中あり、(大正六年)

開創で御座りまして、御子孫に依り代々相續をせられて居りましたが、貞和年間に天龍寺
開山夢窓國師の高足であつた默庵禪師を請じまして、更に中興の開祖と致しました、此の
默庵禪師は小楠公とは親しい間柄であつたので御座います、そこで正平三年の正月、四條
畷に於きまして小楠公が戦死を致さるゝに際し、其前日默庵禪師と陣中に會見することゝ
なつたのであります、其時小楠公が死後に於ける數々の事を委托されたのでありまして、
默庵禪師も大に喜んで委托を受けて分れました、翌日小楠公は果して戦死をされましたの
で、禪師は其首級を衣に包んで歸つて參りまして、當院境内に埋葬し、其冥福を祈つて居
つた譯でございます、所が其の當時足利將軍義詮が小楠公の忠節を深く欽慕して居りまし
たのみならず、亦默庵禪師とも昵近の間柄でありましたので、特に默庵禪師に頼んで、若
し自分が死んだならば、必ず小楠公の墓畔に自分の石碑を建て、貰ひたいと云ふ事を遺言
したのであります、默庵禪師は之をも快く承諾致しました結果、千載の恩讐二つながら其
塋域を同ふして、相並んで當院にあると云ふ事になつたのであります、
爾來數百年を経まして維新前後に當院に火災が起り、堂塔悉く烏有に歸する事となりま
した、隨つて小楠公の碑も草莽の中に埋没して仕舞ふ事になつたのであります、明治二十
四年に至りまして、時の京都府知事北垣國道氏が此事を遺憾とし、谷鐵臣翁等と謀つて御

覽の如き記念碑を、此の小楠公首塚の邊りに建てまして、之に銘して欽忠碑と名付けた次
第でございます、此事が明治天皇陛下の御聞に達して、特に御手許金若干を賜はると云ふ
光榮に浴し、稍々舊觀を改めた次第でございます、併し、
到庵首塚の形勢もな

以上の事實は久しく傳説、傳へられ、正平の位牌、其
事ありしと云ふと漸々人の知るをとりて、
余の多衆冬拜の後、余等々墓前、香を
献して正平の芳名を傳へ、此の念、
都名所、無き所、新加、
又、つて大覚寺を訪れ、此寺こそ、
帝、
所、
ける、

所以南北の朝の和議北寺に於て成りし事、即ち
明徳三年十月三日後龜山帝三行の神宮とて
入寺あり、同日昔父子の礼を以て三行の神宮に後
不松帝に接け玉ひて、南北の和議成りし事、
乃ち遂に嵯峨天皇以て、歴代天子の外皇子
皇孫相傳ひ法席を世傳し千有餘年自連綿と
絶ゆること、お流儀あり、及べり、去んば皇室
并に國家の歴史上重要な地位を有すること、
この類例を又とる也、近年宮内省より一寺を遷葬
し又コンクリートの経巻を造り中、勅おの心託
を望み、皇室の畏敬し玉ふざるんも、後宇多帝の
時の壯觀宏大の、この寺を、今存するもの

僅に十カ一なる(きざし)と云ふ、あ時の親摸の大慈
あへし、寺外に大湖あり、大浮の池といふ、又之を庭
湖といふ、洞庭湖と云ひし事、湖大に比し、
寺内の禰山樂永徳、光琳等の畫する所、其眼
福也、こゝを、つと、徳王の寺に行く、縁を、
去来庵を、ゆかて、山風山に出む、一身も、
都にゆき、去来庵の、後日、更に、志す

半の坊の寺、
代々徳川の、
多都めし親、
木尾川の、
余ひ、

余ひ、

を引き、維新十二時ころ三友と別る、これを五日の記とする

次日(六日)二條離宮桂離宮修葺の境、離宮を歴つて見ると、内内匠の許可証を得て、先づ二條離宮を訪れ、宮内省の鄭重なる案内を為す。此城と徳川家康の居る七年心の宮といふべき所を壯麗と云きし、かすかすたる想像に倍するものあり、家康の實妻ありてこれあり、城の内、此の御室あり、其の徳川の昔創りたる御室あり、其の徳川の華美の第を築つて、家康の御室あり、其の徳川の古に對抗せんとす、其の徳川の



早大 大阪校友會春季大會 早大 大阪校友會春季大會は三日午後六時から大阪ビルディング八階大ホールで開催、大隈名譽議長、高田議長、杉森教授、市島理事をはじめ、在阪校友并に、土砂川雄峻、放送局理事高山圭三、豊國火災社長大谷順作、大阪

電氣分館社長鈴木茂雄、清交社幹事西尾謙吉、府會議員石原善三郎の諸氏、その他官界、實業界その他の各方面から校友二百余名出席、盛交を認め一同歌を盛くして九時散會した(写真)右から大隈名譽議長、高田議長、市島名譽理事、砂川雄峻氏(下)は校友會長

際北殿朝廷の収ある所とす。嘗てこの大政官は
九内閣令の殿・或はとらる家康の長室と聞かんとす。
後終に皇室の離宮とす。修補する不ふか
各室の障壁に金碧瑤燭として堆を拋山の第と
半ふと似たり。之れを、**皇朝中**の所
素に比さん。天壤をなすものあり。誰
か皇家の式微を慨し武つの高倉を憤らざるもの
をんハ家康を成の故より華美とす。其の一益
を喫し、外人の来り見るもの禁皇宮に比し甚
怒陽あるを解し得ずとす。七理りあり。其
去つて桂離宮を功の北離宮の桂川の畔とす。面
積二町四方とす。天正年間豊公知仁親王の爲め

僅言す。不も七塊遠物命をなす。古き瓜瓜の
沸茶屋月波梅の庭池を心り更々御代智忠
親王の時遠物弄ひ命をなす。増築すとす。
こハ此茶式と二條離宮とハ全れコントラスト
彼ハ清浄とこハ清淡とす。其の雅観を彼
ハ、漸く北園いとす。之れを、**連築**
物ハ玄園輿の古方院、因煙裏宮、中古院、一
山あり。山名もす。二ノ間(七段の石とす) 三ノ間(雪の石と
す) 柴屋の石、沸茶御殿(後ハ屋上皇御幸東福つ
行路より建らる) 一ノ間上段合天井、上段、真の御棚あり
上ノ厨子廊、檜檜里檜あり。下の厨子鉄刀木沈紅
花櫃、其外唐棗、榉、唐桐、栲、柿、伽羅、若木、桐、檜、スカ

この枝より、二間、帝寝の間、化粧の間、御衣紋の間、湯殿、御厠等也。此の各室の後世茶人の範とする所と云。往時桂川往り此邊し屋を憎すの真意ありしか。椽ハすこ高く宛から二階の如し、一旦此の到る時ハ椽下より水を通りて疏しなりといふ。

此の庭もあまのこのまをこり数亭の亭あり、同波橋、松琴亭、月波橋、松花亭の扁額を掲ぐ。若ぬのこのま、月波橋、松花亭の扁額を掲ぐ。松琴亭、月波亭、八の宮ありを以て知らん。賞花亭、月の中島の山上あり、池、臨み石燈籠あり、又鑑水堂といふ女堂あり、池ひろくうつら、又つらと向ふも、あまの御衣紋のこのま、火といふ和歌を知らん。是れを

ハ神位牌をつら、不復み尾布、宸物の額を扁す。各亭、皆その額を以て、各亭の室を以て、まて、己の執向より、池、船を浮かべ、舟庫あり。すべて遠物の執向を、往泊をまじり、普普通通、捨て、用ひる木や石の材を、えまき、巧み、之れを利用し、まて、まその非凡の、美的の、腕を、押ひ、石燈籠の、こと、ま、ハ、皆、形、を、樹、り、こ、ひ、ま、白、雲、を、思、ひ、く、が、随、に、ま、材、も、あ、れ、か、ま、り、こ、ま、も、往、泊、的、意、義、を、取、ま、す、と、せ、と、燈、の、真、意、義、も、あ、ら、い、し、ま、ま、へ、て、遠、物、の、意、義、の、何、も、存、じ、禊、の、引、手、の、こ、と、ま、し、ま、皆、獨特、の、執、味、を、寓、し、り、ま、真、に、天、下、の、名、園、と、し、て、取、り、ま、り、修、文、の、洗、心、時、無、き、為、の、終、に、功、効、を、果、せ、い、り、

庵祖向井去來居士小傳

居士名は兼時字は義焉通稱を平次郎といふ後次郎太夫と改む、肥前國長崎の人なり、其の先は藤原魚名より出づ、世々儒を以て顯はる、父玄勝徴されて朝廷の醫官となりしを以て京都に移住せり、後長じて飛鳥井家に仕ふ、夙に儒學を修め射術に長じ又曆學を善くせり、其の平居武を講ずるや倦むときは詩歌を賦し以て自遣せりといふ、元祿のはじめ芭蕉翁の門に入りて俳諧を學びしが、素養深かりしを以て忽ち上達し社中の徒を壓倒せり、人々爲り質朴敦厚にして従つて其の作句も自から篤實の意溢れたれば、翁も及ばずとて恐れきといふ。

居士は當舎を創始して風月に嘯き花鳥に戯れ、専ら風流を事せり、芭蕉翁亦當舎に來遊せしこと屢にして、就中元祿四年四五月の交その滯留十七日間に及びしこともありき、其の詳なることは翁の筆に成れる嵯峨日記に出でたり、如何に師弟の關係親密なりしか知るべきなり、後翁の浪花客舎に病むや、居士は其の報を得て大に驚き急ぎ下り到り、終始其の側に在りて看護怠りなく晝夜侍養せしが、其の歿して義仲寺に葬る時に當り、肩衣を着けながらにして自から鋏鋤を執りしが如き、實に其の篤實なる見る者をして感嘆せしめきとぞ、加之其の遺物のこと等に就きても亦頗る深切を盡し、且つ正風體の俳諧をして愈々隆盛に進ましめんことを欲し、啻に師道を維持するのみならず之を擴張するに於て大に勉めたり、當時關西に在りては俳道の巨擘として居士を仰かざる者なかりきといふ、寶永元年九月十日歿す享年五十有四。

居士嘗て芭蕉翁の意を承けて編成せしものあり、之を猿蓑集と名づく、又翁の歿後其の句を抄し、以て斯道に遊ぶもの、便に供せんことを欲して編みしものあり、之を去來抄とす、俳道に勉むるところ實に尠からずといふべし。

今左に居士の遺吟中より十句を摘録し、以て其の風懷を偲ばん。

元日や家に譲りの太刀佩かん

何事そ花見る人の長刀

庵祖向井去來居士小傳

居士名は兼時字は義焉通稱を平次郎といふ後次郎太夫と改む、肥前國長崎の人なり、其の先は藤原魚名より出づ、世々儒を以て顯はる、父支勝徴されて朝廷の醫官となりしを以て京都に移住せり、後長じて飛鳥井家に仕ふ、夙に儒學を修め射術に長じ又曆學を善くせり、其の平居武を講ずるや倦むときは詩歌を賦し以て自遣せりといふ、元祿のはじめ芭蕉翁の門に入りて俳諧を學びしが、素養深かりしを以て忽ち上達し社中の徒を壓倒せり、人々爲り質朴敦厚にして従つて其の作句も自から篤實の意溢れたれば、翁も及ばずとて恐れきといふ。

居士は當舎を創始して風月に嘯き花鳥に戯れ、専ら風流を事せり、芭蕉翁亦當舎に來遊せしこと屢にして、就中元祿四年四五月の交その滯留十七日間に及びしこともありき、其の詳なることは翁の筆に成れる嵯峨日記に出でたり、如何に師弟の關係親密なりしか知るべきなり、後翁の浪花客舎に病むや、居士は其の報を得て大に驚き急ぎ下り到り、終始其の側に在りて看護怠りなく晝夜侍養せしが、其の歿して義仲寺に葬る時に當り、肩衣を着けながらにして自から鍬鋤を執りしが如き、實に其の篤實なる見る者をして感嘆せしめきこそ、加之其の遺物のこと等に就きても亦頗る深切を盡し、且つ正風體の俳諧をして愈々隆盛に進ましめんご欲し、嘗に師道を維持するのみならず之を擴張するに於て大に勉めたり、當時關西に在りては俳道の巨擘として居士を仰かざる者なかりきといふ、寶永元年九月十日歿す享年五十有四。

居士嘗て芭蕉翁の意を承けて編成せしものあり、之を猿蓑集と名づく、又翁の歿後其の句を抄し、以て斯道に遊ぶもの、便に供せんご欲して編みしものあり、之を去來抄とす、俳道に勉むるころ實に尠からずといふべし。

今左に居士の遺吟中より十句を摘録し、以て其の風懷を偲ばん。

元日や家に讓りの太刀佩かん	何事そ花見る人の長刀
時鳥啼くや雲雀と十文字	魂棚の奥なつかしや親の顔
岩鼻や此處にもひこり月の客	秋風や白木の弓に弦張らん
<small>自題落柿舎</small> 柿主や梢は近きあらし山	木枯の地にも落さぬ時雨哉
應々と言へこ叩くや雪の門	鴨啼くや弓矢を捨て、十五年



京都府葛野郡嵯峨町

落柿舎第九世 堀 晚翠謹識

○去来の唐柝舎を記す今次は如くして、かつて
嵯峨の地をよみ去来の唐柝舎の地を命ずるに
人高遠が其の別荘に双柝舎の名を命ずるに
んじ唐柝舎を往に聯志し未だ訪ひざるを貴し
憾と感せしかば此方如くを訪ひて得ざる唐
の自動車一のるしかけし細徑の傍を去る唐
へる道の一角に柝舎あり、弘仁寺の公主の陵と
すこゝに此公主年十七と早く漢的をよ
くし、唐天才の人と見えべき女流なり、去来が女
隨地に唐を捕ひたるは偶れか偶れかあるか何
んとも侍人の柝舎とすべし、柝舎の地は
畝の地あり、こゝに十数基の墓あり、去来の墓を

去来の唐柝舎を記す今次は如くして、かつて
嵯峨の地をよみ去来の唐柝舎の地を命ずるに
人高遠が其の別荘に双柝舎の名を命ずるに
んじ唐柝舎を往に聯志し未だ訪ひざるを貴し
憾と感せしかば此方如くを訪ひて得ざる唐
の自動車一のるしかけし細徑の傍を去る唐
へる道の一角に柝舎あり、弘仁寺の公主の陵と
すこゝに此公主年十七と早く漢的をよ
くし、唐天才の人と見えべき女流なり、去来が女
隨地に唐を捕ひたるは偶れか偶れかあるか何
んとも侍人の柝舎とすべし、柝舎の地は
畝の地あり、こゝに十数基の墓あり、去来の墓を

○今次の関西旅次一日京都大云を詣り新村出候
士と問者候に款曉し貴重書十数點を
見むむ日を勤むり近衛家の書托書中
瑞世園白筆の神樂譜一卷有り。巻尾に近衛
基進の談話あり。畷の貴重の物。外に近衛家
托本に唐六典の写本あり。白石新井氏の舊本
を原本と影写し其の也。各少書に天壽書の
花記あり。巻尾に瑞世園白筆漢文の跋あり。
此書之縁の大地震に合する。白石の地震に次
ぐ大正災の起ることを豫言し其の言の
のまとおを堀り花あり。果して火災起り此書
のこの僅くも免かる此書も故にんやう一

巻の書内十数紙に土痕を印するものあり故
う此書白石を瑞世園に献し以りと見え
書問添へあり。傍に雷火を免かんとす。任
緯といふ。巻尾に瑞世園の跋と吻合す。各
巻の表紙に近衛家紙の紙を以て其意
釘せしむ。題詞は瑞世園の草子なり。瑞世
院に唐六典の校合に没却し人此書を珍
とせしむるハ巻一巻像に難かる也
近衛家の托本以外に宋版二三種あり。たゞ其を
見ざるハ宋版た侍りし。近衛士清原直賢の
自筆の書あり。外に宋版の陳氏四庫書亦此
瑞世園の書と見えし。他ハ一々記す。

新村校長の事、数年前に於て始めて破提宇斯
 の原本を見る、又伊國政府より最近宇斯の
 贈の回書五六種ハダンニ其他古名人の著書
 と原本のより復来えし別に待を添く等
 このより壯衣釘の美目を眩するものあり

○此詠次酒念の美を感し、自ら大ぬる桂を、鶴屋
 と灘萬京都に於てのハ、露草亭とあり、鶴屋と灘
 萬と数年大波に行かざる、乃に面目を一変し、鶴
 屋ハ前年行きし、此に相おてハ、視摸の家、えん家
 ハ、高のくらもきき、狭の家のみ、さうし、今ハ、中、見
 る、よとさう、北家、刻重の美を、此、鳴り、は、お
 へ、中、艾の特色を、維持する、ハ、此、こ、お、て、灘萬も

昔一の位、る、あ、さ、さ、う、ん、を、初、め、の、見、参、さ、う、
 家、を、●、を、七、妓、七、妓、可、さ、う、瓢亭ハ、瓢、亭、の、家、
 七、余、の、前、も、さ、あ、る、實、ハ、家、前、ハ、錢、形、の、田、石
 七、清、水、を、全、出、さ、る、を、見、る、の、一、家、と、す、此、の、幸、に
 北、家、ハ、酒、念、を、瑞、午、の、季、あ、り、に、因、み、香、魚、の、壽、
 司、を、チ、マ、キ、形、ハ、さ、さ、さ、る、と、あ、る、酒、腕、を、満、進、せ
 一、め、ら、う、壽、の、味、嚼、吸、よ、の、ハ、舌、を、教、し、ら、う、吃、
 北、三、所、も、盡、飲、の、酒、念、を、具、を、お、し、得、さ、ら、し
 七、遺、傳、ハ、感、し、ら、う、校、書、ハ、北、を、以、つ、て、柳、橋、に
 比、ま、る、く、南、も、新、橋、に、比、ま、る、き、歎、美、ハ、南、を、推、
 一、使、の、北、に、あ、る、か

○今次の関西行旅次百帖中、自動車と題する大
板(一)と若田抄七(一)と京都の細川右衛門と物
ふ多く典籍を披く(一)時(一)く僅(一)ま大改(一)に
て其(一)又(一)古(一)法(一)字(一)本(一)一(一)印(一)漢(一)一(一)を(一)得(一)京(一)都(一)と(一)に(一)て(一)
偽(一)書(一)物(一)と(一)論(一)集(一)一(一)也(一)得(一)其(一)耳(一)一(一)左(一)其(一)の
大(一)要(一)の(一)を(一)録(一)す(一) 一印漢一を得 京都とに 偽書物と論集 一也得其耳 一左其の

一歴代名醫傳略

慶長流字本

二冊

此書 卷首に善沈の序あり後款左の
如し

朝鮮四宣務郎前刑部外郎戸
部郎著青州善沈

次に又玄子の序あり慶長丁酉春正月

望日

とあり其右丁酉の慶長二年秀右薨
去の前年なり。

撰者の法眼意安(恂)なり其の収
ある(一)數(一)家(一)の(一)皆(一)友(一)郎(一)人(一)の(一)上(一)古(一)なり(一)古
代(一)及(一)び(一)一(一)七(一)日(一)本(一)醫(一)留(一)を(一)冊(一)加(一)く(一)こ(一)ん(一)ど
其(一)の(一)撰(一)者(一)の(一)日(一)本(一)人(一)に(一)係(一)る(一)こ(一)と(一)を(一)た(一)と
ふ(一)べ(一)し

此書 價五十四也

一蘇氏印略

四冊

我邦に在る其(一)蘇(一)氏(一)模(一)刻(一)の(一)北(一)印(一)譜(一)あり(一)此(一)本

支那に於て模刻する所家花未元あり
す。

一 女あつみの目

一卷

此繪巻物語歎を測け名冷名爲泰
の筆に成ること物怪ひるし。この複巻
本るんも精巧をのを亂る。筆下改巻と
言ふまじし。信目を隔る。詞曲あり。
一篇の大長にある貴族一夜をころあ
りまじし。美人を元まじし。話いんて其
石に別り終てころりまじし。天地の
文を為す事果て美人相のことく清し
を水のすといふ。非凡の致向るんも巻尾

十二行

●秘蔵の回をあらわす。載り、蓋し締
ん。存するの繪巻をさう。余京都に到りも今
ハ攀柳折花の年輩ある。あま。愛を論せ
す。此巻を購ひて折花に換ふ。狐狸と魅
せらる。此巻の物語又ちう。と二天
す。巻名は善し。詞者ある。あつみの目とある
二取の目か。

一 山城名不寺社物語

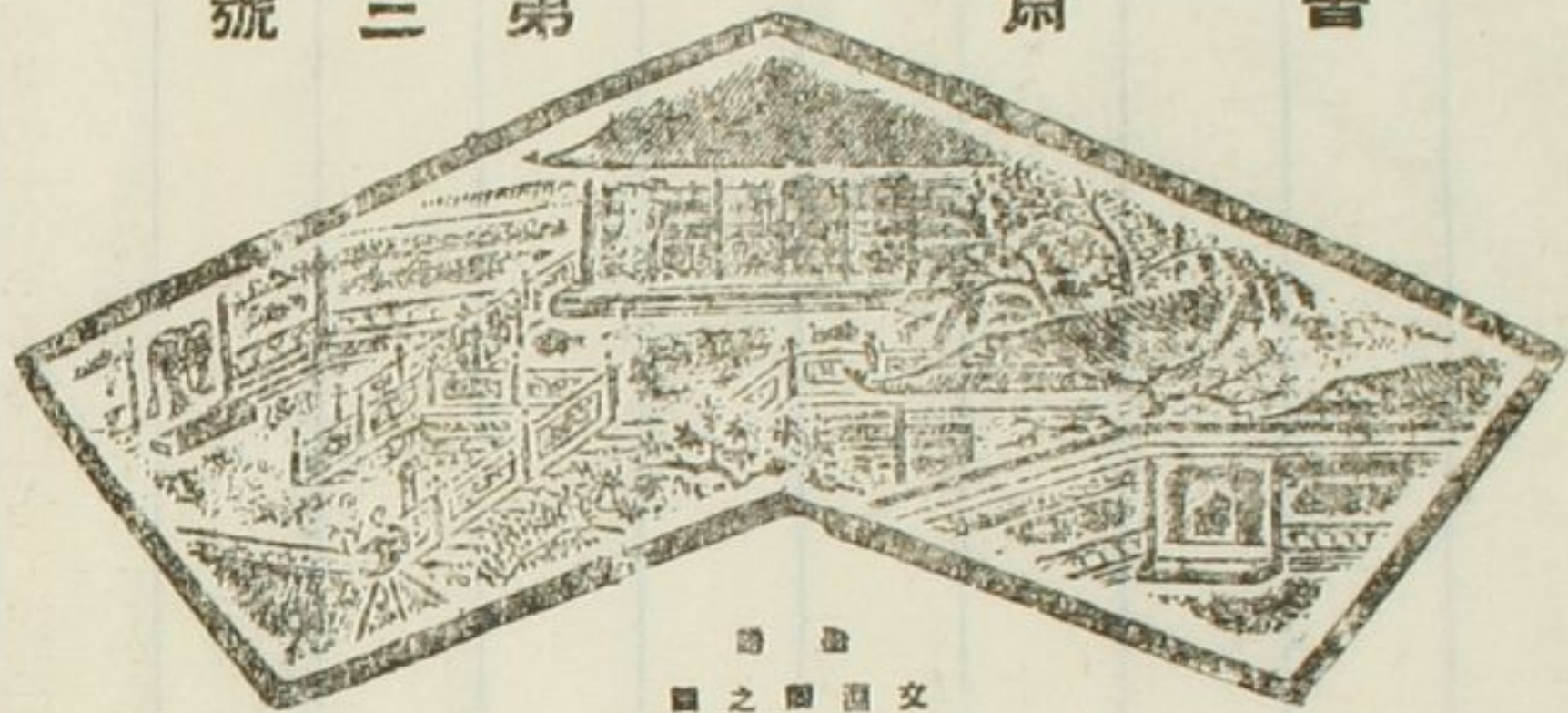
六冊

京都の名不を略叙し。たう。高橋
と刑し。この京都の。説の。琴。差
あり。又。田。も。あ。ん。い。桂。離。名。の。回
(五打。文。版)とせ。時。ひ。入。る。

多氣志樓主人

市島春城

書齋第三號



多氣志樓主人松浦武四郎はもと真言宗の僧侶であつたやうに聞いてゐるが、一體真言宗の僧侶は非常に脚が達者で山河を跋渉することを少しも意に介しない風がある。のみならず多藝な者があつて例へば佛像も作れば書畫は無論たしなむ、又料理などもやると云ふのが一つの特徴とも云へる程だが、彼も亦此種の人で何でも彼でもやつてゐる。それが又どれもこれも物になつてゐるのが感心だ。

第一繪も描けば和漢の學にも通じて居り、所々を歴遊しては諸先輩の教へをも受けたりなどとして居るが、殊に北海道探險は彼の最も著名な事蹟である。又篆刻も中々達者にやつ

たもので、ある時江差で頼三樹三郎と會して一日百印百詩を残して居る。その時の作は一つの集となつて流布されてゐるから見た人もあらうと思ふが尠くとも素人放れはして居る。(七一頁参照)

彼が半生の事業としての北海道探險も尠からぬ著書となつて残されてある。其の稿本は今南葵文庫に集められてゐるが、それに挿入された見取圖の如き如何にも巧みに諸所の風景が描寫されて居る。

一疊敷が、南葵文庫に移された當時一見したが文庫とは餘り隔たらない場所にあつた、試みに其の一疊敷にはいつて見ると一疊には違ひないが狭く、感じが少しもない。其處に彼れの働さがあるところ、同時に又面白いところである。

この一疊敷には尙面白い事がある。それは其處に使用された木材の凡てが古材を應用してあることで、その古材が殆ど日本全國に渡つての蒐集であつて、如何なる些少の木片と云へども凡て珍奇なもので、その珍奇なものが巧みに案配されて一疊敷を形造つてゐる譯であるが、彼はそれを詳細に木片勸進と云ふ名で記述してゐる。それを見ると殆ど百を超える數を示して居り、中には平相國建立にかゝる殿嶋の大鳥居の根だとか、吉野の吉水院に使用されてゐる古材だとか、或は伊豆三嶋神社の塔の扉とかと云ふものがあり、殊に南朝五十年間の行在所の上段

前地板であつたものとした條下に「お垢つき板とも申上ぐべきもの」など、註を施しあるのを見る、壁には作つた理由とも云ふべきものが認められてある。

彼の好事はこれに止まらず種々雑多なものをもよく蒐集したもので、今は散じて見ることは出来難いが、彼が戯れに河鍋曉齋に描かした淫褻像を見ても窺ひ知ることが出来る。それを見ると先づ彼が真中に寝そべつて居る。その周囲には悉く彼が珍藏の品々が並んで彼の死を悼む態に描かれて居る。(口繪参照)

一體、かうした骨董好きになつたのは、幼少の時に鈴の家の鈴を見てそれより大いに感じたことがあつたと常に語つて居たと云ふ。

彼は又中々の洒落れ者だつた。一時馬場先の角岩倉公のお長屋に住んだことがある。その當時馬角齋など、號したりもしたもので、こんな調子の彼は時々吹き出すやうな惡戯もやつて居る。

ある時、二十五日即ち天神日をトして珍らしい菅公像を見せるからと吹聴した。其處で彼の周圍を圍繞する好事家連はどんな珍品が手に入つたものだらうと思つて、珍品見たさに押かけて行くと、白い幕を下ろして如何にも勿體らしくしてあるのを恭々しく彼れが取り去つて「さ

あ御覽を」と云ふ。集つて來た好事家連が首さしのべてよく見ると、大阪の新町の轉進(娼妓)の番附であつた。その番附は當時珍品は珍品には違ひなかつたらうが、菅公を名として轉進は天神だが地獄の天神とあつて一同啞然たらざるを得なかつたと云ふ。

かういふ惡戯はするが又中々に信仰家でもあつた。殊に天満宮は何故か甚だ厚く信仰してゐたと見え、私の收藏品中に湯嶋の天神に奉納する扁額の繪を曉齋に命じた時のものがある。一體曉齋は酒呑みて人の依頼や約束に背くことはよくあつたものと見え、其の性癖を知つてゐた彼は中々曉齋に手厳しくやつてゐる。「君が私の頼んだ期日までに書き上げてくれるなれば御禮として正信の屏風をやらう。もし期日になつても出来ないとすれば困るから、私は誰れ彼れの差別なしに他の畫家に描かす、さうして君の名を附するがかまはないか、それが承知とあればその承書を認めて貰ふ」と云つた。その時の曉齋の承書が今私の手にある。(口繪参照)

又一時彼が古金銀の趣味を覺えて小判などを盛んに蒐集したことがある。それを一つ／＼時代順にならべたりしてゐたとも云ふ。又ある時は鏡をつくつて諸所の神社に奉納してゐる、その鏡の裏面には北海道の圖を刻してあるが其處に彼の意の存するところで、北海道は半生を没頭した彼のためには忘れることの出来ない地であり、同時に北門の鎖鑰と云ふのを現はし警世

する意味もあつたに違ひない。又人里離れたところに今日云ふところの無料休憩所を設けなどしてゐる。これは自ら甜めた旅の苦勞によるものとは云へ、彼が常に公益の志のあつたことが窺はれる。

北海道の地名には可成り無理なと思ふ字が宛てはめられて居るやうであるが、先年自分が黒川真頼氏の藏品を見た時に、武四郎の刻になる北海道の地名を刻した二十數顆を見たことがある。その字の宛てはめ方が如何にも無理からぬものがあつたが、同時に如何にも雅でもあり適切なと感じた、今日となつては餘義ないこと、は云へ、地名の文字を撰定する場合に何故かうしたものを参考とし參酌しなかつたのだらうと思つたことであつた。

尙ほ遺族の所藏品中に濫團扇の貼りませの屏風があつたが震災にどうなつたか知らん、これには種々の書畫があつて如何にも面白いものだつた。これは何時も彼が外出の度毎に必ず二三本携へて行つたと云ふ濫團扇で、先づそれを腰にさし胡粉のやうなものまでも用意してゐたと云ふ。もし出先まで人に逢ふと必ずそれを出して書かせたもので、それが集つて屏風となつたといふ譯で、これも亦彼が趣味の一端を窺ひ知ることが出来る。

彼の著した本は種々のものがある。先づ北海道に關したものの、珍藏の古器物を蒐めたものなど數十種を數へることが出来る。それが凡て自筆のものを上梓したものであり、大抵は極く小型のものであつて、一疊の書齋中にもふさはしいものである。



海客の甚早
名曰有清課
印士占吟人
百詩就百顆

詩は瀨三樹三郎
印は松浦武四郎
(一日百印百詩)

〇京阪行の由途伯奇回中光殿と静室好苗原
 の別荘に訪ひの由あり九時四十分大改裝特急に乗
 車午後三時十分静室に着特急蒲原驛に停車
 せり二十分静室にて下車、普通列車を待合せり八
 分二時間六十分時を費すを厭ひ自動車にて
 蹴上を走り、奥津江尻由比を經り蒲原に達す
 此間一時百歩を費す、伯の好術を以て道風光直
 也伯の別業の驛中の山際あり、前年岩洲の
 別荘に二回伯を訪問せしことあり、此を以て伯の
 今回好術也、此行前年伯も早大回公
 館に定宿あり、古文書と伯の好術
 に依り複製せし、友人と好術の事、伯に



呈し、更々伯が早大に寄贈の書ある、維新志
 士遺墨を中受けんとす也、着後伯の洋装を
 振ると余を延き例のこゝと、秋時時と移す、伯年遠
 八秩をこのころ七八年前元々時と喜老七異るる
 或人と喜老をえり、座振中一年荒き、客も多
 夫人の入り来り、側室とて、和衣、五才とて、天
 むらうや、吹雪おし、お敷し、つて、ある、側室の生
 ありとて、く、伯の性、怒る、熾ん、る、こと、ある
 へし、東京、片山利久、後、伯、二三
 のおを、献す、中、楠瀬、四年、を、刻せし、の
 ち、寶珠、花の、印、あり、伯、別業の、附、以、て、寶珠
 花の、地名、あり、伯、仍、つて、在、難、と、す、伯、之、を、獲

と大いなるうらぶ、漸やく口苦ん心重と英事と晩春と
其こそ、白酒を解せし余物と酒を飲むにや
種々の趣味、淡酒を、更の深きを執ると、辞して
腹を、入ると、伯ハ特に余の為め、酒饌を出し
酒を、余の心より、益を、奉け、淡茶に、
一時の、漸やく、後、に、死、く、ベッドは、
と、殊、打、室、の、結、拵、日、北、院、を、床、脚、に、
三個、時、待、待、の、花、二、個、を、置、く、皆、拜、付、恩、賜、の
よ、ま、う、伯、の、家、に、宿、す、る、也、又、今、次、を、妃、め、と、す
翌、朝、解、衣、後、伯、の、あ、ま、の、庭、園、を、隈、ら、
説、す、あ、ろ、と、言、ひ、庭、の、あ、ま、の、出、家、を、
趣味、の、岩、洲、に、優、る、と、言、ふ、こと、う、ま、く、
地形

形、跡、の、地、を、占、め、る、う、ら、ぶ、別、業、の、地、位、を、論、す、
背後、の、山、あり、園、隣、地、に、八、幡、考、神、を、祠、の、社、地、あり
園、内、に、自、然、の、淡、海、あり、又、深、園、後、の、山、より、
す、北、の、淡、海、を、裡、洋、と、い、ふ、而、し、て、背、後、の、山、と、伯、の
不、あ、る、庭、と、お、接、す、伯、一、流、の、心、庭、法、に、自、然、
に、近、う、き、を、庭、と、す、木、の、枝、込、石、の、配、置、皆、自、然、の
ま、る、ふ、を、欲、す、岩、洲、の、心、庭、然、り、北、の、山、の、
と、殊、然、と、す、樹、木、を、移、し、植、へ、る、痕、跡、を、山、の
樹、木、と、連、絡、し、て、幾、ん、と、縫、目、を、并、す、こと、然、
ハ、ず、こ、ん、伯、其、心、の、目、を、存、す、る、所、を、い、ふ、
ハ、自、然、の、淡、海、の、園、中、に、ある、こと、を、細、徑、に、こ、の
流、れ、を、流、す、心、を、或、ら、う、或、ら、い、う、徑、を、橋、を

築す、材木の樹材をくしむの光を庶キテ、幽玄の味を寓す。
 伯の先づ水源を元としてある由なるが、うくの四句配
 漸ゆく急とる人、仰き見ぬ、懸崖あり、崖側に巧み
 道もゆる、磴を拾つて攀つ、あ崖の間往く
 随つて蓋々狭く、終に一飛瀑の勢の所に達す
 元狸潭の水源より、北迄幽邃、建園の一部と
 思はれ、しりしり、故段を感ず、崖を下つて平地
 西阿あり、入つて憩ふ、伯曰く、狸の罾丸ハ豊かといふ
 今、伯の此の屋の廣さ、上品をまゝと、之を狸潭と
 と呼ぶ、屋敷に草藥、物産の大方をみ、盤をすくく之れ
 を文福と名づく、北迄狸に因んで命じ、名多し、伯曰
 く、北別荘を言ふ、先づ苦心して、此に在り、此の

のも、清をぬすこ、其量多からざるを得すと、こ、は、松と
 大なる野乃石を祀り、又、潭に池を祀る、よ、或、個子の
 多き、よ、あり、狸潭の地、七言、大なる野乃石
 といふ、此の、潭、外、織子と、つ、或、高、地
 輪、或、坐、廻り、通、伯の、丹、家の、庭、池、を
 清、お、う、つ、ま、き、深、く、あ、り、と、あ、り、宛、から、温、る、ゆ、ゆ、と
 あり、の、如、き、思、を、着、す、よ、の、皆、お、新、の、庭、を、之、ん
 を、祀、り、し、る、也、一、丘、後、に、大、松、あり、其、改、り、其、傍、に
 二、可、ろ、う、年、廣、の、建、築、あり、階、松、閣、といふ、北、の、別
 荘、と、い、ふ、時、伯、こ、こ、に、起、し、て、子、を、其、り、し、ら、う、と
 とい、極、先、に、中山、高、陽、の、筆、に、は、る、至、親、の、二、字、を
 親、体、に、考、し、と、る、扁、額、を、掲、ぐ、考、り、も、馳、眺、と、三

保松原眼のこたう、更なる高きを、一亭あり、撫江亭
といふ、実日集を命じ、下つて又、一亭を得
る、真亭といふ、待を、待あり、待あり、伊豆半
島を、眼前に、見ふが故に、伊豆見と、刻する、更ら
る平地に、下つて、一亭あり、其亭を、唐といふ、す、
其亭を、建築の材に、用ひ、伯の、法に、指し、目白の、舊
邸に、同名、同致の、唐あり、其を、再建し、なる、とい
ふ、扁額を、見る、山好公の、目白の、其亭を、
詠し、和歌、教首を、掲ぐ、壁の、腰、
四五年の、伊勢、曆あり、九月、某日、朱、
伯の、生誕日、を、記念する、也、漸く、
つ、家前、
十二行

の、正門の、お側、白、
跋あり、家、
其境内、狭し、と、
志、
えと、
其、
も、
い、
淡、
陛下、
詠、
と、
取、

まゝ舟降りあつてもとと蓋し三四千海の節忍
耐の表を穿し喰へるやう、伯力も自詠を口すさま
しく焚くやうくらの文見人せう人よ日陰に向ふこころ
高まるし仰り勤まると北歌蓋し静藝文庫のの境に
しと心らぬやうも徳川ゆひの表を穿し喰へ
あかく庫に出入し教場の維新志士の遺書を
さす、皆早大の字の贈と約せんやうのも也十一時過ぎ
辞して向東の汽車に投ず
○旅歴をえきよせ 大改ののり生全保陰分社
●新交活橋 角ニ新築のてん五層のビルディング也
二室を割のて洋画家に貸し、こゝにアトリーあり、他人
の入るを許さぬ、裸体婦人をモデルとせしむる日こ

れに初と描写するかな也 校友のあつた余を拉して
此室に入る果つての齡の女子全保庫を一隅にま
つるを見る、陰毛七故いず、而も自表せし、唯此余等
の入るをせし、暇日しつゝ聊ら恥つるゝあゝ如し、一時
僅うの八十銭を獲て、師完の對象とらるゝ、悔んむ
べし、
汽車のつらゝと思ふを浪舟の者性、矢田揮雪の
「津打のしゆ」を悔ひ、新橋十物時河、是處を感
せざるし、此や現のお産と謂ふべし、余初めを東京
に来りし時田に助脱産に罷り手足皆切斷し
尚休舞をせとあつらん、おかつるのて鏡面を渡り
たるを一鏡しつゝ、えん甲し助の最後を、此方を悔

後(七)此例優を知るか不也。田しゆ車敷山(佛
觀心院)思(ん)て。後門を供し。觀心院の世と知
らむと。柳橋の敷千代(女)と坊を(通)りて其の前
門を衝く。不忠儀の縁といふへし
赤部二條離宮の(前)に保す(追)福を(要)するとの
一(寺)あり。之(武)者隠しと(呼)ぶ(寺)あり。將軍の坐所
の片側(之)必(多)く。壯麗目を敬(め)かすの(襖)あり。其
を敬(め)敬(め)護(す)るの(士)潜(み)る(読)めあり。丹(口)寺
あん(口)刀を拵(し)出(す)の。此(室)を(武)者隠しと(唱)ひ(お)こ
ゆ(し)。將軍の坐所(之)不(多)く。必(多)く(一)室(附)属(す)
余(始)め(て)見(る)不(可)也

今次(嵯)峨(此)を(若)草(の)寺(院)物(所)を(訪)め。市(務)不(可)
判(り)あ(ま)ゆ(ゆ)を(訪)ん(と)す(る)も。多(く)人(を)し。入(口)に(テ)ー(ル)ン
あり。佛(を)え(う)ま(し)や(ス)タン(ブ)に(向)帳(を)敷(す)。式(壇)
ニ(ヒヨウ)シ(ギ)を(置)く。こ(ん)を(打)て(ハ)人(始)め(て)出(づ)来(る)。
余(始)め(こ)んを(一)寺(に)限(る)こ(と)し。思(ひ)し。追(々)他(の)寺
院(を)訪(め)る(皆)こ(ん)あり。一(種)の(呼)鈴(を)京(都)法(院)寺
の(一)部(漢)と(見)し。や(う)い(さ)る(ま)る(も)ン(キ)云(ふ)や(う)。
古(山)向(と)流(次)陞(下)の(離)宮(の)ま(り)及(ぶ)。須(磨)の(離)
宮(に)就(し)向(云)く。此(の)離(宮)ハ(須)磨(に)あ(り)須(磨)
ハ(凡)向(の)地(を)ち(ま)上(に)磨(る)べ(し)の(義)也(あり)。
離(宮)の(名)と(ち)ち(あ)り(し)と(思)ふ(寺)ハ(思)ひ(お)こ
が(陞)下(ハ)何(所)の(地)を(表)す(給)ふ(名)ハ(一)寺(あり)

へしとあるを、後に武庫の龍馬と呼ぶへしと
の御意ありたり。母須磨は武庫郡に属す。
北御命の七地名に因るにありしを、母須磨
平馬を伝へたる平氏戦敗の史蹟を聯ね
たる地あり、馬を伝へたる所以ありへしと語ら
る。

ち山伯坂本龍馬の事と語らるる由に龍馬の元
の起る北の人の北目、大なるホエはあり、寸飯の
毛あり、中曾、こんこの名あり、所以ありと。

○帝室御物殿：此今大宮にの陳列ありと云ふ終日
あり、佳きと観ふ、皆京大寺正徳物の存品也。正徳
物のそのる容易に見る所のたるもの、為りて皆如の寫
目のものなり、多くの記巻に述隋唐頃のものと云
ふも、是れ先皇の御文を贗物と云ふなり、
しるものあり、五六の経巻、世に知らざるもの
佛の研究の新材料と云ふなり、何れも貴重
なるものなり、此等の物に法隆寺傳來物を
徳方子関係の遺物數十點を陳列しあるを
見る、此等の京都に於て嘗て相観したること
あり、記憶に存するものあり、

五月十五日記

○文行中を流石家鴻集一冊を贈る、角田半冷山翁
本より、此書享保十四年家の清来と珠とを句に
誦し給ふもの、流石の珠を、巻首に家の園あり
次頁に白鳥集天家と誦する、律法を掛幅形の肉
に刻しあり、家鴻集詞六枚、家の大板と云ふ
紙背の体易寸松を紙石の誦に係る、松竹梅の集松竹梅の集に
狂詩を交り、漢和一首獨吟(紙石撰)三頁に記し
もの古あり、一枚四條夕寸、みの園あり、みきの見世札
か扇に大家の看版あり、又今宮御流所とある、扇も
同じ看版を掲げざるや扇あり、扇の具を元小、敗元
京都寺傳鳥丸も、舞形屋源左も、并堀川も、浅
屋庄兵衛も、價三十五圓、
五月十五日

○姉崎山流士より一冊のロジミウグワノを贈らる、
堅一寸三四分横寸許あり、表紙褪名の紙筒、巻首
書〇名の書名と圓あり、四馬林華を、鬼くの傳状を
書す、書名七文七語を難し、右楠橋士の名を
聖歌と譯し、流石師崎氏の出前を、クリ
シナ物語といふべき、この書を、問答問答を、
ホシベリ改り、紙洋紙、冊の体裁、洋装
より、内地の極めて、獲か、此書此書也、珍珍、意意す
ぬこ是る
五月十五日の記

お復

物に珍と申す程の物とは無之

ハハハハ即ち蒐集の中より所がハハハ

書物は Bhaganad-gita (高橋)

君の復は「聖教」と云ふこと

クリシト教の向方なるポニベイ

出版する先は所迄事まで

句

五月十日

姉崎之伝

市嶋老景

片右

○民衆の描致せしむる民衆藝術の漸ゆくは、
さるるに至るも自由の勢也。久しく蔑視せられたる
世は、ついに重んぜんとせしむる也。近年一より早き
近年と厲し他種と接するも、私にせよ、民衆
藝術の産地、埋没し、睡し、あつべきや、何れも、
知人、梅嶽、日年、民衆用の衣服の列装を模して
出でたり、いん民衆のよあるんを、下手のよある
あつたり、下手の扱はあつたり、其の民衆藝術
の味を、富を、余に、割れ、地を、陶器の類、よも、
手扱し、其美を、是物、せん、ことと、其へり、
民衆藝術、彼と、設けんと、公せつ、あつ、よある、
知人も、あつ、いん、た、よある、得、よある、
其の

趣 旨

時充ちて、志を同じくする者集り、茲に「日本民藝美術館」の設
立を計る。

自然から産みなされた健康な素朴な活々した美を求めらるるなら、民
藝 Folk Art の世界に來ねばならぬ。私達は長らく美の本流がそこ
を貫いてゐるのを見守つて來た。併し不思議にも此世界は餘りに日
常の生活に交る爲、却て普通なもの貧しいものとして、顧みを受け
ないである。誰も今日迄その美を歴史に刻もうとは試みない。私達
は埋もれたそれ等のものに對する私達の盡きない情愛を記念する爲

に茲に此美術館を建設する。

必然蒐集せられる作は、主として工藝 Craft の領域に屬する。それは親しく人の手によつて作られ、實生活の用具となつたものを指すのである。わけても民衆に用ゐられた日常の雜具である。それ故恐らく誰の目にも觸れてゐる品々である。併し今日迄その驚くべき價値を反省した人は殆んどない。人々はかゝるものに如何なる美があるかをさへ訝るであらう。併し此美術館の成就に於て、凡ての危惧は一扫せられるにちがひない。それは新しき美の世界の示現として、豫期し得ない驚きを贈るであらう。

私達の撰擇は全く美を目標とする。私達が解して最も自然な健全

な、それ故最も生命に充ちると信ずるものゝみを蒐集する。私達はかゝる世界に美の本質がある事を疑はない。従つて此美術館は雜多なる作品の聚集ではなく、新しき美の標的の具體的提示である。

私達はかゝる美が、寧ろ美術品と見做されてゐるものに少なく、却て雜具として考へられる所謂「下手」のものに多いのを看逃す事が出来ない。もとより美は至る處の世界に潜む。併し概して「上手」のものは纖弱に流れ、技巧に陥り、病疫に惱む。之に反し名無き工人によつて作られた下手のものに醜いものは甚だ少ない。そこには殆んど作爲の傷がない。自然であり無心であり、健康であり自由である。私達は必然私達の愛と驚きとを「下手もの」に見出さないわ

けにはゆかぬ。

のみならずそこにこそ純日本の世界がある。外來の手法に陥らず他國の模倣に終らず、凡ての美を故國の自然と血とから汲んで、民族の存在を鮮かに示した。恐らく美の世界に於て、日本が獨創的日本たる事を最も著しく示してゐるのは、此「下手もの」の領域に於て、あらう。私達は此美術館を日本に残す事に榮譽を感じないわけにはゆかぬ。

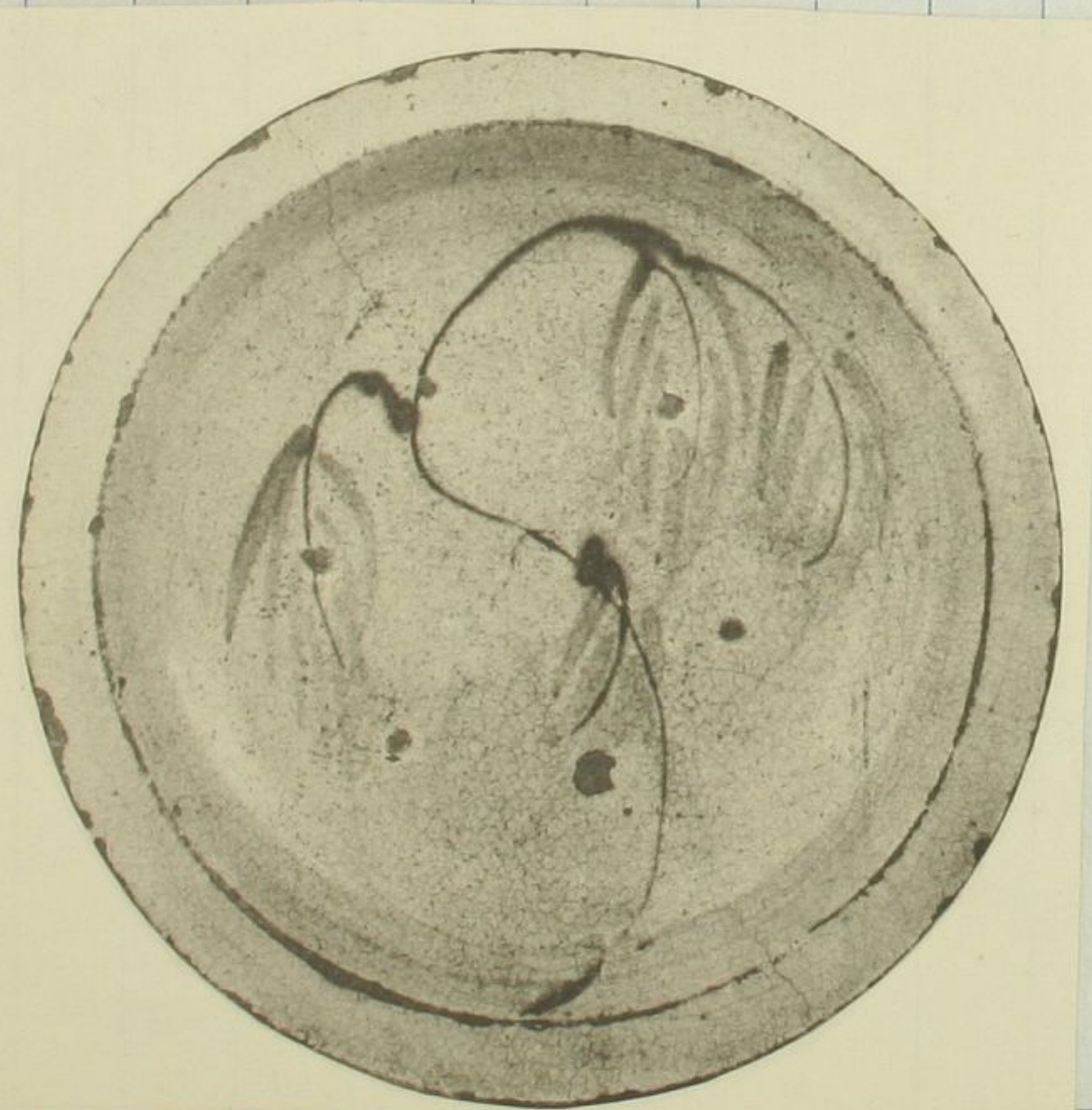
幸ひにも私達はそれ等の美を認識し得る時代に達した。又それ等の美を要求する時代に活きる。彼等は愛せられる爲に、長い間私達を待つてゐた様にさへ考へられる。若し私達が今それ等のものを集

めずば、凡てのものは注意される事なく失はれて行くであらう。何故ならそれは今日迄一般からも鑑賞家からも歴史家からも、省みを受けてゐないからである。同時に價值なく考へられてゐる爲、今尙巷間に散在し、その市價はまだ極めて低廉である。而も日常の用具であつたから、數に於ても乏しくはない。私達は今此絶好の機會を捕へて、それ等のものを蒐集しようとするのである。

民藝の美には自然の美が活き國民の生命が映る。而も工藝の美は親しさの美であり潤ひの美である。凡てが作爲に傷つき病弱に流れ情愛が涸死して來た今日、吾々は再び是等の正しい美を味ふ事に、感激を覺えないであらうか。美が自然から發する時、美が民衆に交



手紙の二



る時、そうしてそれが日常の友となる時、それを正しい時代であると誰か云ひ得ないであらう。私達は過去に於てそれがあつた事を示し、未來に於てもあり得べき事を示す爲に、此「日本民藝美術館」の仕事を出發させる。

大正十五年四月一日

富本憲吉
河井寛次郎
濱田庄司
柳宗悦

趣意の最も急所を觸れ、真心の筆をふるふ。九月十五の録

逍遙選集に就て

演劇圖書館建設の宿願成就のために

坪内老博士の發心

市島春城氏談

坪内君が自著を選んで選集として出すといふは勿論自分にとつて喜ばしいものである。が、さし當つてそれについて考へると極めて取止めのないとなつてしまふ。一體この金では幾度か自分も考へその度毎に坪内君にすゝめたが、いつでも拒絶された。自分は親友として他のとなら大體容れられるのだが、この事に限つて斷乎としてことわられた。さうした譯だから書店の勧誘等には當然應ずべくもなかつた。坪内君は非常に作に凝る人で、努力の結果出来て見ると、何時でもこれを價値なしとして物によつては全然顧みない。これが坪内君の向上する所以で多くの文人が次第に世に忘れられて行くのに、かれのみ歴名のあるものことわりなのである。

坪内君は舊作を舊惡全書(舊譯全書をもつて)といつてゐる程で、處女作當時のものは舊惡中の舊惡として殆ど齒牙にかけてゐない。例へば『當世書生實錄』などを口にするの不快な顔をする位だ。世にはつてこんな意味をいふ

人もあるが、坪内君の場合は全くこれと違つて心からの苦白なのである。それ程であるから、それ等舊作を世に纏めて出すとは、念頭になかつたといつてよい。世の多くの入々、坪内君から見れば弟子の様な人が全集を出すのに、あれ程の人の全集が生れなかつたのは全くかうした原因に基く。

昨今は全集はやりの世である。が、若し書店の希望が猛烈な末、つい心を動かされたと思ふのは誤解で、これについては多少心を動かされた動機がある。

早稲田大學に演劇の圖書館を造りたい希望は自分にもあつたが、坪内君は最も熱心で、そのためには劇に關する内外の圖書(影し價格のものだが)を幾度か早稲田に寄付し、別して震災後は殆ど全部を擧げて寄付したのは人の知る處である。早稲田の圖書館には何萬といふ役者の浮世繪がある。恐らくこれ程の多數の芝居繪を蔵するのは單に圖書館といはず、早大を除いては全國にないであらう。その整理には一年以上を費して未

だ半分も片付かない。こんな風に早稲田には劇に關する書籍が多い。そればかりでなく、早稲田には坪内君といふ劇の人があつて、演劇圖書館を造るとは格別面倒でもなく、坪内君に對しては長年の斯に願つてゐる事となる。

坪内君は寡慾の人である。子弟が、ために計ると必ず拒絶する人である。たゞこの演劇圖書館のみは自分のためではなく、將來とも必要だから、それなら進んで賛成し出来るだけの努力もしようとは常語つてゐた。それでこれは自分の推測だが、この選集出版により多少とも利益があればそれを以て新圖書館の建設費に充てたいといふのが、坪内君の心を動かしたものだらう。

坪内君は寡慾の人である。子弟が、ために計ると必ず拒絶する人である。たゞこの演劇圖書館のみは自分のためではなく、將來とも必要だから、それなら進んで賛成し出来るだけの努力もしようとは常語つてゐた。それでこれは自分の推測だが、この選集出版により多少とも利益があればそれを以て新圖書館の建設費に充てたいといふのが、坪内君の心を動かしたものだらう。

純良清酒の代表
櫻正宗
宮内省御用達
純良清酒の代表

この選集について見ると、小説は殆ど見られない。君が文學に手を染めた抑々初めの作品、恐らく幾十とある小説を大膽に削除してゐる。これ等世に忘れられた作中には、今日却つて興味のあるものもあるが坪内君は「舊惡」として一べつだに與へない。その取捨はまことに嚴である。かうした時流にこびず多きをてらはない處に、君の恬淡な心懷が見られる。目錄によれば、主として劇に關する作品が多いが、その他多年磨心した倫理、修身に關する著述、藝術に關

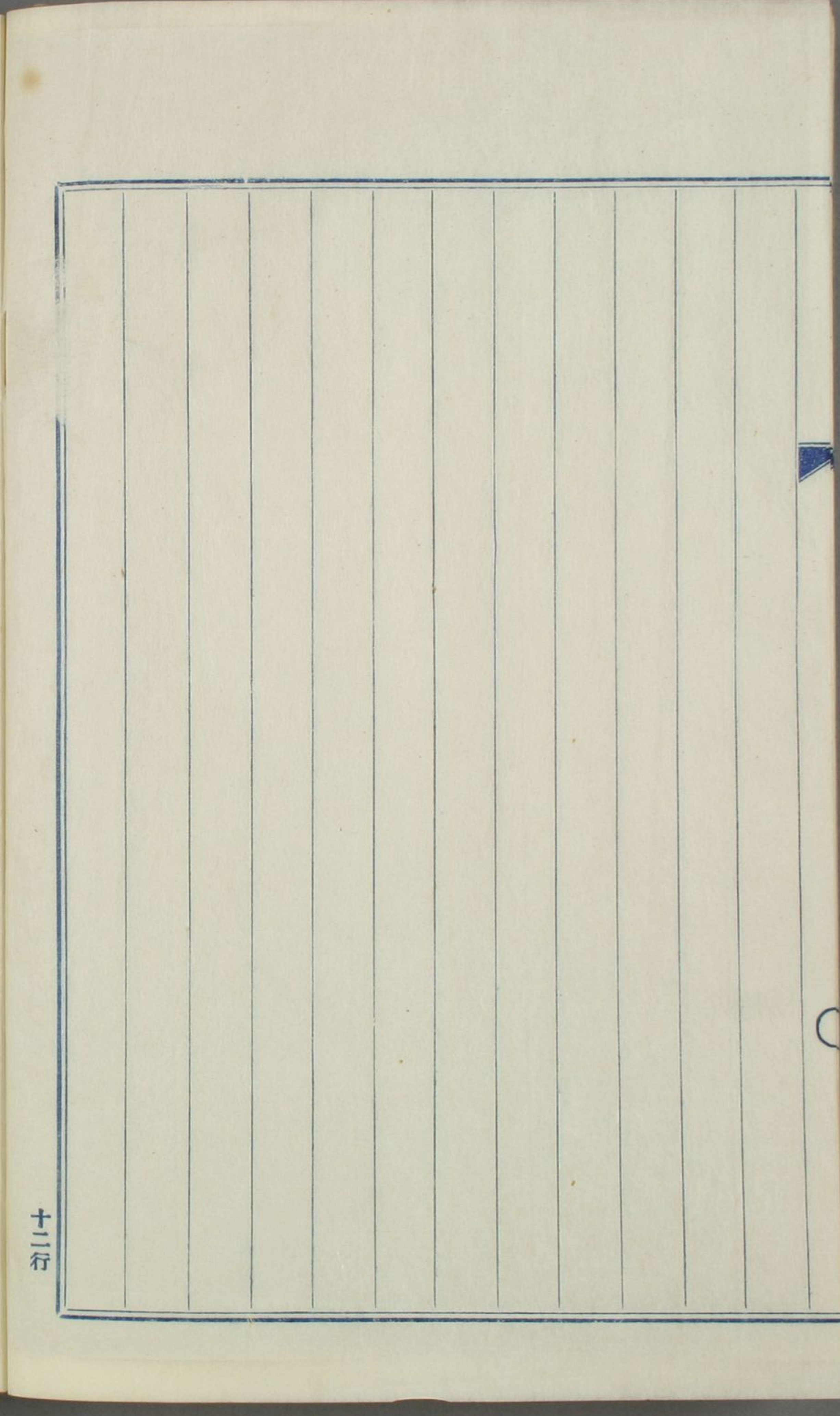
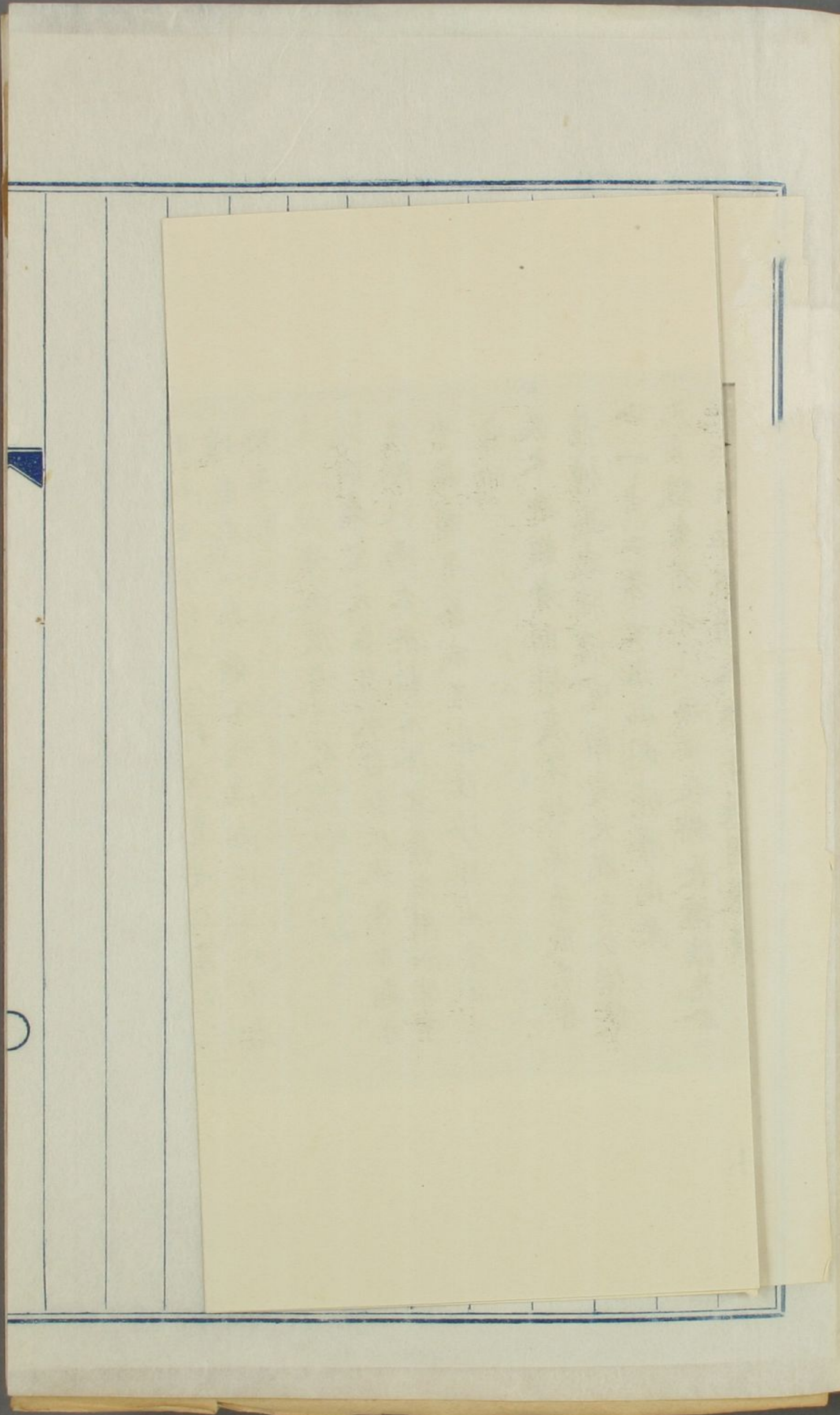
するその折々の文藻等もある。四十一年の文壇生活甲、君は開拓者として諸種の貢獻をした。小説を眞に理解しなかつた日本にその本質を教へたものは小説隨で



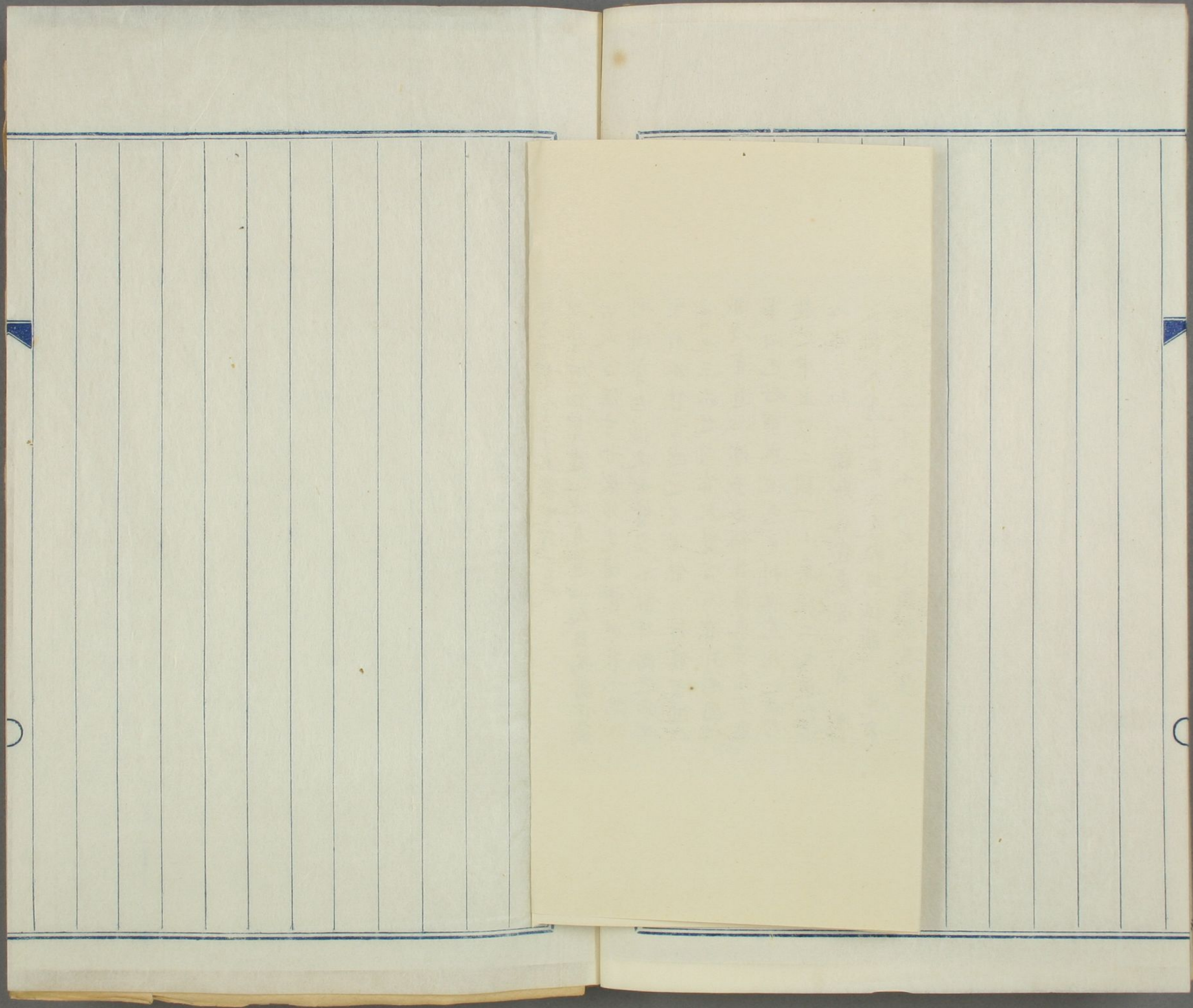
坪内君の肖像

大心十々月
十月十五の録

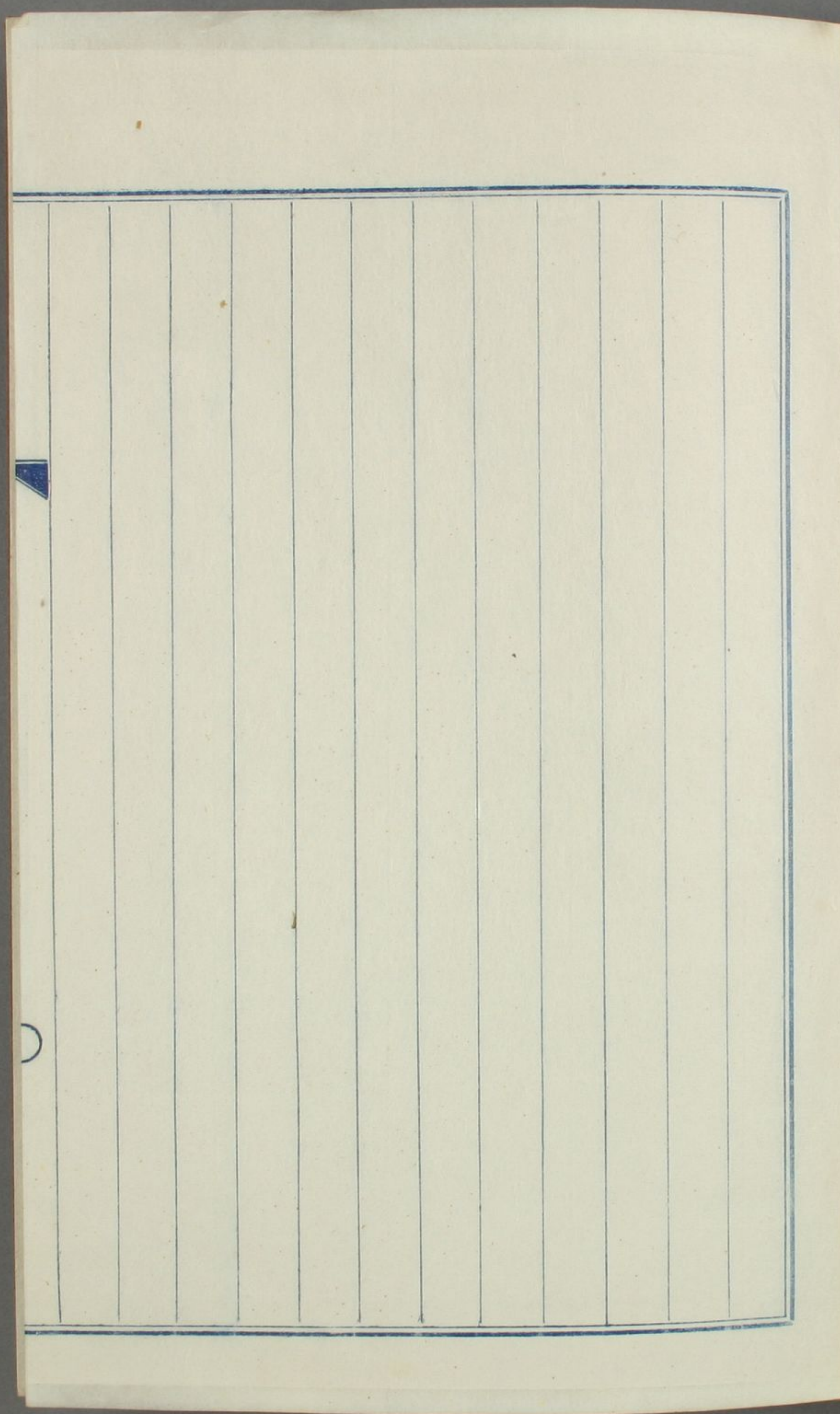
以下
7丁
白紙



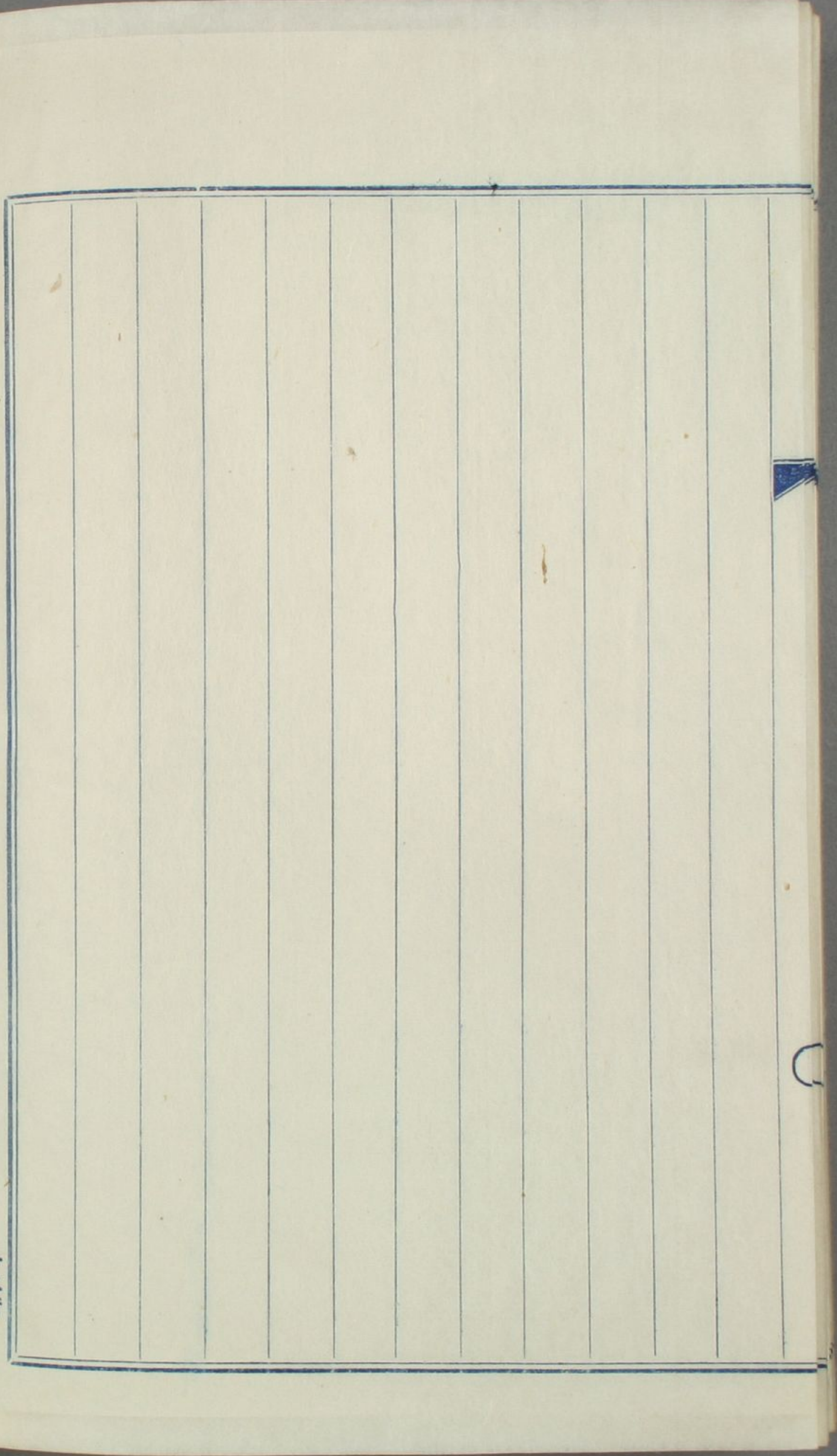
十二行

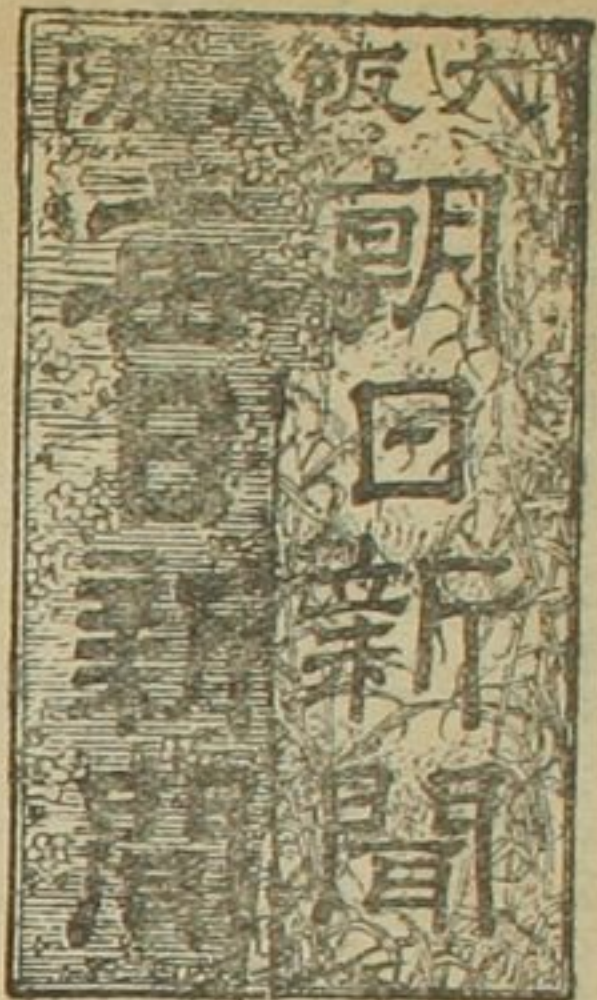


花月雪
 頁の「置書」本落酒の初最本日
 (照参文本)



十二行





「大朝」と「大毎」の発行部数

大阪朝日新聞——九十一萬六千六百部
大阪毎日新聞——八十八萬九千七百部

尾 藤 貞 一

▲大正十四年五月十五日號本誌上に、「大朝」と「大毎」の發行部数と題し、大阪の二大新聞即ち大阪朝日、大阪毎日兩新聞の各發行部数を掲げたが、爾來滿一ヶ年を経たる今日、兩社の部数は如何なるものか、茲に又最近調査に依る兩社の部数を示して多數讀者の參考に供することとした。

▲「大朝」と「大毎」の發行部数は、從來屢々新聞雜誌等にも記載されて居るが、之れ等の數字は殆んど信ををくに足らざる想像的數字のものであつて、實際其部数の最も正確に近いものを示すことは、難中の至難事であると共に、門外漢の到底窺ひ知る事を得ない所である、現に兩社の發行部数は、其社の社員すら掛員以外の者は知るに由なく、販賣部員が八十萬部といへば夫れを信じ、又百萬突破といへば、これを信じて言ひ傳ふる等、其正確に近い數は、容易に知り得らるゝ譯のものでない、然るに筆者が今茲に此難事とせられて居る、兩社の發行部数を如何にして明示するを得たか、調査の方針は昨年同様先づ兩社印刷機の台數並に之れに附帶する諸般の設

備、使用捲取紙の數量、印刷用インキの使用量、刷出後遞送部より搬出せらるゝ個數、各驛の取扱斥數、即ち汽車積は大阪驛を主とし、關西線湊町驛、片町驛、汽船は大阪高松荷扱所、更らに大阪市を中心とせる阪急、阪神、南海、大軌、大鐵、京阪等の各電鐵を利用する、新聞電車による運搬の數量並に大阪中央局差立の海外郵送等に到る迄、最も詳細に調査を遂げたものであるから、該數字が假に當らずとも遠からざるものである事を、確かに信じて疑はない、殊に昨年五月十五日本誌上に、兩社同年四月末の數字を掲げた處、「大朝」の某幹部の一人は其數字を見て、眞に近きを驚いたといふ一事に徴するも、我輩の調査が如何に、正確であるかと判る譯である。

▲其處で今兩社の大正十四年四月末と大正十五年四月末との發行部数及び各地方に於ける部数の増減を對照表に示せば左の如くである、(但し算出の結果百部以下の端數は不詳である事を豫め斷つて置く)

兩紙の比較評

▲大正十四年四月末「大朝」の八十二萬五千五百部に對する、「大毎」九十二萬六千四百部、其差即ち九萬九千九百部「大毎」の優勢なりしに比べて、本年の「大毎」と「大朝」の差は僅に其三分の一強、二萬六千九百部に過ぎざれども、「大毎」が依然昨年比し、二萬六千七百部の減數に止まれるに對し「大朝」が九萬〇九百部の昨年の差を突破し、更らに二萬六千九百部の超過數を示したるは、要するに前後を通じて十一萬七千八百部を増加したるものといふべく、今これを各頒布地方別に就て比較詳論せば、大阪附近の「大朝」二十一萬八千五百と「大毎」十九萬二千八百は、何んと言つても「大朝」に一日の長あるために外ならず、「大毎」は之れが濫駕策に就て、常に苦心する處なれども、既に京、阪、神地方の如き都市に於ては兩紙の購讀率が細密なるだけ、一部の擴張も容易ならざるものにて、右表中「大朝」の二千八百の増に對し、期せずして「大毎」の二千八百減は興味ある數字といふべく、兵庫縣、京都府、滋賀縣の各増減は一進一退を免れず、殊に名古屋方面は東海道に於ける關西、關東新聞頒布の分水嶺の地にて、「大朝」昨年の五萬三千二百が、本年六萬五千六百となり、一躍して一萬二千四百部を増加したるは、注目し値すべく、名古屋以東は兩社共平凡、更らに東京方面の「大朝」四萬九百は昨年比し、一千三百を増加したるに「大毎」の二千三百減は、「東京日々」の近時著しく發行部を増したるに基因すべく、なほ東京以東に於ける兩社の減退は、東朝、東日兩社共に擴張

の結果と見るを得べし、次に北陸方面「大朝」の一萬二千二百部の増加を見たるは異數にして、之れに伴ふ「大毎」の減は何物かを語る數であらう、なほ山陰、山陽、四國を通じて「大朝」が一般に増加したのは、彼の歐訪大飛行に依る賜にして就中九州方面の三萬一千六百部の増加數に對し「大毎」一萬四千八百の減を示したのは、昨年四月「大朝」が購讀料引上げ(元の一圓に復舊)を各販賣店に交渉中の折柄、著しく其數を減じつゝ、ありしものなるが、其後同地方も定價を一圓に復舊と共に、全力を傾注して挽回に努めた結果、豫期の成績を擧げ得たものと思はれる、以下朝鮮、滿洲、支那方面も亦、訪歐飛行の壯舉に依つて意外の人氣を博し、各地方共若干の増加を見るに至つたのであるが、「大毎」の朝鮮方面は由來優勢の地位にあり、依然として紙數の増加を示し、「大朝」との差一萬を算するは蓋し異數である。

▲要するに現在我日本の狀態から算出して、大朝、大毎は共に其發行部数は先づ八九十萬内外といふ所が正味であらうと觀測される、先づ地勢上から見ると、發行所が關西に在る爲め自然各社の勢力は關西地方に擴まり、現に前記統計表の示すが如く、其總發行部の大部分は、大阪以西に頒布されつゝある今日、最早やヨリ以上の部数を確實に保有し得る事は、難事にして兩社が現在數を永續するにも、終始弛ざる努力が肝要であると思ふ。(五月二日稿)

大阪朝日、大阪毎日新聞発行部数比較対照表

(表中▲印は増、△印は減)

地方別	大阪朝日		大阪毎日	
	大正十四年四月末	大正十五年四月末	大正十四年四月末	大正十五年四月末
大阪府(神戸市を含む)	二一五、七〇〇	二一八、五〇〇	一九五、六〇〇	一九二、八〇〇
兵庫縣	七一、〇〇〇	七三、一〇〇	七五、〇〇〇	七三、五〇〇
京都府(京都市を含む)	七五、三〇〇	七九、四〇〇	九八、七〇〇	九七、九〇〇
滋賀縣	一九、〇〇〇	二一、〇〇〇	二一、〇〇〇	二〇、七〇〇
名古屋方面	五三、二〇〇	六五、六〇〇	五六、四〇〇	五三、八〇〇
名古屋方面	二〇、〇〇〇	二一、〇〇〇	一八、〇〇〇	一九、二〇〇
東京方面	三九、六〇〇	四〇、九〇〇	三六、八〇〇	三四、五〇〇
東京方面	二四、〇〇〇	二二、〇〇〇	二一、〇〇〇	一九、三〇〇
北陸方面	二九、〇〇〇	四一、二〇〇	三二、一〇〇	三一、六〇〇
山陰方面	一八、六〇〇	二三、五〇〇	二四、八〇〇	二二、三〇〇
山陽方面	三七、五〇〇	四二、八〇〇	四一、〇〇〇	四一、五〇〇
九州方面	七五、三〇〇	八四、一〇〇	九五、〇〇〇	九八、二〇〇
朝鮮方面	八八、一〇〇	一一九、七〇〇	一二一、五〇〇	一〇六、七〇〇
滿支方面	三二、四〇〇	三五、〇〇〇	四三、二〇〇	四五、〇〇〇
臺灣方面	一六、〇〇〇	一六、八〇〇	二五、〇〇〇	二二、三〇〇
海外郵送	七、八〇〇	八、五〇〇	九、一〇〇	七、八〇〇
合計	八二五、五〇〇	九一六、六〇〇	九一六、四〇〇	八八九、七〇〇

以上の統計表に依れば兩社の總發行數は
大朝 九十一萬六千六百部

大毎 八十八萬九千七百部
差引 二萬六千九百部(大朝の優勢を示す)

簾視壁聽

▼花の吉原に、いとも妙なる營みの侍べるを、新らしき人は稱して人肉の市といふめり。
▼遊びの廓といひ、花の街とよび、戯むれのうてなといふは大和ことばの呼びならはしなり。
▼さるを人肉の市といふは、流石は肉食に飽くなき夷狄禽獸の言葉にてはありけれ。
▼その人肉の市とやらんより、天職を放擲して逃げ出したるは、名に負ふ『春駒』なり。
▼憂き川竹の身を恥ぢて、救ひを求めたるは、人もあらうに莫連女宮崎白蓮なり。
▼白蓮がありし昔を尋ねれば、彼女も亦た金に賣られて傳ネムに買はれたる、臀肉の市なりけり。
▼白蓮が傳ネムを足蹴にかけ、仇し男と乳くり合ひたるを、春駒が自由廢業と見たるは炯眼なり。
▼同病相憐れむと古へよりいへるを、白蓮が春駒に惱むの色あるこそ可怪しけれ。
▼白蓮が夫を捨てたるは、臀肉の市に恥ぢたるにあらず、相手に若き燕を得たればなり。
▼春駒がくるわを出でたるは、相手なくして人肉の市を捨てたるなり。されば白蓮に勝るとも劣らず。
▼吉原ばかりが人肉の市かは、市はカッソエにあり、ホテル

にあり、峨々たる邸宅の中にもあり。
▼リツチ愛子の話は古りにたり。春風のなまめく噂は東京驛頭のステーションホテルにあり。
▼花は異國の土にも咲き、ホテルに入れる金髪美人あり。
▼花の盛りを一人旅とは見えにけり。
▼桃色カーテンの裾長く、白きベットの下に、ほのかに口を開けるバスケットありき。
▼中に金毛燦爛たる天の逆鋒あり。ボーイ即ち破顔一笑、ひとりうなづきて去りけるとかや。
▼又も入り来る一洋婦のありければ、ボーイ私かに百花繚亂の畫帖を示して曰く『金三百圓』
▼『妾は宣教師にてありんすぞや。こは何事』と卓上電話を取り、『警視廳へ願ひます』
▼南無三、四九尻つたりと逃げ出すボーイをとつておさへ、『畫帖はこちらへ』とさらはれける。
▼ボーイ進退維れ谷まり、『さらば破つて捨てん』といふを、まアまアまつたと引き寄せたり。
▼春風は千里同風、人情に變はりはなしと知られにけるが、サテモ巧みなりける宣教師なるかな。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二行

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二行

